

セカンド キャリア バイブル



スポーツゴジラ 24号 (2014年2月28日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 30号 (2016年3月5日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 34号 (2017年3月15日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 38号 (2018年3月15日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 39号 (2018年6月18日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 42号 (2019年3月11日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 46号 (2020年3月11日発行・2024年9月改訂) より抜粋
 スポーツゴジラ 57号 (2022年12月22日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 61号 (2023年12月11日発行) より抜粋
 スポーツゴジラ 62号 (2024年3月5日発行) より抜粋

スポーツネットワークジャパンと日本
 スポーツ学会は10年以上、アスリート
 のセカンドキャリアの研究をして参り
 ました。さまざまなカタチでのシンポ
 ジウム、講演などをまとめ、ご要望に答
 えて『セカンドキャリア・バイブル』と
 して読めるようにいたします。さらに、そ
 れらを通じて、スポーツ社会学研究の
 お立場から菊幸一先生にも新たに取
 材をいたしました。
 今後も、調査・研究したものなども追加
 してバイブルに加えて参りますので、
 アスリートの方々は未来のためにお役
 立て下さい。

プロ野球選手の セカンドキャリアを考える

第1回シンポジウム

構成／波多野圭吾



どんな選手であっても必ず現役生活の終わりが来る。
試合で結果を残していても、熱心に練習に取り組んでいても。
野球にだけ生きてきた選手たちは、その時、何を思い、どんな道を歩むことになるのか。
野球やスポーツを愛する私たちに、できることはあるのだろうか。
年齢も立場も異なる6名のパネラーとともに、プロ野球選手の第二の人生を考えたい。

長田 パネラーの皆さんには、事前に3つの質問をさせていただき、それぞれの答えをフリップに書いていただきました。本日は、その答えを元に、野球界におけるセカンドキャリアの問題を議論していきたいと思います。

驚きだらけのプロ野球界

長田 最初の質問は、「セカンドキャリアでびっくりしたこと」です。まずは田口さんからお願います。

田口 私は、大丈夫？と書きました。というのも、

最近、プロ野球選手のセカンドキャリアを考える上で、「大丈夫？」と感ずることが二度もあつたんです。

初めに感じたのは、先日参加した「学生野球資格回復研修会」の時でした。この研修会はプロ野球の退団者が学生野球の指導者になるために参加するもので、サインをお願いしたくなるような有名な方がたくさん参加していました。私はセカンドキャリア

の支援活動をしていますから、研修会に参加している元選手たちが、今どのような生活をしているのか、どんなやりがいを持っているのかに注目していました。ところが、参加者の9割5分は死んだような目をしています。サラリーマンに転身した選手に向かって、「サラリーマンなんてつまんねえだろ」と平気で言う人もいました。当の本人が「サラリーマン楽しいですよ」と話しているにもかかわらずです。サラリーマンをしている元選手は、野球以外の仕事に面白さややりがいを感じているからそう話したんだと思います。でも、ほとんどの元選手は野球以外の仕事に面白味を感じられず、野球界に戻りたいと心のどこかで思っている。僕から見れば、「プライド高き過去の人たち」という感じで、「そんなことで大丈夫？」と思うわけです。

二度目に感じたのは、ずいぶんと前に引退した大投手が、後輩の元選手に対して「自分を雇ってくれないか」とお願いしているという話を聞いた時です。

長い間仕事もなく、後輩に就職の世話をお願いする。前述の研修会の話もそうですが、「セカンドキャリアに対してそんなに低い意識で大丈夫ですか？」と感じました。

長田 川口さんはいかがですか。

川口 私は3年前に球団から戦力外通告を受けました。その際に、てっきり球団から再就職の情報を受けるものと思っていたが、実際には何もありませんでした。ですから、プロ野球界におけるセカンドキャリアの**情報の少なさ**は非常にびっくりしましたね。戦力外となった選手たちは、皆「どうしよう……」と頭が真っ白になってしまっています。

社会に出るための情報を一つでも多く提供できれば、選手たちの不安を取り除けると思います。

小林 私は**就職先**です。プロ野球選手だった人の引退後の生活を見ると、ほとんどの人が飲食業でご活躍になっています。これは、言い換えると飲食業以外の就職先が少ないということなんだと思



小林一光

(エイチアイエデュケーション 代表取締役社長)

1965年、東京都出身。87年、早稲田大学卒業後、株式会社日本交通公社を経て、ブルデンシャル生命保険株式会社へ引き抜かれ転職。その後、営業マンとして売上成績日本一、営業マネージャーとしてチームを業績日本一に導く。2013年、株式会社エイチアイエデュケーション設立。プロスポーツ選手のセカンドキャリア支援としてアスリートや大学生に実践的スキル＆マインドを教育し、企業とマッチングさせる人材紹介事業を始めた。



川口寛人

(NPO法人ASS 理事長)

1985年、神奈川県出身。山梨学院大学を卒業後、2010年読売ジャイアンツから育成7位指名を受け入団。翌11年肩の故障などにより退団。12年お好み焼きチェーン株式会社道とん堀開発部の配属に伴い、セカンドキャリアサポートの活動をスタート。日本野球機構、日本プロ野球選手会、日本プロ野球OBクラブと情報交換、共有を行いながら13年11月NPO法人ASS(アスリート・セカンドキャリア・サポート)を設立。選手への情報提供を柱に活動を広めている。



田口竜二

(白寿生科学研究所人材開拓グループ長)

1967年、広島県出身。84年、都城高等学校のエースとして春夏甲子園出場。南海ホークスからドラフト1位指名を受け、85年入団。怪我により90年に引退するが、94年に現役復帰。翌95年、左肘の故障により再び引退。その後二軍用具係、二軍マネージャー、ホークス球団営業などを経て、現職。引退選手を自社の営業として雇用するなどのセカンドキャリア支援を行う傍ら、独立リーグや大学、高校などで人間教育講座セミナーを行う。

います。私のところにも、「就職先を紹介してくれないか」と多くの問い合わせがきます。私はずっとプロ野球に憧れてきましたから、この現実には非常に驚きましたね。

教育システムにも問題あり

大竹 私は、日本の教育の現状を考えると、選手が困るのは**当然(の結果)**だと思います。

大学の授業を見てみても、野球やアメリカンフットボールなどの強化指定部に所属する学生は居眠りばかりで授業を真面目に聞いていません。起きている学生であっても、授業に取り組む姿勢がとても消極的で質問をしても答えが返ってこない。そういう集団がいると授業の雰囲気が暗くなるので、私としては出ていつてもらって結構なのですがそうもいきません(笑)。現在の日本の教育システムでは、彼らは勉強せずにスポーツだけしていれば良いことになっているのです。でも、せっかく高い授業料を



手塚康二

(NPBキャリアサポート担当)

1948年、東京都出身。70年、明治大学を卒業後、株式会社ロッテアドに勤務し宣伝業務に携わる。85年ロッテオリオンズに出向しチーム広報として5年間チームに帯同。92年川崎から千葉への本拠地移転に伴い営業に配属され千葉県内の営業活動に従事。95年ボビー・バレンタイン監督就任と同時にチーム運営に携わり再びチームに帯同。その後NPBに転籍しキャリアサポートの担当になり現在に至る。



田中健

(東京都議会議員)

1977年、静岡県出身。2001年青山学院大学を卒業後、株式会社第一勧業銀行へ入行。03年大田区議会議員当選。09年東京都議会議員に当選し、現在2期目。都議会議員として東京国体推進議連や五輪招致議連に所属し、スポーツの振興を議会を通じて訴えてきた。大田区では学校の校庭の芝生化を推進。城南少年年次野球連盟、千束地区少年野球連盟等の顧問も務め、10年以上にわたり子供たちの野球環境の発展に力を注いでいる。



大竹弘和

(神奈川大学人間科学部教授)

1955年、東京都出身。78年、日本体育大学卒業後すぐに公務員となり、経営コンサルタント会社社長を経て現職に。2000年、公務員時代に筑波大学大学院修了。神奈川大学指定管理者モニタリング評価研究所長、株式会社総合システム研究所代表取締役も務める。専門はスポーツビジネス・マネジメント、公共政策とスポーツ。スポーツ界における公民連携手法やモニタリング、施設マネジメント等の研究や実践の第一人者として講演や執筆活動に奔走する。

払って大学にいるのに、スポーツしかやらないのは非常にもったいないと思います。

現在は勉強に真面目に打ち込んだ学生であってもなかなか就職できない時代です。3年生からセミナーや面接を繰り返してやっと就職先を見つけれれるのに、大した努力もせずにスポーツばかりしてきた人間が引退して簡単に就職先を見つけれれるはずがないんです。ですから、そうしたシステムを容認してきた日本の教育現場やスポーツの指導者は大いに反省すべきだろうと思っています。

長田 田中さんはどのようにお考えですか。

田中 東京都は、2020年のオリンピックに向けて「スポーツ都市東京」の実現を目指しています。先日、そのための指針である『東京都スポーツ推進計画』が策定されたのですが、そこにセカンドキャリアに関する記述は一箇所しかありませんでした。ですから、私は **1** と書かせていただきました。

東京都は「スポーツに理解のある都市を作る」と

いいながら、セカンドキャリアに関する意識は驚くほど低いものとなっています。前述の推進計画における記述の少なさもそうですし、産業労働局に問い合わせてもアスリートに配慮した再就職のプログラムは整備されていません。教育面も、スポーツに関連するものはオリンピック教育がほとんどで、セカンドキャリアに関するものはないんです。残念ながら、東京都においては「アスリートのキャリアを支援する」という発想がないのが現状です。

長田 手塚さんはいかがですか。

手塚 私は、最近の選手が **サラリーマン的** になったと感じています。以前は遠征中に飲み歩いたりする豪快な選手が多かったのですが、現在は宿舍もシングルルームになり、試合や練習以外の時間をひとりで過ごす選手が増えてきています。「自分の仕事は野球だから、それ以外のことに時間と労力は割かない」というスタンスなんでしょう。でも、先輩選手との食事の場には、上下関係や社会性を養うとい

う側面もあつたはずですからその辺りは少し心配ですね。

早くから厳しい話を

長田 NPB（日本プロ野球機構）は、選手にセカンドキャリアに関するアンケート調査を実施しているそうですね。

手塚 6年ほど前から、秋期教育リーグ（フェニックス・リーグ）に参加する選手を対象に実施しています。調査の結果、6年間の平均で73・2%の選手が「引退後の生活に不安がある」と回答しています。不安を感じる項目は、「収入」と「進路」がほとんどで、この二つで全体の87・8%を占めています。

長田 そうした選手たちへの支援策はあるのでしょうか。

手塚 球団によってまちまちなのですが、新人選手向けに講演などを依頼されることはあります。ただ、そうした球団もセカンドキャリアに関する話はNG

とするところが多いですね。

長田 野球選手の平均プレー年数が7年ですから、引退後の人生の方がはるかに長いですよ。

手塚 全くその通りですが、選手はそのことに気がつきません。御山の大将のようにオレだけは大丈夫と思っていて、気がついたときには手遅れとなっている。ですから、選手が不安に感じている収入と進路に関する支援だけでは不十分なんです。早い内から、「来年、君たちは野球界にいないかもしれないよ」と厳しく話した方がよい。戦力外になったからと駆け込み寺のように私たちのところに相談に來られても、対応できないことが多々ありますから。例えば、ある程度の貯蓄があれば次の仕事までの準備ができますが、全く貯金がない選手はそうもいきません。だからといって、プロに入ってすぐの選手に「貯金しておきなさいよ」と言ってもピンとこないでしょう。ですから、最近はプロ入りして3年目くらいの選手にセカンドキャリアの話をするのが良い

のではないかと思っています。それくらいであれば、ある程度自分の力を把握しているでしょうし、後輩選手も入ってきて危機感を感じられるようになっていきます。アンケートに協力してくれている選手たちの平均年齢が23・9歳ですから、あながち間違っていないと思うんですね。

悲しき現実

長田 田口さんはドラフト1位でプロ入りしていますが、現役生活中にその後の生活のことは考えていましたか。

田口 いえ、全く。自分が辞めた後のことをイメージして野球をする人間はいないと思いますよ。

長田 周囲のアドバイスはありましたか。

田口 それもありません。今でこそセカンドキャリアという言葉がありますが、僕らが現役の頃はそんな言葉はありませんでした。とにかく野球だけやっていればいいという時代だったんです。入団3年目

に「こいつには勝てないな」と思わせる後輩が入ってきて、初めて引退後のことを考えましたね。

長田 川口さんはどうでしたか。

川口 私は入団1年目に戦力外となってしまったので、「まさか」という感じでした。セカンドキャリアのことなんて考えもしなかったし、助言してくれる人もいませんでしたね。

田口 野球界には「野球のことだけを考えていればいい」という風潮がありますからね。昔、私がまだホークスの営業だった時に球団内でセカンドキャリア支援の企画を提案したのですが、「野球選手は野球だけしていればいい」の一言でおじゃんになりました。野球界の人たちは、野球というファーストキャリアで生きている人ばかりですから、セカンドキャリアのことなんて考えたことがないんです。悲しいですけど、それが野球界の現実ですね。

長田 選手だけでなく、球団スタッフなどの関係者もセカンドキャリアに対する意識が低いんですね。

環境と教育

長田 では次です。単刀直入に伺います。「元プロ野球選手は社会で通用するのか?」、皆様いかがでしょうか。

手塚

それは

失礼な質問

だと思っていますね(笑い)。

世間は選手を「野球バカ」と認識しているかもしれませんが、ただのバカでは野球界の頂点であるプロ選手にはなれません。彼らは野球以外の能力を発揮する機会に恵まれなかったただけなんです。学問で発揮することはなかったかもしれませんが、頭が良い選手が実は多いんですよ。

選手が一軍に帯同するようになると、表敬訪問などに参加する機会が増えていきます。すると、入団した頃に挨拶ひとつできなかった選手が見違えるように成長していくんです。野球選手は良い素質を持っていますから、環境と本人の努力次第で大きく成長することが可能なんです。ですから、選手たちは

恐れずにどんな外の世界に飛び出していつて欲しいですね。「野球選手はこんなに使えるんだぞ」と社会にアピールしてきて欲しいと思っています。

田中

私も野球選手は使えると思います。ですから

○

(丸) ですね。

東京都は、東日本大震災の発生後にアスリートの派遣事業を実施しました。そこで被災地の方々に一番喜ばれたのは、野球選手だったんです。野球選手はこうした形で社会貢献ができるのですから、国や行政がアスリートの価値を理解したセカンドキャリアの支援策を整備していく必要があると思います。ただ、こうした事業で派遣されるのはオリンピックのメダリストなどの著名な選手が中心ですから、全ての選手に当てはまるものではありません。

長田 高校野球の選手の中には、授業もそこそこに練習や試合に出かける、漢字もろくに書けない。そんな選手が珍しくありませんね。それでも本当に野球選手は使えるのでしょうか。大竹さん、いかがで

すか？

大竹 私は、**使えない…しかし…**と書きました。

野球に限らず、トップアスリートの多くは自分の得意な分野にのみ身を置き、自分が気の許せる人間とだけ生活しています。しかし、そのように限られたネットワークだけで生活しては、リスクヘッジとして有効な「総合力」を身につけることができません。アスリートの潜在能力はとても高いのですから、それを引き出し、あらゆることに対応できるようにしっかりと教育を施すことが重要です。また、現役でいられる時間よりも引退後の時間の方が長いことを理解させることも大切でしょう。

メディアや競技団体も、アスリートの扱い方を再考する必要があると思います。アスリートとしての成功は勝利に限定されるものではありませんし、漢字が読めないアスリートを面白おかしく取りあげるのは世間にスポーツの負のイメージを強調することにつながります。そういう取り上げ方ではなくて、

アスリートがスポーツを通してどのような能力を身につけてきたのか、次のキャリアでどう社会に貢献しようとしているのかを正しくPRしていく必要があると思います。

長田 小林さん、選手自身が自分のことをどこかで諦めているとは考えられませんか。

小林 それは大いにあるでしょうね。現行の教育システムでは、選手は野球だけをしていればいいので勉強などの他分野における自分の能力を信じられない人が多いと思います。でも、私もプロ野球選手は**使える**と思っています。ただし、そのためにはいくつか条件があります。

ひとつは、選手に対してしっかりと、正しい**教育**を施すことです。人生は正しい答えがあるものではありませんから、自分自身で物事を考え、答えを選択しなければなりません。選手がひとりでも生きていけるよう、教育によってそうした力を養っていく必要があります。もうひとつは、選手自身が社会に

適応するために **やる気(変わる気)** を持ち、意識をしつかりと切り替えることです。周囲がどんなに支援の手を差し伸べても、本人にその気がなければ話になりませんからね。

目標と学び

長田 元プロ野球選手である田口さんは、こうしたお話を聞いてどう思いますか。

田口 使えない人は使えないと思います。

長田 使えない人もいる!? それはどんな人ですか。

田口 野球を捨てきれない人ですね。プライドが高すぎて、野球以外の道に進もうとしない人は使えないと思います。ですから、私は **優先順位** が重要だと考えています。もちろん、現役生活中は野球が一番大事でしょう。でも、引退したら野球を100番目くらいに下げなければ絶対に成功しません。

長田 野球を100番目にして、新しく何を1番目に持ってくるのですか。

田口 新しい生きがいです。野球に真剣に取り組んだことを自信にするのはいいのですが、自分の中で野球の位置づけを意識して下げられないようでは絶対にセカンドキャリアで成功しないんです。社会で理不尽なことに直面した時、野球に未練を持っていると「野球界に戻りたいなあ」と逃げてしまう。

野球選手の目標達成能力は非常に高いものがあります。目標さえきちんと設定できれば、そのための努力、野球で言えば練習を怠ることはありません。世間で言う努力は、多くの場合「学ぶこと」です。野球選手は「勉強」という言葉は嫌いですが、「学ぶこと」は好きな人が多いんです。練習に熱心に取り組むのも、肌で技術を学ぼうとしているからです。ですから、何を学ぶべきなのかをきちんと示してあげれば、選手たちは決して手を抜くことなく取り組んでくれると思います。

長田 元プロ野球選手の川口さんはどうですか。

川口 私 **も** **使い方次第では使える** と考えています。

今のプロ野球選手は「ゆとり世代」の選手が中心です。世間では、ゆとり世代はコミュニケーション能力が低いと言われていますが、私はそうは思いません。ゆとり世代は週休二日制のカリキュラムで育ちましたから、土日は自由に過ごすことができました。プロ野球選手になった人であれば、週末は野球に明け暮れていたことでしょう。周囲がレジャーなどへ出かけ遊ぶ中、野球を通して礼儀やマナーを徹底的に指導されてきたはずですから、見方によつては今の選手たちはきちんとした教育を受けてきた人間だとも言えるわけです。

長田 選手を育てる環境がカギになりそうですね。

田口 私は、高校生の時に遠足や修学旅行に参加させてもらえませんでしたし、試験勉強を免除されることもありませんでした。プロ野球選手の多くは、自分の頭を使って考える環境に身を置いてきませんでしたから、「学び方」がわからないんです。

長田 田口さんは、先ほど有望な後輩選手が入って

きてセカンドキャリアを意識し始めたと言いました。その後、選手としての未練が完全に吹っ切れたのには、何かきっかけがあったのでしょうか。

田口 私は、一度現役を引退し、3年間打撃投手として球団に勤めた後にもう一度選手に復帰するという珍しい経験をしています。二度目の選手生活中、当時の二軍監督に「その経験を生かして日本一のコーチになれ。そのために勉強しろ」とアドバイスもらったんです。それで完全に頭が切り替わりましたね。「勉強しよう」と思うようになりました。

長田 「コーチになるために勉強しよう」と思い、未練を断ち切ったわけですね。川口さんにもきっかけはありましたか。

川口 私はきちんと切り替えることができていませんでした。引退してしばらくの間は、自分に対する苛立ちもあつて元選手であることをなかなか口に出せませんでした。ところが、仕事をする上で元選手だったことを打ち明けてみると、びっくりするく

らいスムーズに話が進みます。「元選手」という肩書きはビジネスの世界では珍しいみたいですし、皆さん関心を持ってくれたので自分の存在が認められたような気がしました。今考えてみると、それが吹っ切れるきっかけだったのかもしれない。

セカンドキャリア問題の解決策

長田 やはり選手の意識と環境を改善していく必要があります。では、最後の質問です。具体的に「セカンドキャリアどうすればいいのか?」、パネラーの皆様に解決策を示していただきたいと思います。まずは大竹さんに伺いましょう。

大竹 答えは二つあります。

ひとつは**ジョブマーケットの拡大**です。一般的に、転職する際にはそれまでのキャリアの延長上にある職種を選ぶことが常識とされています。野球選手も同様で、それまでのキャリアの延長上にある職業に就くことが最も望ましいわけです。一番わかり

やすいのは監督やコーチなどになって野球そのものに携わることですが、これは競争も激しくなかなかなれるものではありません。ですから、スポーツに関連する他の職業を選ぶ必要があります。

スポーツビジネスの分野では、スポーツの職種を四つの領域に大別しています。一つ目は、スポーツそのものでビジネスを展開する領域で、プロスポーツチームやフィットネスクラブなどがこれに該当します。二つ目は、スポーツに関連する用具や施設でビジネスを展開する領域。三つ目は、スポーツと合体してビジネスを展開する領域。その代表はスポーツツーリズムで、海外で活躍する選手の応援ツアーや、ホノルルマラソンのような海外のスポーツイベントへの参加などがこれに当てはまります。昨年、ダルビッシュ有選手を応援しに米国を訪れた人は約1万人、経済効果が約200億円だったそうです。いかにこの領域の市場が大きいかがわかりますね。そして四つ目は、スポーツを支援する領域です。こ

の領域はスポーツに関係ない企業がほとんどで、スポーツのチームや施設をスポンサーという形で支援しています。スポーツビジネスと言うと、どうしてもスポーツに直接関連するものを想像してしまいがちですが、実はその関わり方には色々な形があるんです。ですから、就職先を考える際には広い視野を持ち、様々な領域を検討して欲しいと思います。

もう一つは、**ダブルキャリア**、つまりスポーツと教育の両立です。私のゼミに、プロ契約と同時に大学へ入学してきたJリーガーがいます。学業と競技の両立は選手にとって負担が大きいと思いますが、こうした選手が安心して競技にも学業にも打ち込める環境を構築していきたいと考えています。

長田 スポーツビジネスをもっと広く捉えること、スポーツと教育の両立が大事ということですね。

田中さん、行政はどんな解決策をお考えですか。

田中 最も意識したいのは、**Win-Win**の関係を作ることです。これまでのセカンドキャリアは、

選手個人の人脈などに依存することが多かったのですが、今後は行政が率先して再就職までの制度、仕組みを整えていかなければなりません。最も有効なのは、セカンドキャリアの指導員を養成することでしょう。スポーツやアスリートに精通した人間が支援に関わることが何よりも必要だと思います。

「スポーツバカ廃止制度」も面白いかもしれませんが、NCAA（全米大学体育協会）では、大学の単位が不足している選手の試合出場を制限する制度があります。東京都や日本の教育機関でも、そうした制度を取り入れてみてはどうでしょう。堕落した学生がいなくなれば大会のイメージは良くなりますし、学校側もきちんと教育をしていることをアピールできます。まさにWin-Winの関係を築けるわけです。

また、指導者の養成も合わせて考えていく必要があります。指導者の社会的価値がある程度高くなければ、誰もやりたいとは思わないでしょうし、指導

者の質も上がっていきません。ですから、行政はスポーツ指導者の養成や表彰の制度をもっと整備していかねばなりません。

長田 指導者のようにスポーツを支えている人を大事にするのは案外重要なことかもしれませんね。

手塚さん、NPBはいかがでしょう。

手塚 私がNPBに来た頃、セカンドキャリアに関する球団の認識は、「選手の自己責任」がほとんどでした。しかしながら、Jリーグにキャリアサポーターセンターができたことも影響して、少しずつその認識は変わってきています。選手を預ける親の立場で考えてみれば、子どもにセカンドキャリアの支援をしつかりとしてくれるサッカーをやらせるのはごく自然なことですからね。普段はバラバラな12球団も、セカンドキャリア事業に関しては満場一致で取り組むことになりました。

ところが、実際に始めてみると、これがすごく難しい。一番の問題は時間です。選手には純粹にオフ

と呼べる時間が2ヶ月ほどしかありませんが、そのオフも自主トレーニングなどに割り当てられるのがほとんどです。本来はオフを利用してセカンドキャリアの研修会などを行っていきたいのですが、なかなか選手と球団の理解を得ることができません。時間は自分で意識して作るものだと思うのですがね(苦笑)。研修だけでなく、選手の理解が得られるような支援策を色々と考えていきたいと思っています。

一番に考えるべきは人間教育

長田 選手はもちろん、球団による理解や取り組みも必要なわけですね。

田口さんはどんな解決策を考えていますか。

田口 今から私は**究極**的なことをお話しします。

プロ野球の二軍や三軍、大学や高校の監督は、野球の指導をする必要はありません。人間教育が一番のメインにすべきです。軍隊式の練習では人の心は育ちませんし、そもそも、プロに入るような選手に

技術の指導なんて必要ないんですよ。二軍はファームとも呼ばれますよね。本来は選手を育てる農場のようなところであるはずなんです。ですから、それらのチームを指導する人間は、野球しかやってこなかった人間ではいけないんです。選手の心を一番に育てられるように、専門的な勉強をしてきた人を指導者として配置すべきだと思います。極端な話かも知れませんが、こうしたことを現場レベルでやっていかなければセカンドキャリアの問題は解決していかないと思いますね。

長田 それは本当に究極的な話です。大いに、実現してほしいですが小林さん、セカンドキャリアの特効薬はありませんかね。

小林 選手に **意識改革** を促すことは、即効性があるんじゃないでしょうか。しっかりと教育を受け、最低限のビジネススキルを修得すれば、選手たちのセカンドキャリアに関する意識はだいぶ変わっていくはずです。もう一つは、就職に関する **情報** で

す。実は、プロ野球選手のような高い目標達成能力を持った人物を欲している企業はたくさんあるんです。でも、残念ながらそうした企業の情報が選手たちに届いていないのが現状です。野球のみに向いてきた選手のマインドを上手くビジネスに切り替え、選手にマッチする企業の情報を提供することができれば、プロ野球選手のセカンドキャリア問題はだいぶんと落ち着いていくはずです。あとは、社会に出た元選手たちが良い実績を残していくことではないでしょうか。

長田 パネラーの皆様のお話から、プロ野球選手のセカンドキャリア問題の根幹には選手のキャリアに対する認識の低さがあることがわかりました。また、教育システムや指導者など環境面の問題も浮き彫りになったかと思います。今後も、パネラーの皆様にはそれぞれの立場で問題解決のためにご尽力いただき、その経過などをご報告いただければと思います。本日はどうもありがとうございました。



野球界の特別な背景

—— 菊幸一教授にきく

インタビュー／長田渚左



菊 幸一

(きく・こういち)

1957(昭32)年、富山県生まれ。87年3月、筑波大大学院博士課程単位取得退学。88年3月、教育学博士(筑波大)。現在、筑波大体育系教授、筑波大大学院スポーツ健康システム・マネジメント専攻長。日本スポーツ社会学会理事長、日本体育学会理事(「体育学研究」編集長)。主な編著書に「21世紀のスポーツ社会学」(創文企画)「よくわかるスポーツ文化論」(ミネルヴァ書房)「スポーツ政策論」(成文堂)など多数。

——先日、プロ野球選手のセカンドキャリアを考えるシンポジウムを開催しました。司会をしていて感じたのは、この問題は20年前から何も解決されていないということです。プロ野球界には特別な背景があるように思うのですが。

菊 その通りです。野球には長い歴史があります。まず高校野球は地元との密着が強く、独特です。比較的、時間に融通が利く商店主などを中心に、選手を子どもの頃からずっと見ているわけです。

——どこの誰、あの監督のところのあの選手がすごいぞ、となると地元の支援者やファンがついて、その選手の成長をみんな期待するわけですね。

菊 そうです。その子どもが活躍して地方大会を勝ち抜き、甲子園に出場することにでもなれば、地元は大変に盛り上がります。逆にそれだけに、あの子がエラーしたから甲子園に行けなくなったということもあるわけですが（笑）。47都道府県の代表が集う日本中が注目する大会ですから、知っている子

どもが出場するというだけで地元の人々はわが事のように喜ぶ。その選手は地元のスターになります。だから、その選手が高校卒業後に地元で就職すると言えば、多数の業種の企業から声がかかります。プロになれば、たとえ二軍にいても「いつ一軍でプレーするだろうか」とずっと期待してもらえます。このような日本の野球エリート選手的环境は、他のスポーツにはないと思います。

景気と体質

——野球エリートのファーストキャリアはほとんど苦労もなくスタートするわけですね。

菊 実はプロ野球選手のセカンドキャリアの問題も、これまで長い間、表面化しませんでした。それは、たとえ夢破れても、それまで応援してきた地元との強いつながりがあったからです。全国的には無名に終わっても、地元では「昔の名前」が通用していたのです。ところが、最近は平成不況の影響などで、

特に地方の企業に余裕がなくなっています。手を差し伸べたくても、経費削減などで現実的に難しい。日本の空気が全体的に世知辛くなってきたということです。

激励と不安

——プロ野球界はずっと以前から毎年80人が入ってくれば、80人が去っていくという世界でした。なのにセカンドキャリアについての取り組みはほとんど手が付けられていませんでした。景気の影響とは別に、球界の体質にも何か原因があるのではないですか。

菊 球団も選手個人に任せきりでした。入団する時は華々しくドラフト指名して、高額な契約金も払って、鳴り物入りです。でも、プロになっても一軍で活躍できる選手はほんの一握りです。うまくいかないう選手はなるべく静かに退場させてあげようという配慮もあつたのでしょう。しかし、甲子園に出場し、ドラフトで指名された選手は、それだけプライドも

高い。野球ができないとなると、それまでの人生を全否定されたと感じてしまう。プロになった新人にアンケートをする、将来に不安を感じている選手が非常に多い。不安とプライドの二律背反の中で揺れている状態です。一方でそんな選手を指導するコーチや球団首脳は「マイナス面などを考えていると、プロとして夢は叶わないぞ」と激励するばかりだったのだと思います。

——今回のシンポジウムではさまざまな問題を提起しましたが、「業界初」という形で受け止められていたことには驚きました。伝統のあるプロスポーツだからこそ、他のスポーツにも影響がある。だからより良いキャリアサポートの整備が求められるはず

菊 個人の問題だと片付けられてきたプロ野球のセカンドキャリア問題が注視されるようになったのは、1993年にサッカーがプロ化（Jリーグ創設）されてからだと思います。Jリーグでは高卒でプロに

なつても、1、2年でリタイアする選手が少なくな
い。そこでJリーグは選手会と協力して2002年
に「キャリアサポートセンター」を立ち上げ、セカ
ンドキャリア講義や企業へのインターシップなどに
取り組んだ。選手の親や指導者から「プロになつて
も1、2年で使い捨てられる」と反対されないよう
に、「第二の人生もしっかり面倒をしています」と
いうアピールが必要でした。そのサッカー界の取り
組みを見て、プロ野球界も「何もしていないと思わ
れるとまずい」と考えるようになったのだと思いま
す。

リスクと制度

——確かにもともと存在していた問題がクローズア
ップされるようになりました。しかし、NPB（日
本野球機構）が2007年に立ち上げたセカンドキ
ャリアサポートを利用する選手が、一年に数人しか
いないという現実、単にピール不足だけが原

因とは思えないのですが。

菊 大部分の選手はプロの世界で大成することだけ
しか考えていません。少しでも時間があれば練習す
るでしょう。引退後を考える余裕ありませんから、
それは仕方ないと思います。ですがプロ野球選手は
リスクのあるチャレンジであることは間違いありま
せん。ですから当然、今の時代ですし、プロ野球界
がきちんとした制度づくりをして、セーフティーネ
ットを張っていかないと組織そのものが疑われます。
選手の親や指導者から「プロに入れても大成しなけ
れば、その他大勢の選手とともに放り出される」と
いう声が大きくなると、球界自体が大きなマイナス
イメージを負います。

ダブルキャリアと意識変化

——セーフティーネットの実例はありますか。
菊 選手に第二の人生の要望や希望を聞くと、指導
者やコーチになりたいという回答が大半です。この

場合、指導するのはアマチュア選手ですから、「指導者資格」を取得しなければなりません。自分の経歴値だけに頼って指導すると、体罰問題などに発展してしまう可能性もありますから。資格取得のため

には現役時代に少しでも時間を見つけて勉強をすることも必要です。公認スポーツ指導員やジュニアスポーツ指導員の資格も通信教育でも取得可能ですから、それを球界全体で推奨する必要があります。これからは選手も球界もダブルキャリアを考えておくことが重要です。資格取得に6年や7年かかってもいいということを伝えておくことも必要です。

——野球だけをやっている人も必ずしも人生が成功するわけではないということを、若い選手たちに強調しておくことも重要ですね。

菊 元広島衣笠祥雄さんが話してくれたのですが、現役時代にロッカールームで同僚のホプキンス選手が難しそうな本を熱心に読んでいたそうです。「何を読んでいるの」と聞いたら、彼は「野球は人生の

通過点なんだ。引退したら医者になるから勉強しているんだ」と言ったそうです。衣笠さんは大変に驚いたと言っていました。

——ゲイル・ホプキンスは1975年に広島のエリートで優勝に大きく貢献しました。77年の引退後に米国に帰国して整形医学を学び、博士号を取得しています。日本ではいまだにそんなプロスポーツ選手は聞いたことがありません。必ずしもそうでないところもありますが、欧米の多くの高校や大学のスポーツ選手は、学業でもあるレベルの成績を残さないと試合に出場できないという厳しい規定があります。バスケットボールの大学新人王が、学業の成績が悪かったため翌シーズンの試合に出場できなかったこともありました。日本では勉強ができなくても、野球さえうまければ特別扱いされます。その社会背景だけでも変われば、野球少年たちの意識も変化してくると思うのです。

菊 そう思います。春と夏の高校野球は大手新聞社

の主催です。高校野球人気に便乗して大会を開催するだけではなく、もつと高野連も含めて本気でやらなければならぬことがあると思います。当然、授業をきちんと履修して、それなりの成績を取めないと試合に出場できないくらいの厳しさも必要なのです。野球だけをやって高校を卒業して、一番困るのは選手本人です。いろいろと問題の噴出している柔道界ですが、学生柔道連盟は単位をきちんと取らないと試合に出場させないという方針を打ち出しています。

文武両道と文武一道

——野球だけで一生が終わるはずはないのに、「野球一筋」という生き方は、今も日本で尊重されています。なぜでしょうか。

菊 武士の生き方は文武両道を尊びましたが、私はスポーツ界は頭と体を切り離さずに、文武一道を推奨すべきではないかと考えています。

——日本人は頭と体を切り離しがちで、両方ができる人は特殊で特別な才能があると思いつ込んでいる傾向があります。昔から一つのことをやり続ける人は「道を究める」と尊敬され、二つを一緒にやると「二兎を追う者は一兎をも得ず」と言われて、戒められてきました。どのような背景があったのでしょうか。

菊 日本人の一つのモデルとして、複数のことができるマルチ型はもともと上流階級のものでした。平安時代のお公家さんのようにカルタをやり、和歌も詠む。余裕のある生き方です。その後、江戸時代になって武士層が人を殺すための道具としての刀を人を活かすための剣、あるいは刀で修業するというイメージを広めて、文武両道を推進してきました。

しかし、明治時代になって（そもそもそんなに余裕のなかった下級武士層によって）鎖国が解かれると、下克上によって支配層に登りつめた下級武士たちは、いったん築き上げた自らの身分を守るという

意味でも、常に「追いつき、追い越せ」といった彼らの余裕のない社会的性格に拍車をかけ、激変する世の中の流れに追いついていかなければならなかった。遊びなんてとんでもないという空気がみなぎった。そして、急勾配の右肩上がりでも豊かな国に日本を発展させるためには、彼らの生き方のモデルとなつた立身出世主義で大衆のレベルを丸ごと一段上に上げるかが、課題となつたのでしよう。だから「一つのことに集中して成長せよ」という風潮が広がつたのでしうね。その名残が今もスポーツ界、野球界に残っていると思われます。

——なるほど。ですが今の時代はもう少し柔軟に考へて、野球に主眼を置くとしても、それ以外の勉強や教養を身につけることが、人間を成長させるための肥やしになると教えておきたいですね。

菊 まったく同感です。文科省などの動きに頼るのではなく、スポーツ界自体が選手たちの人間育成を考へて、自分たちで正すところは正すという姿勢が

最も大切だと思います。

転落と同情

——近年、毎年恒例のようにプロ野球選手の戦力外通告やトライアウトにスポットを当てたテレビ番組が放送されます。一度はスポットライトを浴びた選手の転落や苦悩の人生を際立たせて、視聴者の同情を誘うような内容にはどこか違和感も感じてしまします。

菊 ひと言でいえば大衆社会の罪なんです。一般大衆にとってプロ野球選手は夢なんです。自分たちのできなかつたことをやってくれる憧れの人です。選手が活躍すれば「いいぞ、いいぞ」と持ち上げて楽しむ。一方、それが失敗したとなると今度ははしごを外す感じで、選手が転落していく姿も楽しむ。特に落下した地点が自分たちより下だと感じると留飲を下げる。そういう心理を大衆というものは持っているんです。

——確かに日本人はエリート選手に対してチヤホヤするけれど、その人間の深いところまで見つめてリスペクトするという点では薄い気がします。

菊 日本ではスポーツ選手がどこか芸能人のようになっっているような感じがします。表面的な部分だけで判断されてしまう。そうならないためにも、選手には今後、野球をやったこととどこまでその後の人生が充実したのか。あるいは野球をやったことで、セカンドステージをいかに生かしたか、ということを含めて、人生をトータルでとらえられるようになってほしいですね。



野球だけの人生じゃ、もったいない

「野球の経験は社会でも応用が利くんです」。白寿生科学研究所の田口竜二氏（47）は、そう力説する。かつての甲子園のスター選手で元ドラフト1位左腕は現在、同研究所の営業本部プロモーター部人材開拓グループのグループ長として充実した第二の人生を送る。野球での栄光と挫折から、華麗なる転身まで。田口氏が貴重な経験を語った。



田口 竜二
(たぐち・りゅうじ)

1967（昭42）年1月8日、広島県廿日市市生まれ。宮崎・都城高3年の84年、左腕のエースとして春夏甲子園に出場。春は準決勝で、夏は3回戦とともにPL学園に敗れた。同年ドラフト1位で南海入団。唯一の一軍登板となった86年10月14日のロッテ戦は1回1失点。90年に引退して打撃投手転向。94年に現役復帰も1年で引退した。05年に退団。06年より白寿生科学研究所勤務。身長186センチ。

「子供の頃から野球が好きで好きでたまりませんでした。広島はつかいちの廿日市の生まれですから広島カープの大ファンでした。僕が幼い頃のカープはとても弱いチームでしたので、『俺が入って強くするけん』って本気で思っていました。」

野球を始めたのは小学4年。自分で言うのも何ですが、足も速かったし、野球のセンスもありました。ピッチャーで4番。七尾中時代は打率7割くらいは打っていました。

中学卒業前には甲子園優勝経験のある地元の広島商業や広島高校をはじめ全国の名門校からスカウトが来ました。どの高校も『1年からレギュラーで3番を打たせる』という条件でした。

自分が最も行きたかったのは愛知の中京高校でした。1学年上に『モンスター』と騒がれた野中徹博投手がいたので、自分は投手をやらなくてすむだろうと思ったからです」

「投手をしたい」という意識はなかったという。彼

にとって投手は『付録』のようなものだった。

伯父の夢とドラフト

「身長186センチと体が大きかったので投手をやらされていましたが、自分は王貞治さんのような打者になるのが夢でした。投手へのこだわりはありませんでした。ほかに投手をやれる人がいれば、やってもらいたかった。」

中学の県大会がテレビ中継された時に解説者の森永勝也さんが『田口くんの夢は王さんのホームラン記録を抜くことなんです』と言ってくれた。もう我が意を得たりで体中が熱くなるほど嬉しかったのを今でも覚えています」

しかし、実際に進学したのは中京高校ではなく、宮崎県の都城高校だった。

「親戚に巨人のテストを受けたほどの野球狂の伯父がいたんです。その伯父さんが『宮崎の自分のところにきて、都城高校で野球をやらないか』と熱心に

勧めてくれた。好きな伯父でしたし、それならそれもいいかなって、その誘いに乗りました」

高校3年の1984年にエースとして春夏連続で甲子園に出場した。春の準決勝ではあの桑田真澄、清原和博を擁するPL学園と対戦。延長10回まで0-0の投手戦となった。11回裏、2死でランナーを背負い、桑田をライトフライに打ち取ったと思われたが、右翼手が落球して敗れた。

「甲子園ではチームがものすごく頑張っていたことしか覚えていません。僕自身は常に肩が痛くて、サロメチールを塗りたくって投げていました。トレーナーが付きつきりでケアをしてくれました。自分に夢を託してくれた伯父が、高校2年のときに心筋梗塞で急逝したこともあって、当時はプロに行く気持ちにさらに強くなっていました」

85年、大型左腕として南海ホークス（現ソフトバンク）に「将来のエース」を託され、ドラフト1位指名された。

圧力と心

「結果から言えばプロではまったくダメでした。1年目の5月の時点で自分のピッチングを見失ってしまいました。コーチが自分の型を押しつける人で、フォームをいじられ続けました。『肘が3ミリ下がっているから上げろ』『肩を2ミリ内側に入れろ』とか、来る日も来る日も朝から晩まで言われ続けました。コーチが約20メートル先から指示を出していたこともあり、『ミリ単位の指示なんか意味があるのか』と思っていました。でも不満を顔に出すと陰に呼ばれて『俺はお前を飼い殺しにできるんだ』と圧力をかけられました。

プロの世界では上にものを言えない上意下達の空気をイヤというほど味わいました。自分の心を殺して言うとおりにしないと生きていけない。コーチに従っているうちに、まったく自分の球が投げられなくなってしまうました。それまでどうやって投げて

いたのかも分からなくなった。どうやって足を上げ、下げていたのか、どのタイミングで球を離していたのかさえ分からない。体のすべてがバラバラになっていきました」

球威も落ちた。高校時代は140キロ台の速球を投げていたのに、120キロ台が精いっぱいになった。最大の武器でもあった落差のあるカーブも、まったく落ちなくなった。

「こんなはずじゃなかったという失望と、どうすればいいのか分からないという不安感が、毎日頭の中でグルグルと回っていました。周囲には明るくふるまっていました、むなしかったです。白板に書かれたその日の練習メニューをただこなすだけ。一日をやり過ごすだけの毎日でした」

引退と復帰

一軍での登板はわずか1試合だった。86年10月14日のロッテ戦の8回からマウンドに上がった。1回

を投げて1安打1失点。90年には現役を引退する。突きつけられた現実、試合に出場しない打撃投手への転向だった。

「それはそれで受け入れようと思いました。打撃投手は試合という目標がないので、自分なりの目標を立てようと考えました。『100球投げたら100球ストライクを投げられる打撃投手になろう』と心に決めて、のびのびした気持ちで自分のピッチングを見直しました。初めて自分で考え、学び、実践しました。誰にも何も言われなくなって、初めて意欲が出てきました。制球のいい投手をみつけるとビデオに録画して繰り返し見続けました。そんなことをしたのは生まれて初めてでした。」

打撃投手になって自分の野球人生が始まったと思いました。『仕事』が終わった後も、一人でいつまでもいつまでも壁に向かってボールを投げ続けました。自分で考え、学び、実践し、検証する。その大切さに気づいて、充実感に満たされました。初めて

自分がプロになったと感じました」

彼の変化は首脳陣にも口コミで広がった。引退から3年。94年にチームから異例の現役復帰を命じられた。

「2月のキャンプ、オーブン戦と調子がよくて、結果も出せるようになったのですが、実はひじが痛くて、通常1回に1錠服用する痛み止めを、5錠も飲んで登板していました。でもついにひじの状態を隠せなくなつて診察してもらつたら、左ひじの靱帯じんたいが部分断裂していたんです。だから半分決まっていたベンチ入りを断りにいきました。球団からはプロでの実績がないから手術費用は出せないと言われました」

夢と希望

打撃投手もできなくなった彼は、二軍の用具係に配属された。

「ネットの穴を繕い、選手のためにボールや用具を

整える毎日でした。正月に二軍監督の有本義明さんから年賀状をもらいました。『いろんな経験をしたあなたは、きつといいコーチになれる』と書かれていました。その年賀状を何度も読んで、コーチになる夢を見るようになっていました」

次の配属先は営業だった。球団から与えられる職場は、希望からどんどん遠く離れた。しかし、そこで彼は後にセカンドキャリアを生きることになる、白寿生科学研究所の原浩之営業本部長と出会った。

「白寿生科学研究所がホークスの本拠地・福岡ドームの看板スポンサーだった関係で、原さんと出会いました。自称『野球おたく』の原さんと話すと、自分よりも野球に詳しくて楽しかった。だから営業の出張で上京するたびに連絡を取るようになりました。原さんは『世の中の人が皆、健康になつてほしい』が口癖でした。『田口さんが現場に戻れずに悶々としているのなら、一緒に働きませんか』と声を掛けてくれました」

『一緒に働きませんか』と誘われたのは初めてで、心に響いた。しかし、野球しかやってこなかった彼は即答できなかったという。

ゼロとチャンス

「周りの人に相談しました。野球の世界しか知らない人間は他の社会では通用しないと言う人ばかりでした。何も好きこのんでほかで苦労する必要はないじゃないかとも言われました。でも自分は思いました。『俺の中の何かを感じてくれたから声をかけてくれた。これはチャンスなのではないか』。原さんの言葉を聞いて『ゼロから学んでいきたい』という勇気が湧いてきたんです。確かに俺にとつて新しい知らない世界で生きるとは賭けです。でも原さんにとつても賭けなわけです。だったらそれに応えるのが男じゃないかと思っただけです。正直言つて白寿生科学研究所が何をしているのか、同社が開発販売している治療器のヘルストロンが何なのか、何も知

りませんでした。」

株式会社白寿生科学研究所は1925年創業の老舗企業。ヘルスケア機器および食品などの開発、製造販売を全国約600店舗で展開している。電位治療器「ヘルストロン」が看板商品。

現在勤続9年目の彼は、営業本部プロモーター部で人材開拓グループ長として活躍、人材発掘のための重責を担っている。会社は彼のポテンシャルの高さを認め、彼の入社以後、元プロ野球選手を14人も採用した。

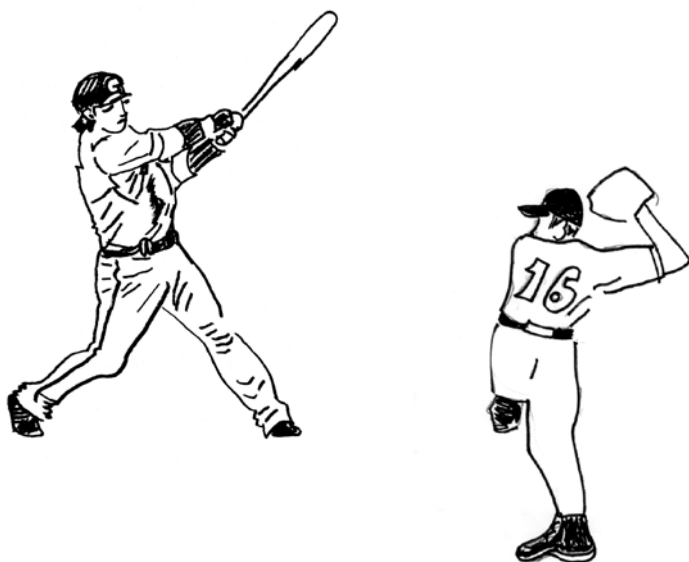
経験と応用

「野球をやったことは誇りです。高校時代は遠足や修学旅行にもいけず、ほかの子が遊んでいるときも野球をやっていて、青春もなかった（笑い）。今は恨みに思つてはいませんが、『気合を入れてやる』と言われて、チャイムが鳴つて次のチャイムが鳴るまでの授業時間と同じ50分間、ボコボコに殴られた

こともありました。でも、何とか乗り越えるしかないと思って懸命に努力をしてきた野球での経験は財産です。かけがえない宝です。

自分はプロで結果を出せなかったけど、野球をやることで乗り越えたことは一つや二つじゃない。それが大きな誇りです。自分で考え、学び、実践して検証すれば、成功しても失敗しても自分の実になります。だから野球での経験は他の社会でも立派に応用が利くんです。それに気づいて本当によかった。

栄光や輝ける時間だけを思い出していたら、人生のページはめくれない。前進していかなくや、過去だけに生きることになる。馬鹿みたいに懸命に生きた時間があれば、次にもそれは生かせるんです。人生何とかなるものです。分からないことがあれば率直に教えてくださいという姿勢で生きればセカンドキャリアだつて自分のものになります。野球だけの人生なんて、もったいないじゃないですか。それを後輩たちに伝えていきたいですね」。



プロ野球チームにおける セカンドキャリアサポート について

——広島東洋カープを例にとり

西本 祥子



07年にセカンドキャリアサポートを開始

プロ野球の世界では毎年秋のドラフトで全12球団に80名前後が入団する。一方で同等の数の選手が戦力外通告を受け退団していく。退団した選手のうち5割強は、コーチ、スタッフとして球団に残ったりトライアウトで他の球団に移ったり、プロ野球と関わる仕事に就くことになるが、残り5割の人は野球以外の職業を探さなければならない。スタッフとして残ったとしても1年契約が多く身分が不安定である。

プロ野球を引退した選手が社会人としての立場を確立するための、そして不安定な部分を少しでも改善するためのセクションとして、日本野球機構（NPB）の中に「セカンドキャリアサポート」体制が設立されたのは、2007年10月である。その活動内容は大きく分けて「引退選手のキャリア支援」と「現役選手の各種ビジネススキルの習得支援」で

ある。

「キャリア支援」とは、選手の引退後の進路に関してNPBがサポートするもので、引退した選手がNPBのセカンドキャリアサポートに連絡すると、キャリアサポート担当者が面談した上で自分の可能性についてさまざまな選択肢を提供してくれる。興味のある選択肢については一般企業の求人も紹介してくれ、就職活動をサポートするものとなっている。

「ビジネススキルの習得支援」とは、現役選手が引退後に備えてパソコンや英会話を学びたい、資格を取得したい、通信講座を受講したい等という時に、学校等を紹介してくれるものである。

窓口を訪れる選手は毎年10人に満たない

毎年2月のキャンプ時期にNPBのキャリアサポート担当者が12球団を全て巡回し、NPB内にセカンドキャリアサポート体制があつてキャリア支援とビジネススキル支援を行っていることをアピールし、

そして現役時代、なるべく早くから引退後のセカンドキャリアを考えるべしという意識づけを行っている。担当者は選手たちに対してまず最初に、「解雇されてから貯金が一円もないことに気づいても遅いんだよ」と語りかけるのだそうだ。

そのように啓蒙活動が続けても実際にNPBのセカンドキャリアサポートの窓口に相談にくる選手は毎年10人にも満たない。むしろ選手ではなく裏方スタッフからの相談が、年々増えてきているという。選手たちに引退後の不安がないというわけではない。毎年10月にNPBが行っている若手選手への意識調査では、「引退後に不安を感じている」選手が2013年は全体の73・9%にも上り、その数字は年々上昇傾向にある。つまり選手たちの将来への不安は年々増しているにもかかわらず、現状ではNPBのセカンドキャリアサポートを有効に活用している選手はきわめて少ないと言わざるを得ない。

早くからセカンドキャリアの重要性に着目

2013年2月、野球評論家の衣笠祥雄さんの講演を聴く機会があった。講演のテーマは「地域密着型広島東洋カープ選手のセカンドキャリア」。

衣笠さんは、「僕らが球団に入った時にオーナーから言われた『君たちは立派な社会人になってカープを卒業してください』という言葉が忘れられない」と言う。

衣笠さんが平安高校を卒業して広島東洋カープに入団したのは1965（昭和40）年。当時のオーナーは、「広島東洋カープ」としての初代オーナー松田恒次。カープ一筋、2131試合連続出場の世界記録を達成した「鉄人」衣笠であれば、引退後の生活に不安はなかったと思われるが、高校を卒業してプロ野球に入ったばかりの一選手にとっては、当時のオーナーの一言は大いに心に残ったに違いない。

「世の中の企業、人間しかない。だから人間を育

てなければどんな企業も潰れる。野球は10年、残りの人生は40年以上もある。ユニホームを脱いだ後の一般社会で役立たずではどうしようもない。野球が終わってからの人生が一番大事である。だから球団に在る間だけでも躰は厳しく行いうように」

これも初代オーナー松田恒次の言葉。今で言う「セカンドキャリア」の重要性に着目した発言として特筆に値する。

「入団した選手は家族も同然」(※1)、野球がダメでも第二の人生は幸せに行くように、という彼の考え方は2代目、3代目のオーナーにも連綿と受け継がれ、カープという球団の特質のひとつとなっている。

球団のこのような姿勢に衣笠さんは、「先輩方は、選手を辞めたら球団に恩返ししなければ、とよく言っていました」と話した。また、「スカウトが引退後の就職斡旋もしてくれていた」とも言った。スカウトは選手を入団させた者の責任として、野球では

力を発揮できなかった選手の相談相手になり、就職の世話をしたという。

町のキャリアサポーター「上原学校」

衣笠さんがカープに入団した頃、広島の町でいわば私設のセカンドキャリアサポートを行っていた人物がいた。上原清二氏。当時の南海ホークス(現・福岡ソフトバンクホークス)監督、鶴岡一人と広島商業高校の同級生で、親友だった。

昭和30年代、まだドラフト制度が始まる前の選手獲得が自由競争だった時代、「鶴岡を男にする」とボランティアで良い素材(選手)を探して歩いた(※2)。本業は呉服屋、だが家業をほっぽり出して鶴岡監督のために中国地方を歩き回った。

鶴岡が昭和43年に監督を退くと同時に上原の私設スカウトも終わったが、鶴岡の個人後援会「ちようちん会」の人脈が、旧ホークス、カープを中心に野球界全体に広がっており、上原の自宅は、監督、コ

イチの異動やトレード情報等を求めて記者や球界OB、関係者が訪れ、いつも人でごった返す、球界の一大サロンだったそうだ（*3）。その上原家を、引退した選手が訪れては就職の相談をしていたという。そこは「上原学校」と呼ばれるようになり、カープの選手でお世話にならなかった者はほとんどいない、とさえ言われた。

とかく都会に居る方が仕事を見つけやすいと思われがちだが、地方都市には「おらがチーム」を皆で盛り上げる郷土愛があり、世話をする人情がある。案外、地方球団に入った方が長い人生を楽しむことができるかもしれない。

参考文献

- （*1） 松永郁子著『苦難を乗り越えた男たちの軌跡』（宝島社）
- （*2） 後藤正治著『スカウト』（講談社）
- （*3） 中国新聞社編『カープ50年——夢を追って』





Jリーガーの セカンドキャリア

波多野 圭吾

プロ野球に遅れること約60年。
ようやく二十歳の誕生日を迎えた
サッカー・Jリーグだが、
セカンドキャリアへの対策は
どの競技よりも早かった。
Jリーグや日本サッカーが講ずる
セカンドキャリアの支援策から
私たちは何を学ぶことが
できるだろうか。

2013年現在、Jリーグには40のクラブが加盟しており、約1200名の選手が登録されている。1993年の開幕当時は10クラブ、約300名の選手であったから、開幕からの20年でクラブと選手の数は4倍に増えている計算になる。2014年にはこれまでのJ1（1部リーグ）、J2（同2部）に加えてJ3（同3部）が新設されるため、今後もその数は増えていきそうだ。

しかし残念なことに、Jリーグでプレーする選手の数が増えても、全ての選手が思い通りの現役生活を送れるわけではない。Jリーグでは、契約の更新、締結がかなわずに選手登録を抹消される選手の数が毎年100を超える。引退時の平均年齢は25・6歳とプロ野球と比べて4歳ほど若く、大卒選手であればプロ入り後2、3年で次の進路を考えなければならぬ。今後、Jリーグが拡大していくとともにセカンドキャリアに悩みを抱える選手が増えていくことは予想に難くない。だが、Jリーグは国内の競技

団体としては比較的早くからこの課題を解決すべく様々な取り組みを始めている。

日本初のセカンドキャリア支援組織

最も代表的なのは、2002年に設立された「Jリーグキャリアサポートセンター（CSC）」による取り組みだろう。CSCは日本のプロスポーツ界としては初となる現役選手のキャリアデザイン支援や引退後の進路支援を目的に設立された組織である。選手の視野の拡がりを期待した福祉施設の訪問や、パソコンや英会話などの実務講座、マナーやコミュニケーションに関する研修、選手のシーズンオフを利用したインターンシップなどの支援事業を展開し、OB選手の体験談や引退後の活動、求人情報や優待条件付き学校情報などを掲載したキャリアサポートブック『off the pitch』の発行なども行っている。現役を引退した選手には進路支援としてカウンセリングや面接を実施し、選手の適正や希望に即した企

業を紹介するなどしている。設立当初は選手から懐疑的な眼差しで見られていたが、CSCの紹介をきっかけに就職に至るケースが続いたため、徐々にCSCを利用する選手は増えていった。2002年に0名だったインタナショナルの参加者は2005年以降10名を超えるまでになり、希望者が絶えなかったという。当時Jリーグ選手協会会長だった中山雅史も、「今までは選手個々がクラブや個人の伝手を使って就職・相談などしていたが、今後は、サポートセンターの支援を得られることで、現役中は安心してサッカーに専念できる。インタナショナルなどで仕事を体験できるのも今後の人生にとってプラスだと思う」とCSCを高く評価している。

対処から予防へ

その後、CSCは2010年に事業の見直しを行い、それまでのトップ選手へのキャリア支援から、3年目までの若手プロ選手とアカデミー（育成組織）

所属選手を中心としたキャリア教育へ事業の重点を移した。これにより、新人選手向けの「クラブ理解教育」、3年目までの若手選手向けのクラブによるホームタウン活動を通じた「社会人教育」、アカデミー所属選手向けの「プロサッカー選手としてのプロ意識向上」を目的とした各種研修などが各クラブとともに行われるようになった。さらに同年、文部科学省の競技者・指導者等のスポーツキャリア形成支援事業を業務委託し、「キャリア・デザイン・サポートプログラム」が開始された。このプログラムの対象は主にアカデミーに所属するジュニアユース（中学生）の選手で、プロを目指す上でのキャリアについての考え方や心構え、社会人としての適切な就労観、職業観を醸成する研修会が実施されている。CSCは、2013年にJリーグの組織変更に伴って発展的に解散。現在は管理統括部企画部内に「人材教育・キャリアデザインチーム」が設けられ、それまで担当部署が異なっていた選手の教育や研修、

キャリア支援などの業務がひとつに集約された。現在もトップチームやアカデミーに所属する若手選手のキャリアデザイン支援を中心にしながら、CSCで長年取り組まれてきたセカンドキャリア支援の窓口業務なども引き続き行われている。

これまでのJリーグによるセカンドキャリア支援の取り組みを見てみると、2002年のCSC設立当初は実務講座の実施や企業の斡旋など、どちらかといえばセカンドキャリア問題への対処が中心であったように見受けられる。しかし、2010年の事業の見直し以降は、若手選手に向けた教育や研修が活動の中心となっており、支援のテーマが「セカンドキャリアにどう対処するか」から「現役生活であるファーストキャリアを充実させながら、いかにセカンドキャリアの問題を未然に防げるか」へと変化している。アカデミー所属選手へのキャリア教育・研修などはその典型例である。

今日では、Jリーグに^{なち}倣い各クラブも若手選手の

教育や研修、キャリア支援などを積極的に実施している。これまでもJリーグの主催によって新人選手向けの「Jリーグ新人研修会」が行われてきたが、これに加えて各クラブが主体となった選手教育・研修が行われるようになったのだ。例えば、ヴァンフォーレ甲府は社会人教育の講習会「キャリアアッププログラム」を2ヶ月に1回実施している。クラブのスタッフや外部講師による講話では、地域におけるクラブの役割やプロ選手の役割、メディアへの対応といった様々なテーマを取り上げる。また、クラブのスポンサー企業へのインターンシップも行われており、こうした取り組みは甲府以外の多くのクラブでも行われている。サッカーに限らず、スポーツ選手の多くは社会との接点が少ないため社会性が低いと言われているが、Jリーグのクラブはこうした点を改善するために選手たちに社会人教育や研修などを実施し、社会性が高く魅力的な選手を育成することを目指している。

J P F Aとセカンドキャリア支援

ここまでJリーグやクラブによるセカンドキャリアへの取り組みを取り上げてきたが、日本サッカーにはその他にも選手のセカンドキャリアを支援する団体が存在する。その一つが「一般社団法人 日本プロサッカー選手会（J P F A）」だ。

J P F Aは、1996年に当時Jリーグチェアマンだった川淵三郎の呼びかけによって設立されたJリーグ選手協会（J P A）を前身とする組織である。J P Aは、設立当初は任意団体であったが2006年に法人格を取得。その後2010年に名称を現在のものへと変更し、それまでJリーグでプレーする選手のみに与えられていた加入資格が他国でプレーする日本人選手（ただし、Jリーグでのプレー経験がある場合に限る）にも認められるようになった。2011年には東京都労働委員会から労働組合としての認可を得ている。

「サッカー文化の普及・振興」と「プロサッカー選手の社会的・経済的地位の向上」を目指すJ P F Aは、チャリティー活動やサッカースクールなどの社会貢献活動を主催する傍ら、選手のセカンドキャリア対策に積極的に取り組んできた。Jリーグによるセカンドキャリア支援の一部にはJ P F Aの要望に応じて実施されたものがあるし、JリーグとJ P F Aが一緒に実施しているものも多い。また、2012年には、ほけんの窓口グループ株式会社と共同で「選手セカンドキャリアプログラム」を発表し、今後は毎年数十名の引退選手がほけんの窓口グループにて雇用される見通しとなっている。本プログラムでの雇用第一号で柏レイソル、栃木SCなどで活躍した落合正幸は、「サッカーもビジネスも、真剣にやればやるほど人として成長できる」と語り、ほけんの窓口グループ代表取締役会長兼社長の窪田泰彦も「Jリーグで活躍した選手は、全く別世界の仕事でも通用すると確信している」と太鼓判を押す。こ

うした取り組みは、引退した選手の再就職を促すだけでなく、Ｊリーグの社会的価値を高めることにもつながるだろう。

様々な形で選手のセカンドキャリアを支援するＪＦＦＡだが課題も多い。例えば、選手が引退する際にＪＦＦＡから支度金が支払われる「退団一時金制度」があるが、生涯の出場試合数に応じて算出される支度金の金額は決して高いものではなく、数十万円程度となる場合がほとんどである。また、選手の年俸の一部はＪＦＦＡに積立金として徴収され、引退時に還付される仕組みとなっているが、積立金の金額はＪ２のクラブでプレーする選手で年に１万円程度である。Ｊリーグでの平均プレー年数は５年ほどと言われているから、還付額の平均も５万円ほどにしかない。退団時の支度金も積立金の還付も、多くの観客を魅了し子どもたちのあこがれの存在でもあるサッカー選手が受け取るお金としては考えられないほど低い金額だ。現役の内から計画的に蓄え

ていかなければ、セカンドキャリアへの準備どころか、数ヶ月暮らしていくだけでも大変である。ＪＦＦＡは日本サッカー協会（ＪＦＡ）やＪリーグに対し、選手の年金退職金の制度を確立するよう数年前から働きかけているが、資金不足などを理由に交渉が進展していないのが現状だ。ＪＦＦＡ自体も慢性的な資金不足の状態にあり、退団一時金や積立金の還付額を増額することができていない。選手セカンドキャリアプログラムに代表されるＪＦＦＡの就職支援制度は高く評価できるものであるが、今後は選手の経済面を援助する体制をどう整えていくかが問題となっていきそうだ。

特化した取り組みはないが……

最後に、日本サッカー全体を統括するＪＦＡによるセカンドキャリアへの取り組みについても触れておこう。残念ながら、ＪＦＡではＪリーグやＪＦＦＡのようなセカンドキャリアに特化した取り組みは

見られない。しかし、JFAが小中学生を対象に実施している「JFAこころのプロジェクト」ではJリーグやなでしこリーグで活躍したOB・OG選手が講師として起用されているため、JFAによるセカンドキャリア支援のひとつとして考えることができるだろう。このプロジェクトは、「夢先生」と呼ばれる講師が自らの人生を振り返りながら子供たちに夢を持つことの大切さや、それに向けて努力することの大切さなどを伝えるものである。子供たちの健全な育成に寄与することが本来のテーマであるが、こうした活動を通じて講師自身も人間的に大きく成長していくことになるだろう。

日本サッカーにおけるセカンドキャリア支援は、先進的な取り組みとして他の競技にも多大な影響を与えてきた。今後もその取り組みには大きな関心が寄せられるだろう。全ての選手が安心して競技に打ち込める環境を目指して、これからも積極的な支援を期待したい。

【参考】

Jリーグ公式サイト

(<http://www.j-league.or.jp>)

日本プロサッカー選手会公式サイト

(<http://www.jpfa.or.jp>)

公益財団法人日本サッカー協会公式サイト

(<https://www.jfa.or.jp>)

田中直希(2013)Jクラブ強化論(ぼる出版)

Jリーグラボ #8 (スカパー、2013年10月14日放送)
日本サッカーのキセキ (テレビ東京、2013年6月15日放送)



特集



アスリートの
引退後を考える

セカンドキャリア 不安 〇

プロ野球選手の『常識』に対して、この日、里崎智也は
里崎マジックとも言うべき話術で鋭く、徹底的に論じた。
見事なまでの野球人生コントロール論、ライブでお届けします……。

里崎 智也

（元プロ野球選手）



里崎 智也（さとぎ・ともや） 1976年5月20日徳島県生まれ。鳴門市立鳴門工業高校、帝京大学卒業後、99年ドラフト2位で千葉ロッテマリーンズに入団。在籍中は05年、10年の2度の日本一に正捕手として貢献、06年第1回WBCでも世界一に大きく貢献した。14年オフに引退後は、千葉ロッテマリーンズのスペシャルアドバイザーに就任。解説者としても活躍中。

構成 西本祥子

2014年オフにプロ野球選手を引退しましたが、引退後の不安は一切ありませんでした。不安が無かったからきっぱり引退できた、というところがあります。16年間の現役生活を千葉ロッテマリーンズで全うしました。

僕がなぜ引退後に不安がなかったか、というと、プロ1年目から毎月10万円ずつ積立貯金をしていたからなんです。年間120万円。入団して何年できるかわからない。余ったら貯金しよう、ではお金もたまらない。貯金は大事です。もし5年間プロ野球生活ができれば600万円たまります。その貯金があれば、引退後、次の人生のステップアップにつながるのでは、と考えました。誰に教えられたわけではなく、自分自身の考えで始めました。

プロ野球選手が引退してなぜ次の職業にすぐに就けないのか。僕なりの意見を言わせてもらおうと、それは、それまで「自分からお願いをしたことがない」人生だからです。つまり、高校も大学も「うちに来

て下さい、来て下さい」とお願いされ、その中で自分にとって一番良い条件のところに進んで行くわけですね。社会人で野球をするとしてもそうだし、もちろん、プロ野球に入る時もドラフトにかかって「来て下さい」とお願いされるわけです。だから、引退してから「自分からお願ひする」立場になっても、お願ひの仕方を知らないわけですよ。そういう現実が、セカンドキャリアにおいて足枷になっているのでは、と思います。

現役時代のお金の使い方

よく後輩の選手には、「外では派手に、家では質素に」と言います。外ではやはり後輩やスタッフの人を食事に連れて行くこともある。コミュニケーションも大事なので、使うお金は使わないといけないと思うんです。でも、家でも派手に暮らすヤツがいるんですよ。家賃が一番支出としてデカいんですよ。一度住んでしまうと家賃は払い続けられないといけ

ませんからね。ロッテではよく、「橋を渡れば家賃が高くなっていく」と言っていました。球場のある千葉の幕張から、浦安、葛西、豊洲とひとつ橋を渡るたびに家賃が高くなって、レインボーブリッジを渡るとまた一気に上がる。これってホンマの話なんですけど、年俸が上がって橋を渡って川を渡って行って、年俸が下がったのに橋を戻って来た選手って少ないんですよ。多くの選手が家賃のレベルを上げて行って、年俸が下がったからといって家賃の低い家に引っ越した選手をあまり見たことがない。そうやって皆、破産していくんですけど。

家とジंकス

結果・実績を残して引退した選手は「コーチになれる」と思ってるんですよ。絶対になれるのになぜなら、1つのポジションを何十人の元選手が狙っているんですよ。その1つに対して横の繋がりや学校の関係において声がかかるんです。普通は空き

なんかありません。だから「コーチになれると思つて人生を費やすな」と選手には言っています。「コーチになれなくても自立して生きていけるように人生を費やせ」と。引退後に、現場が絶対一番だ、と思うから、セカンドキャリアの準備をしないんですよ。現場に重きを置いてはダメだと思います。もし、僕にコーチのオフアが来たら、バッテリー統括コーチならやつても良いかな、と思います。いいですか、「やつても良いかな」ですよ（笑い）。「絶対やりたい」ではありません。コーチの話が来たらラッキーぐらいに思っておけばいいんですよ、コーチじゃなきゃダメ、と思いつめるのはよくないです。コーチの話でもう一つ。プロ野球界では七不思議って言われていますが、家を買うとトレードされる、っていうジंकスがあるんです。ある後輩が、まだ出来上がっていないマンションを買いました。そうしたらマンションが完成する前にトレードですよ。ギャグでしょう？ 支度金払って解約してましたけ

ど。それから、マンションを持つていてトレードになると、選手は家族を置いて単身で赴任します。トレード先で引退して、そこでコーチになることもあります。となると、永遠に単身赴任なんですよ。自分が知らない間に子どもが育っていく、という最悪のパターンになるんです。だから現役時代は家を買うなと僕は言っているんです。家とかマンションは引退するまで買わない、どうせ買うなら引退間際になつて買え、と。引退間際の方が残りの人生を踏まえてどこまで使つていいのか、どれぐらい残しておかないといけないかの判断がつきやすく、無駄に高い買い物をしなくてもすみますよね。将来設計に見合った適正な価格で家を買うことができるでしょう。

引退後最初にしたこと

名刺を作りました。選手時代は、顔が名刺だ、顔が通じないような選手はダメだから名刺を作るのは恥だと言われました。でも引退すると、何かの仕事

をもらう時に連絡先が分かるようにしなければならぬ。だから名刺が必要です。ですが、どこで作れば良いかわからない。それを調べるところから始めて、まず町のハンコ屋さんに行きました。「どういう感じにしますか？」つて聞かれて、今までそんなこと言われたことがないから答えようがないじゃないですか。それで一度家に帰つて、今まで貰った名刺を全部よく見たんですよ。その中で一番良さそうなデザインを少し貰つてアレンジしたんです。良いものは盗んでいかないとプロ野球選手は大成しない、という精神を活かしました。

色々なところに行つて名刺を配つて「お願いします」と頭も下げました。僕の取柄は「よく喋る、フットワークが軽い、すぐ連絡する」という三拍子です（笑い）。最近、色々なところで講演もするようになりました。そこでは「目先の利益にとらわれるな」と話しています。やっぱりプロ野球選手は目先の利益にばかりとらわれるんですよ。先ほどの「家」

「マンション」などに形を残そうとしたがるのいい例です。

新しい仕事にどうチャレンジするか

野球を一生懸命やって引退後も野球で食べていく人はほんの一握り。ほとんどの人は野球以外の社会に出ていかないといけない。それなのに、何の覚悟もない。「オレは高卒だから仕事も探しようがない」って言うんですが、だったら大学に行けばいいじゃないか、と思うんです。大学に年齢制限はありませんよ。欽ちゃん（萩本欽一）だってね、あの年齢で大学に行く（73歳で駒澤大学仏教学部に入学）わけですから。だから、チャレンジしようと思えば、日本って結構、年齢制限関係なく頑張れるのかなと思います。色々やってみればいいんですよ。何でもかんでも、人に頼ってばかりでお願いされるのを待っている、ってダメだと思うんですね。ここは自分から動いて行かないといけない。

正直言って、この世の中は、選ばなければ仕事はいっぱいあるんですよ。でも、プライドもあるでしょう。今まで好きな野球をしてお金をもらっていたのが、引退後は好きな野球もできなくなり、同じだけの収入も得られなくなる。そうになると、好きでもない仕事をして、これだけしか貰えないのか、という残念な気持ちになる。でも、それが仕事なんです、今の社会なんです。

社会人としての心構え

僕は現役を16年全うして引退しました。社会に出ることが16年遅れた、と考えれば「今、初めて社会に出た16浪の新入社員です」と言い換えることができます。ですから、引退した後は、「何も知らないから教えて下さい」という気持ちで頭を下げて回りました。こんな基本的なことも知らないのか、ということも恥を忍んで聞きました。知らないことで失敗したこともたくさんありました。事務所を立ち上

げたのですが、請求書の書き方が分からない。請求書の紙をどこで買えばいいかも分からない。教えてくれる人がいないから分かりません、では通用しません。失敗しながら経験していくしかないんです。失敗しても最後に成功すれば、その失敗は「成功事例」になるんです。僕は失敗したことがあります。なぜなら、失敗をぜんぶ改善して成功してきたから。失敗は成功のためのエサです。

1年でも多く野球にしがみつくと損だ

最近、後輩に「僕もそろそろ来年あたりクビになるかもしれない。引退したらどうしたいいんでしょう？」と聞かれました。先輩に教えるを請うことは間違いではありません。でも、「どうしたいいのか」とあからさまに聞くのはどうでしょうか？ 人生にビジョンがないように思えます。「自分はこうしたいけど、そうなるにはどうしたらいいでしょう？」と聞くならまだわかります。自分がどうしたいのか、

と考えることが大事です。野球が好き、でも野球より好きな仕事つてないわけですよ。結局、新しい仕事にどこまで我慢ができるか、ということです。

1年でも長く野球にしがみついていると次の新しい世界に飛び込むのが1年遅れる、と思うんです。僕は引退した時、まだまだやれたのでは？ と言われました。確かに1年でも悪あがきして契約すればお金は入る。でも、次の新しい世界に進むのが1年遅れる。つまり、次の人生での成功率が低くなる。それはつまらない、と考えました。

自分が実験台になる

自分は辞める時、次の人生が成功しようが、どん底を味わおうが楽しいと思えました。なぜなら、野球しか知らなかった自分が、次の人生でどれだけ世間に出て行って通用するか知れたかったからです。僕のセカンドキャリアは、自分を題材にした壮大な実験なんですよ。自分の思い描いていること、自分

の考えていることを毎日こなしつつ、夢を掴めるかどうか勝負だと思っています。実は、次の人生には壮大な夢があります。何かなーって思うですよ、でも今は言えないんですよ、出る杭は打たれますから（笑い）。出る時はどーんと出て行きます。何年後になるかはわかりません。見ていてください。

貯蓄に関して僕がやってきたのは、4割貯金、4割税金、2割は使って良い——。これが僕が実践した4・4・2の法則です。そうやっていくと、10年後に総年俸の4割が貯蓄できています。僕が実験済みです、本当です。2割しか使えないのは厳しい、好きなことができない、と言うかもしれません。でもそんな「楽」をしていては、セカンドキャリアに夢は持てません。やはり、何かを犠牲にしないといけないこともあると思います。

価値観の違い

よく人から「サトさんは特別だから」と言われま

すが、特別じゃありません。でも、セカンドキャリアに向けて特別なことはしてきただけです。自分は年俸が上がっていった時期（05年の日本一の頃〓推定年俸2千万円超）も家賃8万5千円のところに住んでいました。遠征で東京駅や羽田空港に行く時もずっと電車でした。でも、人によって価値観は異なります。現役時代、遠征から夜遅くに羽田に帰って来て、いつもだったら電車で千葉まで帰るんですが、その時は「明日デーゲームだしな。タクシーにするか」と思ってタクシー乗り場に並んだら、前の方に後輩が並んでいるんですよ、年俸は僕の十分の一ぐらいの選手ですよ。聞くと「羽田からはいつもタクシーです」と言うじゃないですか。もうビックリですよ。

何が不運で何が幸運か、なんて正解はありません。もうそろそろ潮時かな、と思える引退に向けてしっかり準備もできます。一番大変なのは切り替えができないこと。クビと言われて準備ができていない

選手は未練が残ります。そして、多くの人がチームに残れることが幸せだと思っているのです。「チームに残れて良かったね」と言いますが、僕に言わせると地獄です。チームスタッフも打撃投手も、毎年毎年の1年契約です。来年も契約してもらええる保証なんてありません。子どもが大きくなつていくに従つてお金がかかるようになりますよね。野球界を出て一般企業に就職すれば、頑張れば給料が上がるという夢がありますが、チームに残つても出世することとは限られるでしょうし、給料も上がりづらく、保険にも自力で入らないといけないでしょう? 「チームに残るより外に出た方がいいよ」と言い続けて、昨年やつと出た人がいて「サトさん、辞めて良かったですよ」と言つてもらえました。

僕がもしロッテの社長だつたら、まず引退する選手に目星をつけますね、人間性を見ます。人間性を確かめて、これは! と思える人材を工場や本社の営業として使えないか、人事に相談しますね。そんな

道筋もあつてもいいかもしれませんね。しっかりとっている人間なら、球団としても次のステージを用意してあげてもいいかな、と。それから、「地元へ帰れ」です。東京は物価が高い。地方に行けば物価は安い。地元へ帰つてやり直すことも考えてみてはどうかと思います。

最後は本人次第、誰も助けてくれない

野球界でセカンドキャリアのことで助けてくれる人はいない、と思つた方がいいです。選手にお金の使い方を教える人(例・車を買え、等)はいても、セカンドキャリアのことをサポートしてくれる人はいません。僕が考えているのは、繰り返しになりますが①生き方をしっかりと考えること、②一生幸せなことは続かない、と自覚すること、③しっかりと貯金しなさい、この3点です。

そこに自分で気づいた人だけが幸せに生きていくのです。最後は本人次第です。



ネバーエンディング・ キャリア

人生でのターゲットを定めたとき、
小林至はとてつもない集中力と突破力をみせた。
まるで竜巻の化身のように人生を進む、
二転、三転……セカンドキャリアは止まらない。

小林 至（こばやし・いたる） 江戸川大学教授。1968年1月30日生まれ。神奈川県出身。多摩高から東大。練習生を経て、92年、ドラフト8位でロッテ入団。史上3人目の東大出身プロ野球選手となる。退団後、米国に移住してコロンビア大で経営学修士号（MBA）を取得。02年から江戸川大助教授となり、06年から教授。05年から14年まで福岡ソフトバンクホークス取締役を兼任。10年からはフロントの責任者を務めた。14年末に同球団を退団。サイバー大学客員教授、福岡大学非常勤講師も務める。近著に、『スポーツの経済学』（PHP研究所）

——1992年に千葉ロッテマリーンズにドラフト8位指名で入団しました。東大経済学部卒のプロ野球選手として、当時のマスコミは大騒ぎでした。スポーツ新聞も一面扱いでしたね。

小林 いやあ、四半世紀前の古い話ですが、本当に自分がプロ野球選手になれたことは嬉しかったです。

お得な合格

——マスコミが小林さんに惹かれたのは、その学歴もですが、野球がやりたくて東大を目指して入ったという点でした。

小林 僕は子供の頃から野球が大好きで、少年野球のチームに入っていました。父の影響もあってアンチ巨人でしたね。特に江夏豊投手が大好きで、阪神タイガースのファンでしたが、日本ハムファイターズの子供クラブ（当時は後樂園にあった）のイベントにもよく参加していたんです。中学は野球部がなかったので卓球部でしたが、神奈川県立多摩高校で

は野球部に入部しました。進学校でしたが、練習は毎日。朝も早くて、結構、きつかったです。真面目に頑張りましたが、レギュラーにはなれない。その程度の選手でした。高3の最後の夏を終えても、野球の練習から解放されたという安堵感はありませんでした。大学受験へ気持ちを切り替えるわけですが、僕のレベルでレギュラーになるには私大は無理だけど、国立大なら可能性があると考えました。そのために浪人して必死で勉強しました。1日12時間、電車の中やトイレの中でも勉強しました。そうしたら8月の東大入試の模擬試験でA判定が出たんです。浪人前の偏差値は40台だったんですよ。予備校では「奇跡の受験生」と呼ばれました。

——凄い！ 勉強に集中して東大の文Ⅱ（経済学部）に合格したときはどう思いましたか。

小林 あー、これで野球ができる……です。東京六大学だ！ 神宮だ！ と思いました。東京六大学という大学最高峰のリーグに、自分も出場できるか

もしれない。凄いい得じゃないですか。やったあ！と思いました。

——4年生でエースになります。東大通算200勝目を達成するチャンスもありましたが、残念ながら勝てませんでした。通算0勝12敗でしたね。

小林 みつともないですが、現実です。

大人と子供

——ですがロッテに入団されました。プロ在籍2年。1軍での登録はありませんでしたが、現役時代はどんな記憶が残っていますか。

小林 プロ野球というのは本当にとびきりの凄い世界でした。六大学時代もプロ予備軍のような人たちと対戦したわけですが、プロ選手を見たときには心底から驚きました。とにかく運動神経抜群で、手足を思いのままに使える人たちばかりでした。ランニングの一環で鬼ごっこをやりましたが、僕が鬼だと誰も捕まえられない。ステップだけで逃げられて

しまう。逆に他の選手が鬼だと僕はすぐに捕まえられてしまう。運動能力の差は歴然でした。ブルペンで投げていても劣等感ばかり感じていました。隣で伊良部（秀輝）が投げた時にキャッチャーミットから出る音が、「パチーン」と澄んだ音で、もう大人と子供ぐらい違うものを感じました。プロの世界に入る時には自分でも差はあるだろうと思っていましたが、能力的に違い過ぎていました。他の選手と比べても、はるかに甘かった。何かを成し遂げるときに費やされる時間の集積で「100000時間の法則」というのがあるのですが、僕が子供のころからやった練習量をトータルしても全然足りなかったと思います。つまり、才能、努力ともに十分でなかったということですね。

怖さと真つ白

——すると早くからプロを辞める覚悟ができていたのですか。

小林 実力がないことは骨身に染みて分かっているが、自分の人生から野球がなくなってしまうのが怖かったですね。辞めることは考えていないというより、考えるのを自分の中で拒否していました。考えるものじゃない、考えちゃいけないと思っています。

——すると球団からはどのような形で？

小林 実は先に新聞に書かれてしまつて、ほどなくして球団から「明日来てくれ」と電話がありました。翌日、球団事務所に行きましたら、予想どおり「グビ」を通告されました。「アンダースローに挑戦するから、もう少しやらせてください」と食い下がったのですが、聞き入れてもらえませんでした。クビ宣告を受けるのは分かっていたはずでしたが、それでも現実になると、頭の中が真っ白になったことを憶えています。

リセットと箔^{はく}

——その翌94年に米国のコロンビア大学大学院へ留学されます。どういう経緯だったのでしょうか。

小林 実はセカンドキャリアについてはいろんなところからお話をいただきました。新聞社や広告代理店、プロゴルフアーやタレントにならないか、県議会議員の地盤を継がないかというお話までありました。でも、自分の中でどれも「これだ」と思えなかった。独り身でしたから、食うために働く、という切迫感もまだなく、なんか浮ついていましたね。そういうしたなか、「留学したらどうだ」というアドバイスが複数ありまして、自分でも海外への憧れもあり、住む場所もすべて変えて、リセットしようと思うに至りました。英語はもともと苦手ではなかったし、留学費用には契約金が1000万円ちよつと残っていたので、これを使いました。

——留学して何をしようと考えていたのですか？

小林 大学院でMBA（経営学修士）を取得しようとは考えました。資格を取り、英語も上手くなれば、どこからか声がかかるだろうと思っただけです。留学して箔（はく）が付けば、ビジネスの世界でも生かせるのではないかと。実は野球やスポーツの世界のことも頭の中にあって、日米の架け橋となるような仕事ができればいいなあと思っていました。

時代と現実

——野球を通じた国際ビジネスマンという夢が広がったわけですね。

小林 大学院を修了してMBAを取得する96年は、アトラクタ五輪も開催されるし、チャンスなんじゃないかと率直に思いました。テレビ局勤務の知人からも「メンキヤスターの声がかかるかも」なんて言ってもらいましたが、現実にはまったくそういうことはありませんでした。

——コロンビア大学大学院を修了した後、『ザ・ゴ

ルフ・チャンネル』というテレビ局で仕事をされます。通訳、翻訳、コメンテーターとして活躍されましたが、引く手あまたの中で仕事を選ばれたのではなかったのですか。

小林 違います。テレビ局が日本語放送を始めるにあたり、スタッフを募集しているというのを求人広告で見つけたんです。大学院の仲間はウォール街でビジネスマンになって高額な給料をもらうことを夢見ていました。実際にその通りになった人も少なくないのですが、僕はそういう仕事に就きたいわけではなかった。やろうとすればできたかもしれないですが、当時は興味がなかった。今はウォール街に行くのも妙手だったなあと思っていますがね。MLB（メジャーリーグ）に就職しようと、当時の国際部長に相談しましたが、少し時代が早かった。「国際的なビジネス展開はまだまだ先の話で、そういう時代が来たら、また話そうよ」と言われましたね。

勝負と解雇

——米国に7年滞在されて、日米の文化や生活を比較した著書を次々に書かれています。

小林 米国に行ったことで発想の引き出し、自分にとって毛色の異なる引き出しが増えました。複眼的にもなったと思います。日本人が気が付いていない米国人の生活や文化を書き記したいと思いました。

——転んでもただでは起き上がらない。小林さんの本領発揮ですね。「ザ・ゴルフ・チャンネル」という会社を解雇されたときに、自分の中で米国という国が明快になったということはありませんか。

小林 自分の中で「こんなところで何をしているんだろう」という思いが強くなっていたことは事実です。「ザ・ゴルフ・チャンネル」での仕事は労働時間問題はなく、給料もオーストラリアで暮らすには十分でした。ただ、どこかで男として人生に勝負をかけたいという思いもあった頃です。会社の全体会議

で社長が直接話をする日でした。会議の時間が余り、「何か発言したい人がいれば……」と言われたので「ハイ」と手を挙げて「ウチの会社にはなぜ管理職に（白人以外の）マイノリティーが一人もいないのですか」と発言しました。会議の席では「ウチの会社」に「壁」はない。君がその前例になればいいじゃないか」と言われたんです。ところがその数カ月後、僕がJMM（作家の村上龍氏が主宰するウェブマガジン）に書いたコラムが会社の評判を傷つける内容だと言われて雇用を打ち切られてしまいました。当時、自分の気持ちの中には日本に帰国するときは凱旋帰国したいという思いもあり、どこかで気持ちが後ろ向きだったですね。今は反省しています。失敗しました。

——その後、ご自分の立場を主張しようと弁護士事務所を訪ねられて、会社と闘ったことも著書の中に書かれています。失敗しても闘う姿勢は、小林さんの生きる姿勢だとも感じました。

小林 反省しきりですよ。何しろ性格が後先を考えないタイプですからね。

評価と出会い

——帰国後、2005年から福岡ソフトバンクホークスで取締役としてチームづくりに尽力されました。どんなご縁があったのですか。

小林 2000年末に帰国して、その後、江戸川大学で教壇に立つようになりまして、3年目でしたか、プロ野球の経営についての本を書こうと思い立ちました。当時、巨人軍のオーナーだった渡邊恒雄さんにインタビューしたいと手紙を書いたんです。2004年に球界再編があり、オリックスと近鉄が合併して、ソフトバンクがダイエーを買収した頃で渡邊さんに聞きたいことがたくさんあったからです。

——それまで渡邊氏と親しかったのですか。

小林 全然。まったく面識はなかったのですが、インタビューをOKしてくれました。その年、渡邊さ

んが唯一受けてくださったインタビューだったと、あとで知りました。その取材を元にして単行本『合格、売却、新規参入。たかが……されどプロ野球』を出版したら渡邊さんが高く評価してくださいまして、自分の知っている人をすべて紹介するとまで言ってくれたんです。そのうちの一人がソフトバンクの孫正義オーナーでした。ぜひ会いたいと連絡があり、2005年の年明けから会って、2時間ぐらい話したあと、役員にならないかと言われました。

——何が孫さんの心に響いたのでしょうか。

小林 当時、プロ野球界は戦力均衡とか、米国のプロスポーツリーグをモデルにすべしという考えが主流でしたが、私はむしろ欧州のサッカーのように、グローバル競争を念頭に、自由競争したほうがよいという話をして、共感してくれました。また、地域密着とグローバル化は両立できるし、実際、世界的なプロスポーツチームはみなそうしているという話にも、共感してくれたようです。

——その時の気持ちは？

小林 びっくりしたし、嬉しかったですね。世界のビジネス界でもトップクラスの人に、その場で一緒にやろうと言われたわけですから。

設立と不況

——ソフトバンクホークスで仕事をして、何か手応えは感じましたか。

小林 営業畑担当、連盟担当から入って、IT担当などを務めたあと、王（貞治）会長のもとでチームづくりを担当することになりました。担当した5年間で優勝3回、日本一2回の成果は、もちろん監督、選手をはじめとした現場スタッフの方々の頑張りのおかげですが、他の球団にない三軍制を設立できたことは良かったと思っています。支配下選手や、ドラフト指名の数には限りがあります。ならば育成部門にテコ入れをしたいと考えました。野球選手は将来予測がものすごく難しいという実感があつたからです。

大リーグは1チームに250人も選手がいます。一方、日本は70人です。日本はファームの前段階の役割を社会人野球が担っていました。ところが平成不況の影響などで企業チームが次々と休部になりました。僕が現役のころは220〜230社あったのに、今は70社ぐらいです。三軍制にしたことで他チームが70人のところを90人まで増やしました。三軍がアイランドリーグ（独立リーグ）や韓国（KBO）の二軍との試合を積むことで若い選手も伸びました。

自負と自由

——小林さんならではの成果はそのほかにもたくさんありました。2014年にソフトバンクが日本一になった後、再び江戸川大学の教授に戻られたのはどうしてでしょうか。

小林 ソフトバンクでやるだけのことはやらせていただいたという自負も多少はあります。大学からもそろそろ戻ってきてほしいとも言われました。組織

で丸10年もやりますと、大学教授の自由さが懐かしくなったのがありますね。

ツール（道具）と誇り

——今、日本にはセカンドキャリアに悩むアスリートが大勢います。小林さんの生き方はセカンドどころか三転、四転ですね。何か彼らに言ってあげたいことはありますか。

小林 米国に初めて行った時に新鮮だと感じたのは、野球もアメリカンフットボールも、大学に行くにしてもプロ選手になるにしても、その能力は、よりよい人生を送るためのツール（道具）なんだという考え方です。アスリートでいられる期間は誰が何と言おうと限られた時間しかない。神様に与えられた才能を使って金を稼ぎ、人脈を築き、次の人生に備える。とても合理的な考えですよ。若い時はいろんなことをやってゆけばいいんじゃないの……と思います。僕みたいに、こんなに行き当たりばったりで

も何とか生きてゆけるんです。今、思い返しても相当面白い人生だったと思いますよ。

——本当に。ネバーエンディングストーリーというか、わらしべ長者のような人生ですね。

小林 本当に、転んで転んで……珍種ですね。でも僕は今でも人から「プロ野球選手でしたね」と言われるのが一番嬉しいし、誇りに思えるんです。あんなに毎日がみじめで、辛い時間だったのに……。

——とことん、そして堂々とやり尽くされたからでしょうね。ありがとうございました。



特集



アスリートの
引退後を考える

それぞれの セカンドキャリア問題 ——多種目横断シンポジウム



アスリートの現役生活には
必ず終わりがくる。
スポーツに精魂を込めた後
何を考え、何を掴み
そしてどう振りかえるの
か？

——まずは皆さんの選手としてのキャリアと、現在何をされているか、そして現役時代、セカンドキャリアについてどう考えていたのか。そもそもセカンドキャリアを考えていたのかいなかったのかというところから聞かせてください。では現役時代からセカンドキャリアを「考えた」という方から。

セカンドキャリアを考えたとき

栃乃若（大相撲力士↓サラリーマン）

〈考えた〉 私たち力士は相撲界に入ったらまず関取を目指します。次に親方になって引退後も相撲協会に残る資格を取るために頑張ります。親方になれなかったら、ちゃんこ屋など体を使った仕事をするか、親や親戚の会社に入れてもらったり、後援者に仕事を紹介してもらったりというのがほとんどだと思います。今の私のように、引退後サラリーマンとして頑張っていますという人は、私の知る限りあまりいなかったですね。



片山 卓哉

（かたやま・たくや）

理学療法士●1972年2月23日生まれ。静岡県出身。埼玉・越谷南高、中央大を経て日本のトップチーム「NTT東日本」入社。全日本総合ダブルス優勝、全日本社会人ダブルス優勝、全日本実業団大会優勝、日本リーグ優勝、国民体育大会優勝など輝かしい実績を持つ。現役引退後は自身の経験を糧に理学療法士の道へ。障害予防やケガからの復帰、競技力の向上などさまざまな悩みへ貢献できるよう尽力している。



村井 忠寛

（むらい・ただひろ）

株式会社アスリートスタンダード●1975年7月25日生まれ。北海道出身。苫小牧工高、東洋大を経て98年、古河電工に入部。1年目でチームの廃部を経験するが、廃部を受けて創設された日光アイスバックスで現役を退く2009年までプレー。09年シーズンより監督に就任、11年はチーム初のアジアリーグ準優勝に導く。13年に監督を退き、15年にアスリートの育成とキャリア支援事業を行う「株式会社アスリートスタンダード」を設立。



田口 竜二

（たぐち・りゅうじ）

白寿生化学研究所人材開拓グループ長●1967（昭和42）年1月8日、広島県出身。宮崎・都城高3年の84年、左腕のエースとして春夏甲子園に出場。春は準決勝で、夏は3回戦でともにPL学園に敗れた。同年ドラフト1位で南海入団。唯一の一軍登板となった86年10月14日のロッテ戦は1回1失点。90年に引退して打撃投手転向。94年に現役復帰も1年で引退した。05年に退団。06年より白寿生化学研究所勤務。

私自身も高校を卒業して入門した頃は、協会に残るしか道はないのかなと思っていました。力士たちは子どもの頃から相撲しかやってきていませんから、そのことを生かした仕事以外の仕事ができるとは考えもしないですね。ところが私の場合、自分の好きな仕事、興味のある仕事をしてもらいたいと言ってくくださる方との出会いがありました。私の中の常識が変わった瞬間でした。その方と、現役の時からセカンドキャリアを考えてきました。

村井忠寛（アイスホッケー選手・監督→会社経営）

〈考えた〉大学を卒業して古河電工に入社しました。歴史のある大企業で、とくにアイスホッケー部は73年という日本最古の伝統を誇るチームだったので、入って1年目で活動休止、その翌シーズンから廃部になってしまいます。セカンドキャリアを最初に考えたのはその時ですね。アイスホッケー界でもセカンドキャリアは一つの課題ですが、実際には皆自分で進路を探っていくしかないという状況です。



栃乃若 導大

（とちのわか・みちひろ）

ハクジュブラザ東中野店店長●1988年4月6日生まれ。兵庫県出身。報徳学園高では2006年に高校横綱に輝き、高校卒業後、春日野部屋に入門。07年1月場所ですべりを踏む。幕下生活を17場所送り、10年9月に新十両昇進。11年5月に幕内力士。12年3月場所で自己最高位となる西前頭筆頭まで番付を上げた。14年11月場所を最後に引退。翌15年4月に株式会社白寿生科学研究所の健康に関する考え方に共感し入社。現在は「ハクジュブラザ東中野店」で店長を務める。



西田 隆維

（にしだ・りゅうい）

株式会社オーランド●1977年4月26日生まれ。栃木県出身。佐野日大高、駒澤大学に進学し、箱根駅伝に4年連続出場。卒業後エスピー食品に入社し、2001年別府大分毎日マラソンで2時間8分45秒で優勝。同年世界陸上エドモントン大会に出場。09年2月に現役引退。その後はタレントとして活動。2013年に株式会社オーランドを設立し各地でマラソン大会、イベントのプロデューサー・企画運営など積極的な活動をしている。



箕輪 義信

（みのわ・よしのぶ）

神奈川県立新城高等学校教諭●1976年6月2日生まれ。神奈川県出身。弥栄西高、仙台大に進学し、97年にユニバーシアード代表に選出される。99年にジュビロ磐田へ入団。2000年シーズ途中に川崎フロンターレに移籍。05年に日本代表に選出され、1キャップを記録。08年にコンサドーレ札幌へ移籍し、11年に現役を退いた。引退後は神奈川県立新城高等学校にて中学生の頃からの夢「体育の先生」として同校サッカー部を指導。

選手を11年間、監督を4年間やらせてもらいました。監督としてもこのセカンドキャリア問題を考えることがあり、それは大学生をスカウトしに行く時でした。そこで、「現役が終わった後、どうするんですか?」「おたくのチームはセカンドキャリアの受け皿はあるんでしょうか?」といった質問をよく受けるんですね。入団交渉の場でそのような質問に対するカードが切れないと、チームからの一方的な思いだけでは希望の新戦力を獲得できないという課題を感じました。その後チームのスポンサー営業を経てアスリートのキャリアサポートを行う会社を起業しました。

片山卓哉（バドミントン選手→理学療法士）

〈考えた〉最初にセカンドキャリアを考えた時期ですけれども、大学を卒業して企業に入る時点で、先を見越して会社を選んでいきます。私が入社したのはNTT東京（現・NTT東日本）という、世間で言う大企業です。バドミントンの世界はプロがありま

せんから、実業団のチームに入って競技を続けることになります。当時のナショナルチームに選手を多く輩出していましたし、引退した先輩方もしっかり仕事をされているという印象がありました。オリンピックを目指しつつ、引退後の先の人生も保障されると思い、あまり深く考えずに選んだというのが正直なところです。

ただ私の中では、教員免許の取得など別の道でセカンドキャリアの保証を得ている人以外は、最初のキャリアで引退後をしつかり考えた企業選びをしている印象です。企業がスポーツ活動から撤退して廃部になったとしても、最初の段階で既にそのリスクを頭に入れて就職先となる企業を選んでいることが多いのではないかと思います。

セカンドキャリアを考えなかったケース

——現役時代、セカンドキャリアについて「考えなかった」とおっしゃるのは、サッカーの箕輪さんと

陸上の西田さんですが。

箕輪義信（サッカー選手→高校教師）

〈考えなかった〉僕は現在体育の教諭として学生たちと向かい合う日常を過ごしていますが、実はもう中学生の時から教員になりたいという想いがありました。プロのアスリートになるのが目標ではなかったところが、皆さんとは違うところかもしれません。大学へ行ったのも教員の資格を取るという目標があったので、サッカーはあくまでプラスアルファとして続けていました。ジュビロ磐田に誘われた時も、当時は中山（雅史）さん、藤田（俊哉）さん、名波（浩）さんなど錚々たるメンバーがいる中で、僕自身の実力を考えてもとても無理だと最初はお断りました。

ただプロのスカウトに声をかけていただいて、寄りを道をして他人には出来ない経験をして人間の幅を広げて、その後に教師を目指しても良いのかなという気持ちが芽生えてきました。僕みたいな若いのが

言うのは申し訳ないんですけど、人生はすべて積み重ねで続いていて、その先に生まれてくるのが仕事だということを聞かされていました。プロになるからには一番を目指し、その高みを目指すことによって初めてつく力がある。それが次の世界に生かされるんじゃないかということを考えた。ですから今の教師の仕事をセカンドキャリアとして考えたことはありませんし、セカンドキャリアという言葉自体に違和感があります。

西田隆維（陸上選手→会社経営）

〈考えなかった〉大学は駒澤大学の仏教学部仏教学科です。駒澤大学は今でこそ駅伝の強豪、名門校といわれていますけど、私が入学した当時は箱根駅伝の予選会に出て出場権を争うレベルのチームでした。箱根で初優勝したのは私が4年生の時です。だから大学に入る時は陸上でオリンピックや世界陸上を目指そうなどという気持ちはまったくなくて、そもそもは僧侶になるつもりで駒澤大学に入っただけです。

大学を出た後は実業団で陸上を続け、引退した後には俳優をしていました。大学進学で上京した頃にいるような芸能人、有名人を見て、「オレも俳優とかなれるんじゃないかな」って思ったことがきっかけでした。

ただ役者の世界にはそんなどこか上っ面な気持ちで入ってしまったために、陸上に比べて俳優の仕事には燃える気持ちがなかった。それで原点に戻って、自分がやってきた陸上競技をサポートする活動を始めました。

その時に直面したのが、引退したランナーたちのセカンドキャリア問題です。箱根駅伝が今すごいブームになっています。箱根で活躍した選手は優良企業の陸上部で競技を続け、引退後もその会社で働けるような条件で就職できます。しかしトップ選手になればなるほど競技に費やす時間が長くなり、実際に仕事をする時間が短くなります。試合や練習、遠征や合宿で時間をとられることが多ければ、会社で

は大事な仕事は任せてもらえませんか。陸上界のヒーローが、会社から仕事ができないと判断されたり、逆に自分でそう思い込んだりするような現状を、どうにかしたいと思っています。

問題解決に求められるもの

——皆さんの世界を見渡して、あるいは個人的な経験に基づいたものでも結構です。セカンドキャリア問題の解決に向けて、提言やご意見を聞かせてください。

柊乃若 私は「知る機会」が大切だと思います。「僕は相撲しかやってこなかったから、ちゃんこ屋とか力仕事とか、そういう仕事しかできない」と言っている力士が、実際に私の周りにたくさんいました。私は「そうじゃない」と言ってくれる方に出会えたことで、一歩前に踏み出すことができました。「知る機会」を設ければ、考えも変わる、道も開けてくるんじゃないかなと思います。私は好きな仕事、や

りたい仕事ができる会社で働くことができます。若い力士たちには、こういう道もあるんだと知って欲しいです。こっちに来いという意味じゃなくて、まずは知って欲しいということです。

村井 『文武両道、日本になし』というマーティ・キーナートさんの著書に、海外では政治家や医者に転身したトップアスリートが珍しくないのに、日本ではそういう例がきわめて少ないことが多いの参考事例を挙げて書かれています。表現は悪いですが、スポーツ選手はスポーツ以外何もできない「スポーツ馬鹿」だと見られる傾向があることは事実です。実際に僕も自分の環境を変えようとした時に企業にエントリーシートを送ってみました。ものの見事に弾かれて、やっぱり社会ってそういうもんだなって実感できました。

経済産業省が提唱している〈社会人基礎力〉という言葉がありますが、要約するといわゆる自立した人間ということになります。トッププロを含めてス

ポーツ選手が社会的に自立した人間であることを社会に示すこと、理解させることが重要だと思えます。教育など社会的なインフラから変えていくには人も時間もお金もものすごくかかってしまうので、まず変えていけるのは「個」だということです。いずれは社会がもつともつと成熟し拓けていつて、アスリートの社会的価値ももつともつと認められる。そう信じて私は事業を行っています。

スポーツ選手だからこそ持つ能力

箕輪 今教育の現場にいて、学校の先生をやっていると思うのは、実はスポーツ選手が子どもたちに教えられることって非常にたくさんあるということです。具体的に数学や国語や社会を教えることはできなくても、もつと根源的な、いわば「生きる力」を鍛えるのはスポーツが最も有効なものではないでしょうか。たとえば数学という教科が鍛える問題解決力、ある問題が生じた時に素早く明確に答えを出していく

ということについては、スポーツ選手は普段からそういうことを繰り返しているわけです。国語に関しても、スポーツをすることで学べるコミュニケーション能力があります。かつて世界の最先端と言われた技術、戦術を研究した上でそれを上回る新しい技術、戦術を打ち出していく力は、歴史や地理、社会学が鍛える力にも通じます。しかもそういう能力は一流選手になればなるほど高いわけです。

ただ僕は教育界においてスポーツ選手の価値に気づきましたけど、選手たち自身が自分たちの価値を分かっているのが問題です。それにスポーツ選手として、同じスポーツ界にいる人たちのことばかり意識していて、意外と内向きじゃないですか。スポーツをあまり知らない方たちにも自分たちの価値、スポーツの価値を言葉にして伝える、スポーツ界がその伝達方法を学んで皆さんに理解してもらうことが大切だと僕は思っています。だから僕のひと言は「スポーツを通じた相互影響」です。皆さんの息子さん

や娘さんがスポーツ選手に教えられて成長したら、「いいんじゃないの、スポーツ」と思ってくれるんじゃないでしょうか。

教育現場では、子どもたちに夢を語らせることが多いんです。でも不思議に思うのは、夢を語らせてもその叶え方を教えないんです。その道筋をリアルティをもつて教えられるのは、実際に夢を叶えたトップアスリートではないでしょうか。それを上手く伝えられたら、アスリートが社会から必要とされる存在になるんじゃないかなと思うんです。

人生の中の「競技人生」

西田 私の一と言は「身近な良い例」です。マラソンや駅伝を見ている方はご存知だと思いますけど、日本には数多くのケニア人、エチオピア人が来います。彼らのほとんどはその後日本の企業で働き続けるわけではない。国に帰って自分のビジネスをしようというのが常に頭の中に入っているんです。も

もちろん競技では真剣に結果を求めながらですが、同時に次の世界を考えています。競技人生はいつか終わるもの。そういう〈身近な良い例〉をちよつと真似してみるのも良いんじゃないでしょうか。

——走ってお金を稼いで国に帰ってビジネスをする。彼らは自分の人生のビジョンをちゃんと持っていて日本に來ているんですね。日本人はそうできないんじゃないか。

西田 完璧な答えではないと思いますが、だいたい日本のトップ選手は推薦、推薦、推薦でエスカレーター式に來てしまうんですね。そうなるとビジョンを持ったとしても、長い人生の中での競技人生ではなくて、競技人生という枠の中で捉えている人が多いのかなという感じがします。

片山 現役を引退した後、理学療法士の資格を取って、今は整形外科病院に勤めています。最初に就職した病院は総合病院で、人の生死にかかわる別のすごい出会いや経験をしました。そういう体験を通じ

て、自分自身が競技をやっていた時は本当にそれがすべてという思いでしたのですが、人生という大きな目で競技を考えても良いんじゃないかと思うようになりました。

日本のバドミントンが強くなりオリンピックも期待できるというふうになっています。そうなるとうニア選手やその親たちも加熟してきて、小学生のうちから何が何でも世界で勝たなきゃという子どもたちもいます。彼らに会って正直、「この先バドミントンだけの人生で大丈夫か」と感じることもありえます。自分が関わってきた競技の中の警鐘を鳴らしたい部分です。

私のひと言は〈人生というものを考えて一つの競技を捉える〉。たとえ選手が24時間競技のことを考えて練習したと言っている、日々の生活の中にゆとりを持つことは絶対にできません。例えば、海外遠征の機会を利用して英語力を身につけることだってできると思います。それは、スポーツに対して手を

抜くという意味ではないんですね。自分自身も100%の気持ちで競技に向かい合っているつもりですが、振り返ってみると実は結構違いました。大きな目で競技を考えてゆとりを持つことができれば、もつと力が出たんじゃないかなと、今は思っています。へ人生というものを考えて一つの競技を捉えるために、子どもの頃からの教育が大切。その環境づくりはやっぱり大人がやっていくべきでしょう。

——皆さんがおっしゃったように、私もスポーツ選手のセカンドキャリア問題を根本的に解決するためには親や学校、指導者など教育環境を変えていくことが必要だと考えています。子どもの頃から自分の人生を考える、自分の一生を考えることができるような教育環境になれば、そもそもセカンドキャリアという言葉自体がなくなっていくんじゃないか。そう信じています。

皆さん、本日は有難うございました。



プロ野球チーム セカンドキャリアサポートについて

07年にセカンドキャリアサポートを開始

プロ野球の世界では毎年秋のドラフトで全12球団に80名前後が入団する。一方で同等の数の選手が戦力外通告を受け退団していく。退団した選手のうち5割強は、コーチ、スタッフとして球団に残ったりトライアウトで他の球団に移ったり、プロ野球と関わる仕事に就くことになるが、残り5割の人は野球以外の職業を探さなければならない。スタッフとして残ったとしても1年契約が多く身分が不安定である。

プロ野球を引退した選手が社会人としての立場を確立するための、そして不安定な部分を少しでも改善するためのセクションとして、日本野球機構（NPB）の中に「セカンドキャリアサポート」体制が設立されたのは、2007年10月である。その活動内容は大きく分けて「引退選手のキャリア支援」と「現役選手の各種ビジネス系スキルの習得支援」である。

「キャリア支援」とは、選手の引退後の進路に関してNPBがサポートするもので、引退した選手がNPBのセカンドキャリアサポートに連絡すると、キ

ヤリアサポート担当者が面談した上で自分の可能性についてさまざまな選択肢を提供してくれる。興味のある選択肢については一般企業の求人も紹介してくれ、就職活動をサポートするものとなっている。

「ビジネス系スキルの習得支援」とは、現役選手が引退後に備えてパソコンや英会話を学びたい、資格を取得したい、通信講座を受講したい等という時に、学校等を紹介してくれるものである。

窓口を訪れる選手は毎年10人に満たない

毎年2月のキャンプ時期にNPBのキャリアサポート担当者が12球団を全て巡回し、NPB内にセカンドキャリアサポート体制があつてキャリア支援とビジネススキル支援を行っていることをアピールし、そして現役時代、なるべく早くから引退後のセカンドキャリアを考えるべしという意識づけを行っている。担当者は選手たちに対してまず最初に、「解雇されてから貯金が1円もないことに気づいても遅い

んだよ」と語りかけるのだそうだ。

そのように啓蒙活動が続けても実際にNPBのセカンドキャリアサポートの窓口に相談にくる選手は毎年10人にも満たない（2015年1月～12月）。むしろ選手ではなく裏方スタッフからの相談が、年々増えてきているという。選手たちに引退後の不安がないというわけではない。毎年10月にNPBが行っている若手選手への意識調査では、「引退後に不安を感じている」選手が2015年は全体の72・7%で依然、高率である。つまり選手たちの将来への不安は大きいにもかかわらず、現状ではNPBのセカンドキャリアサポートを有効に活用している選手はきわめて少ないと言わざるを得ない。

早くからセカンドキャリアの重要性に着目

2013年2月、野球評論家の衣笠祥雄さんの講演を聴く機会があつた。講演のテーマは「地域密着型広島東洋カープ選手のセカンドキャリア」。

衣笠さんは、「僕らが球団に入った時にオーナーから言われた『君たちは立派な社会人になってカープを卒業してください』という言葉が忘れられない」と言う。

衣笠さんが平安高校を卒業して広島東洋カープに入団したのは1965（昭和40）年。当時のオーナーは「広島東洋カープ」としての初代オーナー松田恒次。カープ一筋、2131試合連続出場の世界記録を達成した「鉄人」衣笠であれば、引退後の生活に不安はなかったと思われるが、高校を卒業してプロ野球に入ったばかりの一選手にとっては、当時のオーナーの一言は大いに心に残つたに違いない。

「世の中の企業、人間しかない。だから人間を育てなければどんな企業も潰れる。野球は10年、残りの人生は40年以上もある。ユニホームを脱いだ後の一般社会で役立たずではどうしようもない。野球が終わってからの人生が一番大事である。だから球団にいる間だけでも嫉は厳しく行うように」

これも初代オーナー松田恒次の言葉。今で言う「セカンドキャリア」の重要性に着目した発言として特筆に値する。

「入団した選手は家族も同然」（*1）、野球がダメでも第二の人生は幸せに行くように、という彼の考え方は2代目、3代目のオーナーにも連綿と受け継がれ、カープという球団の特質のひとつとなっている。

球団のこのような姿勢に衣笠さんは、「先輩方は、選手を辞めたら球団に恩返ししなければ、とよく言っていました」と話した。また、「スカウトが引退後の就職斡旋もしてくれていた」とも言った。スカウトは選手を入団させた者の責任として、野球では力を発揮できなかった選手の相談相手になり、就職の世話をしたという。

町のキャリアサポーター「上原学校」

衣笠さんがカープに入団した頃、広島県の町でいわ

ば私設のセカンドキャリアサポートを行っていた人物がいた。上原清二氏。当時の南海ホークス（現・福岡ソフトバンクホークス）監督、鶴岡一人と広島商業高校の同級生で、親友だった。

昭和30年代、まだドラフト制度が始まる前の選手獲得が自由競争だった時代、「鶴岡を男にする」とボランティアで良い素材（選手）を探して歩いた。本業は呉服屋、だが家業をほっぽり出して鶴岡監督のために中国地方を歩き回った（*2）。

鶴岡が昭和43年に監督を退くと同時に上原の私設スカウトも終わったが、鶴岡の個人後援会「ちようちん会」の人脈が、旧ホークス、カープを中心に野球界全体に広がっており、旧広島市民球場から歩いて1、2分の上原の自宅は、監督、コーチの異動やトレード情報等を求めて記者や球界OB、関係者が訪れ、いつも人でごった返す、球界の一大サロンだったそうだ（*3）。その上原家を、引退した選手が訪れては就職の相談をしていたという。そこは

「上原学校」と呼ばれるようになり、カープの選手でお世話にならなかった者はほとんどいない、ときえ言われた。

とかく都会に居る方が仕事を見つけやすいと思われがちだが、地方都市には「おらがチーム」を皆で盛り上げる郷土愛があり、世話をする人情がある。案外、地方球団に入った方が長い人生を楽しむことができるかもしれない。

（本稿は2014年2月28日発行のスポーツジラ24号に掲載したものに追加取材し、加筆しました）

参考文献

- （*1） 松永郁子著『カープ―苦難を乗り越えた男たちの軌跡』（宝島社）
- （*2） 後藤正治著『スカウト』（講談社）
- （*3） 中国新聞社編『カープ50年―夢を追って』

Jリーガーのセカンドキャリア

2016年現在、Jリーグには53のクラブが加盟しており、約1600名の選手が登録されている。1993年、10クラブ、約300名の選手でスタートし、99年のJ2創設などリーグの拡大に伴ってクラブ数、選手数は徐々に増えてきた。2014年にJ3が新設されたために一挙に増えて、開幕からの23年でクラブと選手の数はいずれも5倍以上に増えている計算になる。

しかし残念なことに、Jリーグでプレーする選手の数が増えても、全ての選手が思い通りの現役生活を送れるわけではない。Jリーグでは、契約の更新締結がかなわずに選手登録を抹消される選手の数が毎年100を超える。引退時の平均年齢は25・6歳とプロ野球と比べて4歳ほど若く、大卒選手であれ

ばプロ入り後2、3年で次の進路を考えなければならぬ。今後、Jリーグが拡大していくとともにセカンドキャリアに悩みを抱える選手が増えていくことは予想に難くない。だが、Jリーグは国内の競技団体としては比較的早くからこの課題を解決すべく様々な取り組みを始めている。

日本初のセカンドキャリア支援組織

最も代表的なのは、2002年に設立された「Jリーグキャリアサポートセンター（CSC）」による取り組みだろう。CSCは日本のプロスポーツ界としては初となる現役選手のキャリアデザイン支援や引退後の進路支援を目的に設立された組織である。選手の視野の拡がりを期待した福祉施設の訪問や、

パソコンや英会話などの実務講座、マナーやコミュニケーションに関する研修、選手のシーズンオフを利用したインターンシップなどの支援事業を展開し、OB選手の体験談や引退後の活動、求人情報や優待条件付き学校情報などを掲載したキャリアサポートブック『off the pitch』の発行なども行っている。

現役を引退した選手には進路支援としてカウンセリングや面接を実施し、選手の適正や希望に即した企業を紹介するなどしている。設立当初は選手から懐疑的な眼差しで見られていたが、CSCの紹介をきっかけに就職に至るケースが続いたため、徐々にCSCを利用する選手は増えていった。2002年に0名だったインターンシップの参加者は2005年以降10名を超えるまでになり、希望者が絶えなかったという。当時Jリーグ選手協会会長だった中山雅史も、「今までは選手個々がクラブや個人の伝手^{つて}を使つて就職・相談などしていたが、今後は、サポートセンターの支援を得られることで、現役中は安心

してサッカーに専念できる。インターンシップなどで仕事を体験できるのも今後の人生にとってプラスだと思う」とCSCを高く評価している。

対処から予防へ

その後、CSCは2010年に事業の見直しを行い、それまでのトップ選手へのキャリア支援から、3年目までの若手プロ選手とアカデミー(育成組織)所属選手を中心としたキャリア教育へ事業の重点を移した。これにより、新人選手向けの「クラブ理解教育」、3年目までの若手選手向けのクラブによるホームタウン活動を通じた「社会人教育」、アカデミー所属選手向けの「プロサッカー選手としてのプロ意識向上」を目的とした各種研修などが各クラブとともに行われるようになった。さらに同年、文部科学省の競技者・指導者等のスポーツキャリア形成支援事業を業務委託し、「キャリア・デザイン・サポートプログラム」が開始された。このプログラム

の対象は主にアカデミーに所属するジュニアユース（中学生）の選手で、プロを目指す上でのキャリアについての考え方や心構え、社会人としての適切な就労観、職業観を醸成する研修会が実施されている。CSCは、2013年にJリーグの組織変更に伴って発展的に解散。現在は管理統括部企画部内に「人材教育・キャリアデザインチーム」が設けられ、それまで担当部署が異なっていた選手の教育や研修、キャリア支援などの業務がひとつに集約された。現在もトップチームやアカデミーに所属する若手選手のキャリアデザイン支援を中心にしながら、CSCで長年取り組まれてきたセカンドキャリア支援の窓口業務なども引き続き行われている。

これまでのJリーグによるセカンドキャリア支援の取り組みを見てみると、2002年のCSC設立当初は実務講座の実施や企業の斡旋など、どちらかといえばセカンドキャリア問題への対処が中心であったように見受けられる。しかし、2010年の事

業の見直し以降は、若手選手に向けた教育や研修が活動の中心となっており、支援のテーマが「セカンドキャリアにどう対処するか」から「現役生活であるファーストキャリアを充実させながら、いかにセカンドキャリアの問題を未然に防げるか」へと変化している。アカデミー所属選手へのキャリア教育・研修などはその典型例であろう。

今日では、Jリーグに倣^{なま}い各クラブも若手選手の教育や研修、キャリア支援などを積極的に実施している。これまでもJリーグの主催によって新人選手向けの「Jリーグ新人研修会」が行われてきたが、これに加えて各クラブが主体となった選手教育・研修が行われるようになったのだ。例えば、ヴァンフォーレ甲府は社会人教育の講習会「キャリアアッププログラム」を2ヶ月に1回実施している。クラブのスタッフや外部講師による講話では、地域におけるクラブの役割やプロ選手の役割、メディアへの対応といった様々なテーマを取り上げる。また、クラ

ブのスポンサー企業へのインターンシップも行われており、こうした取り組みは甲府以外の多くのクラブでも行われている。サッカーに限らず、スポーツ選手の多くは社会との接点が少ないため社会性が低いと言われているが、Ｊリーグのクラブはこうした点を改善するために選手たちに社会人教育や研修などを実施し、社会性が高く魅力的な選手を育成することを目指している。

ＪＰＦＡとセカンドキャリア支援

ここまでＪリーグやクラブによるセカンドキャリアへの取り組みを取り上げてきたが、日本サッカーにはその他にも選手のセカンドキャリアを支援する団体が存在する。その一つが「一般社団法人 日本プロサッカー選手会（ＪＰＦＡ）」だ。

ＪＰＦＡは、１９９６年に当時Ｊリーグチェアマンだった川淵三郎の呼びかけによって設立されたＪリーグ選手協会（ＪＰＡ）を前身とする組織である。

ＪＰＡは、設立当初は任意団体であったが２００６年に法人格を取得。その後２０１０年に名称を現在のものへと変更し、それまでＪリーグでプレーする選手のみに与えられていた加入資格が他国でプレーする日本人選手（ただし、Ｊリーグでのプレー経験がある場合に限る）にも認められるようになった。２０１１年には東京都労働委員会から労働組合としての認可を得ている。

「サッカー文化の普及・振興」と「プロサッカー選手の社会的・経済的地位の向上」を目指すＪＰＦＡは、チャリティー活動やサッカースクールなどの社会貢献活動を主催する傍ら、選手のセカンドキャリア対策に積極的に取り組んできた。Ｊリーグによるセカンドキャリア支援の一部にはＪＰＦＡの要望に応じて実施されたものがあるし、ＪリーグとＪＰＦＡが一緒に実施しているものも多い。また、２０１２年には、ほけんの窓口グループ株式会社と共同で「選手セカンドキャリアプログラム」を発表し、今

後は毎年数十名の引退選手がほけんの窓口グループにて雇用される見通しとなっている。本プログラムでの雇用第一号で柏レイソル、栃木SCなどで活躍した落合正幸は、「サッカーもビジネスも、真剣にやればやるほど人として成長できる」と語り、ほけんの窓口グループ代表取締役会長兼社長の窪田泰彦も「Jリーグで活躍した選手は、全く別世界の仕事でも通用すると確信している」と太鼓判を押す。こうした取り組みは、引退した選手の再就職を促すだけでなく、Jリーガーの社会的価値を高めることにもつながるだろう。

様々な形で選手のセカンドキャリアを支援するJFFAだが課題も多い。例えば、選手が引退する際にJFFAから支度金が支払われる「退団一時金制度」があるが、生涯の出場試合数に応じて算出される支度金の金額は決して高いものではなく、数十万円程度となる場合がほとんどである。また、選手の年俸の一部はJFFAに積立金として徴収され、引

退時に還付される仕組みとなっているが、積立金の金額はJ2のクラブでプレーする選手で年に1万円程度である。Jリーグでの平均プレー年数は5年ほどと言われているから、還付額の平均も5万円ほどにしかならない。退団時の支度金も積立金の還付も、多くの観客を魅了し子どもたちのあこがれの存在でもあるサッカー選手が受け取るお金としては考えられないほど低い金額だ。現役の内から計画的に蓄えていかなければ、セカンドキャリアへの準備どころか、数ヶ月暮らしていくだけでも大変である。JFFAは日本サッカー協会（JFA）やJリーグに対し、選手の年金退職金の制度を確立するよう数年前から働きかけているが、資金不足などを理由に交渉が進展していないのが現状だ。JFFA自体も慢性的な資金不足の状態にあり、退団一時金や積立金の還付額を増額することができていない。選手セカンドキャリアプログラムに代表されるJFFAの就職支援制度は高く評価できるものであるが、今後は選

手の経済面を援助する体制をどう整えていくかが問題となっていきそうだ。

特化した取り組みはないが……

最後に、日本サッカー全体を統括するJFAによるセカンドキャリアへの取り組みについても触れておこう。残念ながら、JFAではJリーグやJFFAのようなセカンドキャリアに特化した取り組みは見られない。しかし、JFAが小中学生を対象に実施している「JFAこころのプロジェクト」ではJリーグやなでしこリーグで活躍したOB・OG選手が講師として起用されているため、JFAによるセカンドキャリア支援のひとつとして考えることができるだろう。このプロジェクトは、「夢先生」と呼ばれる講師が自らの人生を振り返りながら子供たちに夢を持つことの大切さや、それに向けて努力することの大切さなどを伝えるものである。子供たちの健全な育成に寄与することが本来のテーマであるが、

こうした活動を通じて講師自身も人間的に大きく成長していくことになるだろう。

日本サッカーにおけるセカンドキャリア支援は、先進的な取り組みとして他の競技にも多大な影響を与えてきた。今後もその取り組みには大きな関心が寄せられるだろう。全ての選手が安心して競技に打ち込める環境を目指して、これからも積極的な支援を期待したい。

（本稿は2014年2月28日発行のスポーツゴジラ24号に掲載したものに追加取材し、加筆しました）

【参考】

Jリーグ公式サイト

(<http://www.j-league.or.jp>)

日本プロサッカー選手会公式サイト

(<http://www.j-pla.or.jp>)

公益財団法人日本サッカー協会公式サイト

(<http://www.jfa.or.jp>)

田中直希(2013) Jクラブ強化論(ばる出版)

Jリーグラボ #8(スカパー、2013年10月14日放送)

日本サッカーのキセキ(テレビ東京、2013年6月15日放送)



特集

アスリートの
引退後を考える

未来への課題



プロ野球選手だった
人が医者になり、五輪
でメダルを獲得した選
手が後に弁護士になる
……。諸外国のアスリ
ートはセカンドキャリ
アには驚くことが少な
くない。その豊かな発
想や思考の源は何なの
か？
――セカンドキャリア
問題に詳しい筑波大学
大学院・菊幸一教授に
聞いた。

取材・構成 長田渚左

菊 幸一（きく・こういち）1957（昭32）年、富山県生まれ。87年3月、筑波大大学院博士課程単位取得退学。88年3月、教育学博士（筑波大）。現在、筑波大体育系教授、同大学院スポーツ健康システム・マネジメント専攻長。日本スポーツ社会学会理事長。93年に日本体育学会奨励賞受賞。04年と15年に秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞受賞（15年は研究代表）。主な編著書に『現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか』（編著、ミネルヴァ書房）、『21世紀のスポーツ社会学』（共著、創文企画）『よくわかるスポーツ文化論』（共編著、ミネルヴァ書房）『スポーツ政策論』（共編著、成文堂）など多数。

使い捨てと人種差別

——スポーツ選手のセカンドキャリアの問題は、諸外国ではどう考えられてきたのでしょうか。

菊 もともと80年代後半に米国のジャーナリズムはスポーツ選手の行く末について「ソーシャルデス」（社会的な死）という言葉を使っていました。当時、米国のスポーツ界にはさまざまな問題が噴出していて、その中でも黒人選手の『社会移動』が目立っていました。簡単に言えば、身体能力に優れた黒人選手はスポーツを通じて自分の地位を上げ、お金を稼ぐけれど、それはほんの一時期で、スポーツができなくなると使い捨てにされて、社会的な死となるという見方です。マスコミではなく大学の研究者たちが実際にフィールド研究を始めます。それらの研究論文などを私は当時から読んでいたので、日本ではなぜそういう考え方がないのかと不思議に思っていました。

——米国では80年代後半になると人種差別は表面的には見えにくくなっていましたが、内情はかなり深刻だったということですか。

菊 小学校の読み書き程度しかできなくてもフットボールが上手ければ大学にいける時代でした。NCAA（全米大学体育協会）も大学スポーツを盛んにするため有望選手に奨学金を出していました。その選手がプロに行ければいいと考えたのでしょうか、当然ですが大学に入っても卒業はできない選手が少なくなかったのです。

日本の取り組みと受け皿

——日本のプロスポーツに目を向けると、プロ野球選手の引退後がよく話題になります。毎年80人が入って、80人が出ていく世界ですが、セカンドキャリアの取り組みはほとんどありませんでした。最近はどう変わってきたようですが、1993年にプロ化されたサッカーの影響はありますか。

菊 大きいです。Jリーグでは高卒でプロになって

も、1、2年でリタイアする選手も少なくない。そこでJリーグは選手会と協力して2002年に「キヤリアサポートセンター」を立ち上げて、セカンドキヤリア講義やインターンシップなどに取り組みました。日本でプロ野球について2番目にできたプロ組織がセカンドキヤリアの制度、仕組みをつくったことで、『サッカー界はいろいろなキヤリアサポートをしてくれるが、野球界は何もしていないと思うれたらまずい』とプロ野球界も考えるようになったということです。

——それまでプロ野球選手の引退後の受け皿はどうなっていたのですか。

菊 個人の資質でした。野球は歴史があるだけにリトルリーグから小、中、高と『地元』とのつながりが強かった。特に地元の商店主などに世話役のような人がいました。最近の流行語にソーシャルキャピタル（人間関係資本、社会資本）というのがありま

す。野球界にはそういうものが培われていて、再就職はスムーズにいくことが多かった。セカンドキヤリア問題が、かなりプライベートな関係で処理されていたわけです。しかし、最近是不況の影響などで特に地方の企業に余裕がなくなっていて、手を差し伸べたくても現実的に難しくなっています。

一流の証と一意専心

——プロ野球選手の平均現役年数はわずか7年と言われます。引退後の人生の方がずっと長い。その割に業界や選手にその意識が薄いようにも思います。それは日本特有のものですか。

菊 そう思います。例えばフランス、イギリス、ドイツなどの国を代表する選手を対象に取材・調査をすると、彼らは『タイムマネジメント』（時間の管理）という言葉をよく口にしますし、その意識も強いのです。自分の時間をしっかりとマネジメントして調整できることが一流の証だという発想です。学生時代か

ら時間のやりくりをして勉強して単位を取っておかなければ試合に出られなくなるし、将来の人生でも困ることが分かつている。指導者もタイムマネジメントをアスリートに委ねています。

——つまり若い頃から自発的に行動できるように、大人扱いをするわけですね。

菊　そうです。タイムマネジメントをアスリートに委ねること自体が、指導者としても一流の証だという発想ですね。一方で日本は一意専心という言葉もあるように、どちらかというと一つのことだけに集中していくことが素晴らしいと考えています。それはそれで一理ありますが、さまざまなものに目を配り、いろいろなことを経験して、それらを自発的な行動の肥やしにしていくという意識が、日本人にはちょっと薄いと思います。セカンドキャリアの問題を大学院の科研プロジェクトメニューとして3年間研究しました。その時に元プロ野球選手の衣笠祥雄さん（元広島東洋カープ）をゲストスピーカーに招

きました。そこで彼は現役時代に同僚だったゲイル・ホプキンスの話をされた。ホプキンスは練習の合間にいつも難しい本を読んでいたそうです。衣笠さんが「どうして？」と聞くと、彼は「引退したら医者になるつもりだから、そのための勉強だよ」と答えたそうです。衣笠さんはとても驚いたそうです。

環境と発想

——実際にホプキンスは広島県の優勝に大きく貢献した後、米国に帰国して医者になっています。そのほかにも競泳で4度の五輪に出場して女子最多の8個の金メダルを獲得したジェニファー・トンブソン選手（米国）は、後にコロンビア大学医学部に入學して麻酔医になりましたし、80年レークプラシッド冬季五輪で5冠に輝いたスピードスケートのエリック・ハイデン選手（米国）も、スタンフォード大学の医学部を卒業して、名高い整形外科医になっています。もちろん個人の資質もあると思いますが、選

手を取りまく環境に根本的な違いがある気がしているのですが……？

菊 なかなか日本にいと分かりづらいのですが、日本と海外では学校の仕組みに違いがあります。日本は義務教育を終えると学校から『教育課程を修了したことを証する』という卒業証書をもらいます。これはカリキュラムを終えましたということです。それに対して欧州などでは実際に修得できているかを確認するテストを受けなければならないのです。

——履修と修得は別物なのですね。

菊 別物です。履修したことを着実に知識として修得できているかを試験します。資格を取得しないと大学にも行けない。これはすべての子供たちに平等なので、日本のようにスポーツが得意だから進学できるといことはまず考えられないです。

成績と意識

——そういえばバスケットボールの田臥勇太選手も

米国に留学していたときに、いくらバスケットが得意でも学業の成績が悪いと試合に出してもらえないという経験をしたと話していました。

菊 日本でも2013年に全日本学生柔道連盟が大学2年次で20単位、3年次では40単位などの取得単位制度を設けて、規定単位未修得者は試合に出場させないことを決めました。ただ、まだまだ学生はまず勉強が第一だという意識は薄いですね。例えばNCAAは学生に奨学金を出していますが、これも学業である程度の成績を収めていないともらえません。

つまり競技を続けるためにも勉強をしなければならぬという意識が強いです。米国の大学では競技を続けながら卒業するために自発的に勉強をして試験をパスすることが、人生を生きるためのキャリアパスになると考えています。そのために大学も国もしっかりとサポートする体制ができています。

——日本とはだいぶ違いますね。

菊 その意味で個人的にとっても心配していることが

あります。2020年東京五輪・パラリンピックに向かつて、日本は多種目で大量のアスリートを養成しています。彼らのその後ですね。欧州の場合は国がサポートしていて、選手が引退した後は国の政策として猶予期間を設けています。例えば警察官になりたいのであれば、その期間にお試しをさせてくれます。確か最高で5年くらいだったと思います。ほかにも資格を取得しなければならない仕事も多いので、猶予期間に自分の人生を見定める工夫がなされています。トップアスリートの生き方は社会に影響を与え、国としても引退後の人生でも成功してほしいと考えているのです。

大衆心理と温かい環境

——日本では企業のサポートが中心です。国としてトップ選手をどこまでリスペクトして、支えるかも課題ですね。メダルを獲った後の人生は長いです。

菊 大衆心理というのは非常に残酷な一面もあるん

です。自分が成しえないことのできる人を我々はまづリスペクトします。しかし、その人が次の人生で転落して自分よりも下になったと感じられたときに、逆に喜んでしまう心情も持っています。つまり成熟した社会において、一度リスペクトしたものをどうやって維持して発展させてゆくのかということ、我々自身が一般市民レベルでどう育てていくのか。極めて優れた人たちを我々が常に私たちのモデルであつてほしいということを、彼らにどうやって伝えていくのか……そういう温かい環境をつくっていかないとスポーツというのは社会の中で確かな地位を築いていけないのではないかと考えています。大イペントの成功などと気楽に言いますが、実は外に表れるものだけでなく、我々の市民度が試される、そういうことなのではないかと思っています。

——ありがとうございます。

特集 セカンドキャリアで成功する

Jリーガーから弁護士へ

八十祐治

構成

阿部雄輔
文中敬裕

2016年12月6日日本スポーツ学会第4回セカンド
キャリアシンポジウムで講演する八十祐治

ガンバ大阪でプレーする八十祐治
写真奥の5番は元日本代表の宮本恒靖



八十 祐治(やそ・ゆうじ) 1969(昭44)年、10月31日、大阪府高槻市に生まれる。大阪府立茨木高校、神戸大学経営学部を卒業後、93年、ガンバ大阪に入団。95年、ヴィッセル神戸(JFL)、96~97年、アルビレックス新潟(北信越リーグ。入団時のチーム名はアルビレオ新潟)でサッカー選手としてプレー。公式戦出場3試合、0得点。98~2000年、横河電機サッカー部に所属。JFL公式戦出場43試合、2得点。現役時代のポジションはMF。2005年11月、旧司法試験に合格。司法修習60期。07年9月、弁護士登録。大阪弁護士会所属。

1993年5月、Jリーグ開幕の年にガンバ大阪に入団した八十祐治さん。開幕5試合目でJリーグのピッチに立ったが、プロ選手5年間は公式戦出場通算3試合にとどまる。その後働きながらサッカーを続けた横河電機でまわってくる仕事は雑用ばかり。元Jリーガーのキャリア自体が世間では評価されないという現実には直面し、社会に通用する資格を取ろうと決意した八十さんは無謀にも最難関の司法試験を目指す。新聞もインターネットも見ず、外に食事にも出かけずに地道に勉強を積み上げて、4年後にみごと司法試験に合格した。

——大阪弁護士会に所属しておられる弁護士さん、八十祐治さんをご紹介します。どこからどう見ても立派な弁護士さんですが、「元Jリーガー」という異色のキャリアをお持ちです。

1993年5月15日、Jリーグが開幕しました。それまで日本のサッカー界はプロ契約をしている選

手はいましたが、チームや組織はアマチュアでした。そこにホームタウンと下部組織を持ったプロのチームによるプロリーグ、Jリーグができました。ものすごい人気でしたね。

八十 神戸大学2回生の時にはJリーグができるのが分かっていました。その頃からもう毎日プロになることばかりを考えて、勉強そつちのけでサッカーに打ち込んできましたので、ガンバ大阪のスカウトから声をかけていただいて契約書にサインした時には、さすがに手が震えました。契約金は高くて高くなかったのです。お金よりもプロになれたということが嬉しかったですね。

初めてJリーグのピッチに立ったのは5月29日、カシマスタジアムでの鹿島アントラーズとの試合です。超満員のスタジアムで、となりの選手の声も聞こえないぐらいの観客の方々の声援の中でプレーして。試合は結局0-4で負けたんですけど、個人的にはかなり浮かれた気分でした。

ところがガンバ大阪には2年間在籍して、結局出場できたのは3試合だけでした。プロの壁にぶち当たったという、まさにその言葉通りでしたね。小学校からサッカーを始めて、常に努力すれば周りに評価されてきました。レギュラーになり中心選手になり、大阪の代表に選ばれたり関西の代表に選ばれたり、大学でもユニバーシアードの候補に選んでいただいたり。ほんとにやればやるほど周りから評価されてきたっていうのが、プロになるまでの私のサッカー人生だったんです。ところがプロに入ってからなかなか評価をしてもらえない。一軍で十何試合ずつとベンチ入りして、試合も途中から出してもらったりっていう時期があったんですけれども、そこで結果を出せない。二軍に落ちてからは早く結果を残さないと一軍に戻れない、でも残せない、焦る気持ちも出てきて、ますます結果につながらない。完全に負のスパイラルに陥っていました。

3年目にヴィッセル神戸に移籍をさせてもらって

バクスター監督に出会い、ようやくレギュラー取れそうだったという時、開幕2週間前に左足首の靭帯を切ってしまった。その時はさすがにショックでしたね。——ガンバ大阪に2年、ヴィッセル神戸に1年、アルビレックス新潟に2年、そしてJFLの横河電機に3年と、生き場所を変えていった8年間で、四十代の現在振り返っていかがですか？

八十 23歳でプロ入りして31歳で引退したのですが、ほんとにもがき続けた8年間でした。自分としては努力をしているつもりでも、何ひとつうまくいかなかったっていうのが二十代の印象ですね。もちろんプロになる時はこんなはずではなくって、ガンバで成功して、30歳を超えてもガンバで活躍するっていう気持ちを持って入団してますので、思い描いていたのとまったく違う二十代でした。

——色でたとえると、いろんな色のインクをぜんぶ混ぜて真っ黒になっちゃったみたいな、そんな二十代でしょうか。

八十 プロに入るまでは試合中、俺にボールを寄越せ、俺が何とかしてやるから俺にボールを出させていう気持ちでプレーしてたんです。けれどプロに入ってから、ミスをしたらどうしよう、またミスするんじゃないかっていうふうに思うようになって、途中から、ほんとにぶれぶれのサッカー人生でした。アルビレックスを解雇される時に、選手としては使わないけれどチーム内部の仕事したらどうだっという話もあったんですけど、まだ28歳で、どうしても気持ちがおさまらなかった。プロ契約ではありませんが、働きながらプレーさせてもらえるということで、JFLの横河電機にお世話になることにしました。

——お仕事はどんなことをされてました？

八十 主に人事の仕事です。人事と言ったら聞こえが良いですけども、雑用ばかりでした。電球が切れたから替えてくれとか、そのゴミを片づけてとか。横河電機では、昼は仕事をして夜に練習をして、土

日にJFLの遠征があつて試合をして、帰ってくる。とまた次の月曜日からフル回転で仕事と練習というような生活を続けてきました。31歳になってさすがに体力も少し落ちてきた。先輩たちもそのあたりで引退されることが多くて、チームもそろそろ若手に切り替えた方が良くのかなあと、そんなふうに思ったのが31歳の時でした。

——31歳で引退後、なぜ司法試験受験を選ばれたんですか？

八十 定年まであと30年間雑用みたいな仕事を続けるのかという問題に直面しました。3年間サラリーマンをさせてもらつて、君はサッカーしかやってきてないから、大した仕事はできないでしょというようなことを言われて、すごく悔しい思いをしていました。このままこの会社について、そういう悔しい思いを晴らせるのか、何かサッカーと同じぐらい熱意とか気持ちを込めてできる仕事はないか、年齢に関係なく仕事をするには資格を取るしかないって、

そういうふうに思ってたんですね。

サッカー選手として成功しなかった悔しい気持ちが鬱積してましたし、なおかつサラリーマンとしても評価していただけなかった。社会ではプロサッカー選手であったこと自体がさほど評価されないという現実にも直面して、そんな人たちを見返してやろう、自分の力でサッカー選手の価値を見せてやろう、それなら一番難しい司法試験に受かってみせよう、そんな気持ちでしたね。

ただその時にはまだ司法試験がどれだけ難しいかを知りませんでした。合格率3%だとか、難しいってことはうすうす分かってましたけれども、一次試験と二次試験があつて、二次試験はさらに三段階あるなんていうことも、司法試験の予備校2年分の授業料100万円、なけなしの100万円を振り込んだ時に調べてはじめて知ったんです。

——奥様は反対されなかったんですか？

八十 妻も私と結婚するぐらいですからちよつと変

わつたところもあつて、まあ頑張つてみたいな感じで軽く言われたのを覚えています。僕がサッカーで悔しい思いをしているのをずーつと傍で見えていましたし、僕が言い出したら聞かないのも分かっていましたからね。

——それからは横河電機のスラリーマンをやめて、勉強一筋ですね？

八十 仕事をしていると勉強時間を確保できないので、会社をやめて地元の大阪府高槻市に戻つて勉強をはじめました。もともと勉強が得意ではないので、最初は机に向かうだけでも苦痛だったのですが、一日12時間ぐらひは勉強しました。ただ働いてないですからお金がない。妻が働いていた時期もあります。上の子供はちっちゃかつたし、その上何を思ったか、僕が合格する年に妊娠をしまして、また働けなくなるといふ、人生設計まったく行き当たりばつたりなんです。可哀相ですけど子供には外食なんかさせたことがなかったですし、新聞を取つてない、

インターネットにも接続してないので、外部から情報が入ってこない。そもそも三十過ぎのおっさんが仕事をやめて勉強だけしてるとですね、社会から隔離されたような気持ちになります。その期間自分でも思っていないぐらいのプレッシャーで苦しみました。受かる保証のないこんなことをやっていて良いのかって毎朝起きたら思うし、その不安を振り払うためには勉強しないといけないとか気持ちも揺れ動いて。ちょっと頭がおかしくなりそうでした。

——平成17年11月9日のことを教えてください。

八十 最終合格した日ですね。合格発表は東京の法務省の赤煉瓦の建物に貼りだされるんですけども、僕は大阪にいますので、ちょっとタイムラグがあるんですが、ホームページに上がるのを待っていました。インターネットに接続して待っていたら、東京にいる兄がわざわざ見に行ってくれて、携帯に電話してくれましたよ。受かったと聞いた時は嬉しいより何より、ああこれで司法試験の勉強をしなくて良い

んだという、そういう気持ちだけでしたね。

——元プロサッカー選手で司法試験に合格された方はほかにいないそうですが、サッカーをやつてらしたことが試験に役に立ったことはありますか？

八十 スポーツつて試合にスポットが当たりますけど、練習やふだんの生活からほんとに地道に地道に積み上げて、そうしてやつとグラウンドに立つてプレーするっていう、地道な作業の繰り返しですよ。勉強も結局一緒に、地道な作業を繰り返して繰り返して基礎の部分をしつかり積み上げていく部分はサッカーと一緒にしながら、むしろ生意気ですけれど、サッカーでは地道にやつても結果が出ないことが多かったんですが、勉強は地道にやつていれば自ずと知識も増えていきますし、結果が出るので、司法試験もサッカーよりは通りやすいなと思った。通ったから言えるんですけど。

——プロスポーツ選手のセカンドキャリア問題を語る時、現役生活は必ず何年かで終わるのだから、

その時のことを頭に置いて、資格を取るとか、そういう考えを持つていた方が良いんじゃないかという意見があります。八十さんはどう思いますか？

八十 J1やJ2の選手にプロサッカー選手の先輩としてお話しさせていただく機会が何度かありました。やめたあとのことを考えるのも良いことです。でもプロサッカー選手であれば、今日の前のことに100%捧げて欲しい。100%ここに打ち込む体験を積み重ねていけば、サッカー以外のことにチャレンジする時も役に立つて伝えていきます。

ただ僕の場合は正直やりきったという気持ちにまではならなかった。その煮え切らない部分が司法試験への後押しをしたのもたしかです。サッカーでもうひとつ成功していたら、違う進路を選んだかもしれない。煮え切らない気持ちを精算するために司法試験に挑んだっていうのが正直なところですね。

—— 弁護士さんとして今、どんなお仕事をされていらっしゃるんでしょうか？

八十 離婚とか相続とか、ご家庭の資産に関する紛争や、家を建てたのに欠陥があるやないかとか、そんなほんとに巷であふれてるような紛争に入らせてもらう仕事が多いです。

—— お仕事面白いですか？

八十 つらいです。もともとサッカー以外では荒っぽいこと好きな方じゃないんで、人の紛争に入っていくのは本当にしんどいです。ただそういう紛争ばかりやってるわけじゃなくて、山口蛍選手（現セレッソ大阪）が2015年12月にブンデスリーガのハノーファーに移籍するまで2年間、代理人をさせてもらったり、サッカー選手と一緒に仕事することもありましたし、弁護士はほんとに幅広い仕事ができます。弁護士のやりがいつて、カッコ良く言うところ、立場の弱い方がひとりではなかなか声を上げられないところを法律の専門家としてサポートできるところで、一緒に声を届ける仕事ができるときは、ああ良かったなあと思いますね。

ヤクルト戦で先発した大洋の水尾嘉孝
(1992年5月20日、神宮球場)

特集 セカンドキャリアで成功する

プロ野球選手からイタリアンのシェフへ

水尾嘉孝

取材・構成 横山由希路
(文中敬称略)



自由が丘に「トラットリア ジョカトーレ」で
オーナーシェフを務める水尾嘉孝

水尾 嘉孝(みずお・よしとか) 1968(昭43)年5月2日、香川県生まれ。明徳義塾高校、福井工業大学を経て、1991年に横浜大洋ホエールズにドラフト1位で入団。その後、オリックス・ブルーウェーブ、西武ライオンズにてセットアッパーとして活躍する。2004年、MLBに挑戦し、アナハイム・エンゼルス傘下のアーカンソー・トラベラーズにて、2006年、現役引退。現在、自由が丘のイタリアンレストラン「トラットリア ジョカトーレ」のオーナーシェフを務める。夜は要予約。火曜定休。電話:03-6421-4212

お洒落なレストランの激戦区・自由が丘。取材の前に、その店のランチタイムをのぞくと、扉に「満席」の札が下がっていた。

柔らかな光の射す店内には、大きな長いテーブルと4人掛けテーブルが4つ……お客さんは全員女性だった。聞けば、ディナーには予約が必至の人気店だという。

美味しいと評判のイタリアン『トラットリア ジョカトーレ』で腕をふるうのは、オーナー兼シェフの水尾嘉孝——元プロ野球投手だった。

——水尾嘉孝さんは、1991年、横浜大洋ホエールズにドラフト1位で入団されましたね？

水尾 1989年、福井工業大学3年生の時、全日本大学野球選手権大会に登板したことで、スカウトの方から注目されるようになりました。球の速さもキレも増した1年後、スカウト陣も見ている大学チーム内の紅白戦で、自分でも驚くようなボールを投

げ込むことができました。投げた瞬間、指にボールがとてもしつかかって、自分で考えた以上に変化球が曲がついていったんです。この球を見てもらえたら、ドラフトにかかる可能性もあるのかなと思いました。ところが大学4年の遠征先で、右太もも裏にかなりの大きな肉離れを起こしてしまいました。後に肉離れは腰痛が原因とわかるのですが、昔の学生なので原因を突き止めて治療をせず、痛みを応急処置で抑えて投げていました。そのため足の状態が悪いまま、大洋に入団することになりました。

大洋に入ると、今度は肉離れを起こした右太ももの裏側がしびれるようになりました。ただ、全く動かないわけではなくて多少なりとも動くので、古い時代でしたから、周囲からは鍛えて治せと言われていましたし、自分でもそういうものなんだと思ってやっていました。2年目に一軍に上がっても、右太もも裏だけでなく腰も悪いので、マウンドでうつむき加減で立っているのがやつとでした。球場からの

野次も響きました。「お前は気にすることはないよ。お前のようなボンコツを取った奴がもつとボンコツなんだあ」と。何でもここまで言われなきゃいけないんだらうと思いますが、そこは考えても仕方がないんですよね。とにかく結果を出していない事実をしつかりと受け止めるしかないなと思っていたんです。

選手生命を賭けた決断

——マウンドでまっすぐ立てなかったのですか？

水尾 1995年にオリックスにトレードで移籍して、2年間注射を打ちながらプレーを続けましたが、腰は良くなりませんでした。その時に整形外科の先生から、画期的な腰の手術があると紹介されました。その手術は腰を切開するため、球団も危険だとかなか認めてくれませんでした。自分の選手生命を賭けて決断しました。

手術は、腰の後ろの神経に飛び出た椎間板が当た

って神経障害を起こした部分の圧を抜くために、腰の横から鉛筆の太い芯ぐらいの鍼をずっと椎間板まで刺していきました。

手術が終わって、トイレに行こうと立った瞬間、「あ、治った」とわかったんです、足のしびれがなくなりましたから。ところが筋肉は、6年間しびれっぱなしだと全く動かないんです。少しずつ少しずつ、動かなくなったところを動かすようなりハビリを続けました。

手術明けのシーズンは68試合投げましたが、ブルペンからマウンドの距離すら走れませんでした。監督もコーチも、僕がバント処理の一連の動作ができないのを知っていましたから、バントをされたらゆっくり行つて、ファーストで1つアウトを取ればいいよと。

「いい球を投じているのなら、バント処理ができなくても使おう」と言ってもらえたのは、仰木監督だからできたことだと思います。

投手人生最後の日

——その後、2001年から西武ライオンズで中継ぎとして活躍し、2004年にメジャーへ挑戦、2006年に引退されました。アメリカにいた時は、現役をやりつくした感がありましたか？

水尾 アメリカに渡った時は、全盛期と同じ力が出せませんでした。ピッチング技術は上がっていました。メジャー契約をしてもらえたので、とにかく自分でできることは全部やろうと思っていました。

引退を決めた日は、アナハイム・エンゼルス傘下のAAアーカンソー・トラベラーズにいました。

いつものようにランニングをして、走って止まって、また歩いて。また走り始めようとした途端、身体が拒絶して一歩も動かなくなりました。そんな感覚は今まで一度もなかったの、「動けよ！」と、自分の身体と喧嘩するような気持ちでした。でもこれはダメだなと。ここまで手術をし、ボロボロにな

つても動いてくれた身体が、もう止めてくれと言っているのだから、投手としての人生はここが限界だなどと思いました。

食べる習慣と食べない習慣

——引退後、料理人としての道に進まれます。食べることを意識したのは、現役時代からですか？

水尾 オリックスで腰の手術をした時、すでに28歳でしたので、この先の野球人生は、いかに自分のマインナス部分を減らすかにかかっていると思いました。これからは栄養面にも気を遣わなくてはと、自分でどんな栄養を摂れば良いか調べたんですね。すると、高タンパクで低カロリーの食事をして、お酒は飲まず、夜は炭水化物も摂らない。お腹を空かせて寝て、翌朝しつかり食べる習慣をつけることだという考えに行き着きました。

実際にやってみると、自分でも驚くほど、毎朝身体がシャキツとするんです。胃に負担をかけない食

事を摂っていると、寝ている間に内臓も休めて翌朝元気になる。選手時代はずっと外食でしたので、何を食べてはいけなかではなく、何なら食べても良いと判断して食事制限をしていました。

——メジャーの選手はお肉やピザをたくさん食べているイメージがありますよね？

水尾 日本で食事制限をしていると「そこまでやる必要あるの？」と言われていましたが、アメリカに行ってビックリしたのは、皆、食べることに気をつけていました。ナイターが終わるとダグアウトにピザが積んであるのですが、賢い選手はそれらを食べない。自分達で消化に良い食べ物を持参して食べていました。

そして、日本人のトレーナーからこんな話も聞きました。米国人のコーチは、表では選手に「お前、昨日飲んだらしいな。何を飲んだんだ？」と明るく話しかけてくるけれども、裏では「あんなやつクビだと言うんですよ」と。要は自己管理できない選手

はいらないということです。それくらいアメリカの野球界は食に対してもしつかりとした意識づけがありました。

皿洗いと直談判

——料理人として、どこで修行を始めたのですか？

水尾 一番初めは、大阪・心斎橋で9年も続いている老舗洋食店の明治軒でした。明治軒に決めた理由は、僕が知っているお店の中で一番繁盛していたからです。僕は38歳でしたし、明治軒で働く人にも元野球選手と知られていましたので、代表の井本さんには扱いにくいからと一度断られたんです。でも「この先、料理人としてどうしてもやっていきたいので、とにかくチャンスをご覧ください」と直談判して、時給800円のアルバイトで何とか入れてもらえました。一番厳しい環境で下積みをスタートすれば、後々楽になるはずと信じて明治軒に入りました。

「ウチは皿洗いしかさせないよ」と井本さんに言われていました。その後、毎日毎日山のような食器を洗っていました。夜は調理師学校に通っていたので、朝から学校に行くまでの間、ひたすら洗ってました。明治軒の修行は1年と決めて入ったのですが、暑い厨房での生活も7ヵ月目を過ぎた頃、さすがにうんざりしてきました。すると、料理長がスタッフの「まかない」なら作ってもいいよと声をかけてくださったんです。やっと料理が作れるって、本当に嬉しかったんですよ。作ったのは、白ワインを使った安価な白身魚の料理。皮目に胡麻をつけて焼いたバターソース煮でした。今でも料理を作れる嬉しさを忘れないのは、明治軒でちゃんと思いを持って料理と向き合えたからだと思います。

日本人のために日本の食材で

——ところで、何故イタリアンだったのでしょうか。水尾さんのお話を伺っていると、和食をやられ

そうな気がするのですが。

水尾 アメリカや他の国に行くと特に思うのが、日本の食材の美味しさです。美味しい日本の食材重視の料理といえば和食ですが、和食はなかなか簡単に習わせてもらえませんが、師匠に特別に教えてもらうことができない世界です。下積みは若い子でしたら気持ちを作る部分で大事ですが、僕は40手前なので気持ちの部分はもうできていると思っていました。

料理はやらせてもらえないとできるようにはなりません。とにかく実務を習わせてもらえるのは何だと考えて、イタリアンを選びました。イタリアの現地の店まで足を伸ばすこともありましたが、日本の食材を活かすのならば現地ではなく、イタリアで修行したシェフのもので、日本の食材を使って学んだほうが一番効率良く修行ができるなと思いました。

日本人は右利き、料理人も右利き

——水尾さんは現役時代、サウスポーでいらっしや

いました。

水尾 生まれてからずっと左利きでした。でも、包丁は今、右手で切っているんですよ。

実は明治軒に入って、料理長に「包丁を右で練習しなさい」と言われた時に、さすがに僕も驚いて「左利きなので左のほうが……」と考えたのですが、料理長がそう言うのであれば、練習したほうが良いと思いました。右で切る努力を本気でやってできなかったら、料理長も「じゃあ、お前は左でやれ」と言うってくださるはずですよ。その過程を踏むことは、何をするにしても絶対に必要なことだと思っていましたので、まずはやってみることだと思いました。

とはいえ、やはり右手で切るのは大変でした。調理師学校では、小麦粉を水で溶いて粘土状にしたものを使って切る練習をしました。その粘土みたいな小麦粉を家に持ち帰って、夜中に毎日毎日ひたすら右手で切る練習をしました。明治軒で「まかない」を作るにしても、お店の食材を無駄にしたら申し訳

ないので、ゆつくりでもいいから、右手で丁寧に切ることを心がけました。

右手で包丁を使って10年経ちますが、未だに気を抜いたら指がなくなってしまうなと思っています。右手は利き腕ではないので、経験したことしかできない。でも気をつけているから、怪我はしません。今では右に変えて良かったなと思っています。

あと、大きい調理場で働いていると、一人がずつと同じ仕事をせずに、いろんな人がそれぞれの持ち場に入れ代わり立ち代わり入ってきます。日本人はほとんど右利きで、調理道具も右利き用にできています。だから僕一人が左で切っていたら、次に入ってきた人が全部逆にして、仕事をしなくてはならない。余分な手間をかけてしまうことになるので、やはり右手で切れたほうが、都合が良いのです。

お客さんを二番に

——普段のシェフの一日やお仕事について教えて

ください。

水尾 朝起きて、まず店に行きます。店で仕込みをして、10時ぐらいに試作品で作ったものを食べて、お昼は合間に食べ、夜は食事らしい食事はしません。料理人は皆そうだと思いますが、お腹を満たしてしまおうと味がわからなくなります。少量の味見をして美味しく感じる料理は、実際に作ると味が濃いのです。味見の段階では、こちらでしっかりと味を感じようとして、まあ大丈夫かなというくらいの薄味が、一皿食べていただくのに、ちょうど良い具合になりますね。

僕は料理人よりもお客でいた時の時間が長いので、お客さん目線を大切に考えます。例えばお皿に一度盛りつけて、遠目に見て自分がお客さんで量が少ないと感じたら、全体的にプラスするようにしています。経営者としてはダメでしょうが、食べている人に喜んでもらうほうが一番ですもんね。

—— 今日、お店は満席でした。とてもお店が上手く

いつている印象を受けました。セカンドキャリアのステップは着々と進んでいますか？

水尾 内心、上手い経営とは程遠いですね。利益を出すために原価をどこまで抑えるかという葛藤があります。この食材を使ったら最高に美味しいのにと感じて、あまりにも高すぎて使えないものもあって、試行錯誤の連続です。

僕と一緒に野球をやった大学の仲間達は、野球をやめてきちんと働いていましたから、僕だけが野球小僧の延長でしかないという思いが強かったんです。社会人として15年も彼らから後れをとったのだから、料理人として本当に必死にやらないと、と思っています。だから料理人人生を、僕はセカンドキャリアとは思っていないんです。

15年の後から60歳で笑えるか

—— プロ野球後の人生の向き合い方について、後輩の皆さんに伝えたいことはありますか？

水尾

僕が野球選手を辞めて、次の道に進もうとした大きな要因は、昔は良かったと言う人生は嫌だと思っただけでした。野球ばかりやっていると、一番華やかだった時代は現役と思いますが、それよりも未来は絶対楽しいはずですよ。でも未来を作る技術がないと、この先の未来には立ち向かえない。僕より後輩の皆さんは、今は体力も気力もある、現役を終えたばかりならば、熱い気持ちにもなっていますよ。きつとどんなことにも耐えられるし、多少泣こうが踏ん張れるはずですよ。でも60歳になった時に泣く人生はどうですか？ 僕は嫌だなと思います。

元野球選手が、昔の自慢話をする姿は見ていて哀しくなります。同級生同士で、昔話で盛り上がる分には良いですが、若い子達を捕まえて昔の自慢をするのは、ちょっと耐えられないんです。それよりもこれからの話をすれば、未来の話はみんなが共有できますし、どんな世代の子も会話に入って来られますよ。そういう言葉が伝えられる考え方や行動を

しないと、下の世代の子達と一緒に仕事ができないと思います。これからは80歳まで働く時代がきます。その時の社会と関わるには、体力だけでなく技術も今から身につけておかないと、難しいと思います。

——最後に。水尾さんは元プロ野球選手と思えないほど、身体が本当に細くなりましたね。

水尾 選手時代の服を今見てみると、あまりに大きくてビックリするんです。今は普通の服が着られるようになったので、服が選べて嬉しいですね。今の身体は、調理に必要な筋肉さえあればいいです。

——あとはバットでもボールでもなく、包丁さえあれば良いですか？

水尾 そうですね、良く切れる包丁さえあれば

(笑)。



90年北京アジア大会の競泳男子400m個人メドレーで優勝した藤本隆宏(1990年9月24日)

特集 セカンドキャリアで成功する

競泳選手から俳優へ

藤本隆宏

取材・構成

長田渚左
(文中敬称略)



藤本 隆宏(ふじもと・たかひろ) 1970(昭45)年7月21日、福岡県出身。西日本短大付高一早稲田大学。ソウル・バルセロナ五輪連続出場。2011年に第2回岩谷時子 奨励賞を受賞。12年にNHK大河ドラマ「平清盛」、14年にNHK連続テレビ小説「花子とアン」、TBS「家族狩り」15年にフジ「オリエント急行殺人事件」、NHK「一路」、16年にNHK大河ドラマ「真田丸」、フジ「フラジャイル」、TBS「99.9-刑事専門弁護士」、テレビ朝日「グ・ラ・メ!〜総理の料理番〜」、WOWOW「水晶の鼓動」などにも出演した。17年「アニー」で9年振りにミュージカルに出演。大富豪でアニーに魅かれるウォーバックス役。

近年、テレビの大河ドラマや時代劇で圧倒的な存在感を漂わしている俳優——藤本隆宏。46歳。

NHKドラマ『坂の上の雲』（2009～11年）では、ロシア社会にとけ込み、ロシアに大切な恋人がいながらも日露戦争に出征。最後は部下を捜し回る中、砲弾を浴びる軍神・広瀬武夫中佐を演じた。

TBSドラマ『JIN—仁—完結編』（11年）では体重を100^キまで増やして西郷隆盛に扮したかと思うと、一転してNHKドラマ『ガラスの家』（13年）では別人のように体を絞り込んで、冷徹な財務省の主計局長役で視聴者を魅了した。見事なまでに役柄に応じた色艶を演じる藤本は、以前は2度の五輪出場経験を持つ日本を代表する競泳選手だった。

まったく別物の競泳界から役者への転身……その人生について聞いた。

——藤本さんが出場された88年ソウル、92年バルセ

ロナ五輪とも私は現地で取材していたのですが、あまり印象がなくて……。

藤本 印象の薄い選手だったと思います。気にしないで下さい。ソウルは高校3年での出場でしたが、もう出るだけで精いっぱいでした。4年後のバルセロナは前年に世界ランキング3位くらいの記録を出していたので、金メダルを狙っていましたけど、甘くはなかったです。惨敗しました。

——惨敗？ 400^メ個人メドレーは日本人初の決勝進出で、8位入賞していますが……。

藤本 ええ。記録的にはそういうことになっていますが、自分の中ではずっと金メダルしかないと思って泳いできましたから、結果を出せなかったという意味で惨敗です。

——そのレースを振り返ってみて下さい。

藤本 予選が午前中にあつたので、朝4時に起きてコンディションを整えました。決勝の8人に残るこ

とだけを考えて余裕をもって泳ぎ、それが日本記録

でした。400メートル個人メドレーは激しく体力を消耗するので、決勝まで仮眠するのですが、このときはかりはまったく眠れませんでした。それで予選の疲労が残ってしまったのだと思います。決勝は予選より3秒も遅かった。五輪新記録で優勝したハンガリーのダルニユイ選手からは9秒も差がある8位でした。陸上だったら周回遅れみたいなものです。すべては言い訳になりますが、決勝レース直前の招集所で、銀メダルを獲得した米国のネームスニックという選手が握手を求めてきました。たぶん彼に他意はなく、「お互いにベストを」という感じでしたが、自分はこの影響された。誰とも口をきかず、何も寄せ付けない感じで戦いのバリアーを張っているところに、フワリと入ってこられて手を握られた。異なる文化に出会ったといえませんが、集中が切れて何かが体の中で狂った。そのまま泳ぐことになりました。

——バルセロナ五輪の後はどうされましたか。

藤本 いくら何でもこのままでは終われないと思い、次の96年アトランタ五輪を目指して豪州に留学しました。泳ぎそのものを見直そうと思っていました。その留学先でたまたま誘われて、ミュージカル『レ・ミゼラブル』を観たのです。観劇の興奮はハンプナなものではなく、雷に打たれたかのように体の中を駆け巡りました。お客さんとの一体感とライブ感、心から素晴らしいと思えて、自分はこういう世界にかかわりたいと感じてしまいました。代表合宿で日本に戻ったときにも同じ演目を観て、あの場所に行きたいと思ったんです。

スイマーとアーティスト

——舞台芸術の世界にかかわりたい……は分かるとして、どうしてそれが俳優だったのですか？ 例えば舞台監督や演出家という役割もありますか。

藤本 劇場のライブ感と五輪会場の観客とパフォーマーの一体感が同じだと思ったときに、水泳選手と

俳優は同じだと思えたのです。それで一途に俳優を目指そうと思いました。ある朝、新聞を開くと、劇団四季の関西オーディションの告知を発見して「これだ」と挑戦を即決しました。願書を送るやいなや、所沢のバレエ教室に入門して、中学生の女の子たちに混じって、タイツ姿でレッスンを受けました。試験に必要なことからです。

——当時25歳の青年が必要とはいえ突然バレエのタイツ姿になることに抵抗はなかったのですか？

藤本 全然なかった。それまでずっと水着で泳ぐ毎日でしたからタイツは大丈夫でした。抵抗があつたとすれば、周りの女の子たちの方かもしれません（笑）。さらに近くの音楽教室へも歌を習いに通って、劇団四季のオーディションに備えました。

——ちょうどその頃、藤本さんはスイミングマガジン（95年9月号）のコラムにこう書いています。

『私はスポーツをアート（芸術）として捉えている。水泳（泳ぐこと）はアクター・アクトレス（俳優・女優）』

女優」といった名の「スイマー」が、「プール」という舞台でパフォーマンスすることであり、記録やメダルは舞台終了の際に行われるカーテンコールでの何回にも亘る「拍手」であると考えている。「泳ぐ」ことが速かろうと遅かろうと、水に入り精一杯泳ぐことができれば、それは見る人、応援する人に対して深い感動を与える素晴らしいアーティスト（スイマー）になれるのである。優勝し、金メダルを取るだけがスポーツではないのだ』

藤本 え、僕が書いた？ まったく忘れていましたが、水泳をアートと捉えて、スイマーとアクターが同じ肉体表現者というまさにそのときの気持ちです。当時の競泳界は今と違って沢山の大会をテレビが生中継するなんてことはなかったんです。テレビで観てもらえるのは五輪ぐらいでした。毎日毎日、泳ぎ続けてはいましたが、本当に孤独なものでした。そこで観客とパフォーマーがひとつになつて一緒に泣いて、一緒に笑えるような演劇に魅了されたのだと

思います。

95年10月、大阪で行われた劇団四季のオーディションで彼は、約300人の中のわずか数人の合格者の一人となった。彼は誰にも言わず、競泳選手と俳優修業という二足のわらじの生活を始めた

藤本 朝は大学のプールで泳ぎ、午後からは劇団で歌とダンスのレッスンを受けて、その後には大学へ戻って泳ぎ込んでいました。あの頃、プールも水の中の舞台だと思っていて、そこらも表現の場だから同じものだと考えていました。だからアトラント大会で五輪3度目の出場を目指していたのですが……。

96年4月4日、アトラント五輪代表選手選考を兼ねた日本選手権で、彼は400メートルと200メートルの個人メドレーに出場したが、両種目とも代表枠の2位以内に入れなかった

リセットとオリンピック

藤本 自分の部屋に帰ると号泣しました。水泳を始

めて20年近くがたっていました。結局、夢に見続けた五輪で結果を残せなかったという悔しさと、それまで応援してくれた監督さん、先生、コーチ、マネージャー、チームメイト、そして両親を思うと申し訳なくて申し訳なくて、涙が止まりませんでした。そして水着やゴーグルなどを目につかないタンスの奥にしまい込みました。ゼロからすべてをリセットする気で、俳優になるために邁進しようと翌日は早く起きて劇団四季のトイレ掃除に行きました。トイレ掃除が新人の仕事とされていたので、ともかくまず、それをきちんとやろうと思ったんです。そして劇団の研究所で発声練習やダンスのレッスンに明け暮れました。初めは簡単ではないと分かっているつもりでしたが、練習生たちのレベルは想像以上に高かったです。周りは3歳ぐらいからダンスを習っている人たちがかりでしたので、まったく自分はいいていけなかった。あるとき仲間のバレエの上手な女の子に「藤本君はオリンピックに出たと聞いたけど、

そのオリンピックって何なの？”と面と向かって言われて、考え込みました。自分のすべてをかけて泣きながら練習していたあの時間は、人にとっては何の価値もないものであったのか……。自分が心から情熱をかけて追い求めたオリンピックとはいったい何だったのか？ 同時に自分が競泳界に生きて、金メダル、金メダル、金、金……と思っていた毎日が、とても狭い世界だったことに気づかされたのです。

それからも毎日毎日、歌やダンスのレッスンに明け暮れたが、俳優の修業はなかなか思うようにいかなかった

舞台と動物

藤本 役をもらうために芝居のオーディションを受けるのですが、落ち続けました。ようやく1年ぐらいたった頃、シェークスピアの『ヴェニスの商人』の従者の役をもらいました。セリフは一つで“はい、お言いつけ通りにいたしましょう！”。ギャラは7

回のステージで1舞台が1万円だから7万円でした。――記念すべき初舞台ですが、1年間で収入7万円ですか。生活はどうしていたのですか？

藤本 劇団四季の稽古場の近くに大学の水泳部の先輩が住んでいたの、そこに居候させてもらって、生活費は親からの仕送りでした。自分は高校は水泳の特待生でした。授業料が免除されていたので、その時の分を頭を下げて送金してもらいました。劇団四季はアルバイトは禁止されていたので、親に頼るしかありませんでした。

――劇団四季時代には他にどんな役を？

藤本 セリフのほとんどない“その他大勢”が多かったですね。そういう立場を劇団的には“アンサンブル”と呼ぶのですが、そのメンバーに入るのなかなかの厳選でテストを受けて入るんです。受ければ公演が東京3カ月、大阪1カ月、名古屋1カ月と継続するので、仮に100ステージなら100万円もらえることになって生活しやすくなるのです。劇

団には『キャッツ』の猫だけを20年やっているような人もいるわけですが、それもあるのかと思うようになりました。自分も動物の役が多くて、去勢牛、イタチ、猫、ライオン……でもやはり人間をやったかった。それ以外にもいろいろな人間関係のこともあるって、3年あまりで劇団を離れました。その後、ご縁があつて女優の有馬稲子さんの事務所に入れていただき、そこで元競泳選手の木原光知子さんと出会ったのです。

64年東京五輪に競泳日本代表として出場した木原光知子さんは、後にタレント、実業家としても活躍。水泳の普及・振興にも力を注ぎ、『ミミスイミングクラブ』を全国9カ所に展開した（2007年に59歳で死去）

藤本 自分はその頃、自信をなくしていて、ミミさん（木原さん）に、競泳選手としても結果が出せなかったことを振り返ったりして、どうしていいのかわからないという不安な気持ち話をしました。元五

輪選手のミミさんも境遇が似ていたこともあり、とても自分を分かってくれました。ミミさんも引退後に役者をやったら、岡山なまりが出て、コテンパンにやられたことがあつたそうです。たつた一つのセリフのイントネーションを直しまくられて、役者を諦めて水泳に戻つたと明かしてくれました。そしてこう言ってくれました。“君を育てたのは水泳よ。水泳があつたから今の君は生きている。いったいオリンピックに出られる人って日本に何人いるの……自信を持ちなさい！”。

彼は涙が止まらなかったという

水と階段

藤本 自分には水泳があつたのだ。そう思うと腹の底から力が湧いてきました。初めて水泳に対して新鮮な思いになれた。それまでは、あんなに練習したのに結局はメダルに届かなかつたと、心の中でくすぶり続けていました。自分は結果を出せないダメメ

間なんだというコンプレックスが根深くあった。だからミミさんの言葉に救われた気がしました。

その後、演劇の仕事のないときに、『ミミスイミングクラブ』でコーチをすることになった。再び水に入ったことで新しい発見もあった

藤本 昔は一日20〜25キログラムぐらい、距離にして東京―横浜間を泳いでいました。毎日、水と格闘しているイメージしかなかったのに、子供たちの顔を見ながら水に浸っていると、水泳への拒絶反応が和らいで、リラックスできるようになったんです。思ってもみないことでした。水っていいなあ……という新鮮な思いでした。競泳をやっていたことを二度と思い出したくない、そう思っていたことが、プールの中で少しずつ少しずつ溶解していくようでした。

――俳優の仕事は？

藤本 大変にありがたいことに、セリフが2行以上ある役をいただけるようになりました。2003年に音楽活劇『レディ・ゾロ』に出演し、バステス少

佐という悪役を、よだれを垂らして、唾を飛ばして、思い切り演じさせていただきました。剣を操る殺陣もありました。本当に嬉しかった。あまたいる役者の世界で、セリフをしゃべるといのは本当に本当に大変なことです。バステス少佐を演じて以来、いただける役のセリフや場面が増えていった感じがします。『イントウ・ザ・ウッズ』（04、06年、演出・振付…宮本亜門）の王子とオオカミ役、『ハウ・トゥー・サクシード』（07年、翻訳・演出…菅野こうめい）のバド役、いずれのミュージカルもオーディションで役をつかみました。一步一步階段を上っている気持ちはありました。

役者道を歩んで14年。ついにNHKのスペシャルドラマ『坂の上の雲』で準主役の座を射止めた。テレビドラマ初出演だった。番組放送後、NHKに『広瀬武夫』を演じた人は誰か？ という問い合わせが殺到するほどの好演だった

藤本 まわりの配役は大スターの先輩ばかりで、N

H K側は広瀬武夫役だけを新人で探していたそうです。自分への配役は奇跡にも近いものでした。制作に3年、放送にも3年をかけた全13回、1回の放送が90分という大作で、届けられた台本は13冊……明治の日本人の生きざまを心を込めて演じました。これも決して自分1人の力ではなく、今所属している事務所や多くの方に感謝しつつ臨みました。

——時間はかかりましたが、堅実に役者道を歩んでいらつしやいます。セカンドキャリアを目指す人たちに何かアドバイスはありますか？

藤本 自分は本当はセカンドキャリアというものはないのではないかと思っています。水泳選手だったことを知られるのが嫌だった時期もありましたが、そんな経験もみな一緒になつて自分の今があるように思います。2つは別なものではないし、無駄に思えることも後で考えると無駄じゃなかったことばかりです。自分は五輪と同じように何事も4年周期で考えます。4年を振り返って、少しでも自分で進歩

していると思えば、また4年、さらにまた4年とやっていければ良いのではないかと思っています。



人気ミュージカル『アニー』で大富豪のウォーパックス役に挑戦する。初のお父さん役。
2017年4月22日～5月8日 新国立劇場 中劇場にて上演。

特集 セカンドキャリアで成功する

プロ野球選手から悪役スターへ

八名信夫

取材・構成

木村元彦
(文中敬称略)



八名 信夫(やな・のぶお) 1935(昭10)年8月19日、岡山県出身。岡山東商―明治大学を中退して、56年に東映フライヤーズ(現北海道日本ハムファイターズ)入団。58年、試合中に腰を骨折して現役引退した。その後、東映から俳優デビュー。映画「仁義なき戦い」を始め幅広く活躍。83年に悪役俳優集団「悪役商会」を結成。近年は講演、ボランティア活動にも力を注いでいる。昨年、自ら監督、脚本、主演を務めた『おやじの釜めしと編みかけのセーター』を制作し、全国各地で上映会を開催。

——八名さんは岡山東商、明治大学そして東映フライヤーズで投手として活躍され、その後のセカンドキャリアとして選ばれたのが、俳優の道でした。それも悪役として大きく名を馳せていくわけですが、野球の現役時代の経緯から教えていただけますか。

八名 明治の野球部は2年で退部しました。とにかく地獄でした。あの頃は同じ高校（岡山東商）の2年先輩の秋山（登）さんと土井（淳）さん（後に揃って大洋ホエールズに入団）がいて神宮のスターだったわけです。それで試合に出られない上級生が腹いせに先輩の私を殴りまくったんですね。もう毎回十発も二十発も、感覚が無くなるまで。2年まで我慢したんですが、このままでは本当に殺されるんじゃないかと心配した同級生の近藤和彦（後に大洋ホエールズ）たちが僕を決死の覚悟で逃がしてくれたんです。

それで大学野球を辞めたんです。高校時代からプロのオファーがあった実家に近い広島カープからも

誘われましたが、まだ東京にいたかったので東映フライヤーズに決めました。当時は駒沢に病院を改造した選手寮があつて。選手は皆、暴れん坊でね（笑）。浪商出身で「ケンカハチ」と呼ばれた山本八郎さんとか、豪傑が多かったです。

——東映には1956年に入団されて3年間プレーされるわけですが、現役時代はどのようなものであったのでしょうか。

八名 まあ、エースではないですから、何かあれば「お前行け！」と言われて投げていました。思い出としてはチームメイトとの交流ですね。昭和10年生まれの同い年には土橋（正幸）がいて仲が良かったです。魚屋の息子でね。いなせで気風きっぷが良かったです。先輩の家によく活きのいい魚を持って来て、「お前は一心太助か」と言われていました。

オヤジと俳優

私がケガをしてしまったのは、3年目の日生球場

での近鉄戦でした。リリースで登板したときです。あの頃の日生は砂地だったから、私は滑らないように歯の長いスパイクを履いていたんです。それが投球するときにピッチャーズプレートに引っかかってしまったんです。後ろに倒れたのは覚えてるんですが、そこから記憶が飛んでいるんですよ。意識を失った。それで腰を痛めてしまつて4カ月くらい入院していました。手術をするという治療もあつたんですが、周りの人に聞いたら、運動選手は身体にメスを入れるのは止めた方がいい、というのでずっと痛み止めばかり飲んでいました。

そんなときですよ。石原（春夫）代表に呼ばれて、「おい、お前はもう野球はいいから、親会社、映画の方へ来い。そこで役者をやれとオヤジが言ってるぞ」と声をかけられたんです。「オヤジ」というのは東映の大川博社長ですよ。いきなり野球選手から映画俳優ですから、晴天の霹靂ですよ。びっくりしましたが、大川さんはワンマン社長で言うことは絶

対でしたから、そのまま東映本社行つて俳優になつたわけです。実はうちの実家は岡山で映画館や芝居小屋を経営していて幼い頃から父親には、「絶対に役者にはなるな」と言われていたんです。苦勞しているのを見ていたんでしょね。父が存命だったら、俳優にはならず岡山に帰つていたと思います。

——名物社長だった大川さんについては張本（勲）さんにも伺つたことがあります。在日コリアンの張本さんが東映に入団する際に、国籍がネックで外国人枠に引っかつたので帰化をするかという話になったのですが、お母さんに、「国を捨てるなら野球を辞めろ」と言われたという話を大川さんにしたら、むしろ「お前のお母さんは立派だ」と褒めて下さつて、プロ野球機構にかけあつて以降は日本の学校を出た韓国・朝鮮人は外国人扱いをしないという規約改正をしてくれたそうです。情熱的で野球選手を大事にされていたんですね。

タイツと迫力

八名 そうですね。桜新町に大きな大川邸があつて、選手をよく自宅に招かれては、「栄養失調になるな。たくさん食べる」と言つては肉なんかをたくさん食べさせてくれました。当時は映画の全盛時代でしたから、映画で儲けて野球チームに投下して選手の給料を払っていました。大川社長に言われたら断ることはできなかったですよ。でも不思議なことに私以外の選手には引退するときにそのような（役者になれという）声をかけていないんですね。

あの頃は丹波哲郎、高島忠夫なんか背の大きい役者が多かったから私が誘われたのかもしれませんが。でもまず役者になるには劇団の俳優座に行つて演技の基礎をみっちり半年間やらないといけなかったんです。その稽古を観に行つたら男がタイツをはいて踊っていた。驚いて山崎（真一郎）撮影所所長に、「わしはとてまあんなことはできん」と言つたんで

す。そしたら、「馬鹿もん。高倉健も最初はああやつて稽古したんじゃない。それで今の健があるんじゃないか。お前もやらないかん」と。でもどうしても嫌だ、恥ずかしいと言ひ張つたんです。そうしたら、最後は所長も折れてくれて、「仕方ない、お前はオヤジ（大川社長）が身元引受人や。そんなに嫌やつたら、ええからもう現場へ行け、撮影の現場で覚えろ」と言われました。それで現場に行つたんですが、そうしたら今度は歩かされるばかり。ヨイ、スタートでカチンコが鳴つたらひとつ勘定してから動け、そういうことを教わるんですが、来る日も来る日も遠くの方を歩く演技ばかり。私は大きいんで目立つんです。美空（ひばり）さんの『ひばりのマドロスさん』の撮影のときだったか、堤防の上を歩くんですが、監督がカットをかけると、「八名君は普通に歩いても目立つんでもつと遠くの方の堤防を歩け」。エキストラ的なものしか求められていないから、逆に目立つてはいけないんです。朝から17時ま

です。顔も分からない遠くで歩いているだけ。あるいは会社のオフィスみたいなところを映すときはずっと頭数として隅の方でイスに座っているだけ。それで日当400円でした。野球とえらい違いです。あんなもん飯代にもなりませんよ。

——日当たったんですか。しかし、そういう頭数としての役柄から悪役としてブレイクしていくきっかけというのは何があったのでしょうか。

八名 ある日、鶴田浩二さんが主演の映画の撮影で、悪役が鶴田さんに撃たれるシーンを遠くで見ていたんです。ただボーンと倒れる。それを見て閃いて、監督に言いに行つたんです。「監督、俺は182センチありますよ。俺が倒れたらそれだけで埃が立ちますよ。迫力が出ると思います」。佐伯清監督かマキノ雅弘先生だったと思うんですが、「そうか、お前が言うのも一理あるな。じゃあもう遠くで歩かないでいいから、こつちへ来て倒れてみい」と。それで採用になって本番を迎える前に助監督に言つたん

です。「おい、俺が倒れるところには灰を撒いておいでくれ」。私は大きなコートをまとつて風を起こして、撃たれて倒れたらすごく埃が立つたんです。そうしたら、主役のスターさんが、「お前、迫力があるなあ」と喜んでくれてね。それから撃たれまくって死ぬこと死ぬこと。200本くらい撮つたかな。

そのうちに時代劇なんかの立ち回りも信頼されて来たんです。主役が殺陣の段取りを忘れてしまつて違つた刀の「手」を出しても私はとつさに止めることができたんですね。野球をやつていた運動神経のおかげかな。相手にも自分にもケガは絶対にさせない。思い切り切り合つて間違えても私はパツと止められた。最後の立ち回りになるとスターの人たちから指名がかかつて、「八名、お前俺とやれ」。どうでもいい役をやらされていたのが、ラストシーンには迫力のある八名を呼べとなつて、だんだんカメラに映るようになりました。そこで目立ちすぎてもダメなんです。鶴田さんの後ろにいたら、「お前、向こ

うに行け」。私の方が大きいから目立ってしまうんですね。その辺を心得ないといけなかった。

速さと怖さ

——きっかけは自分で殻を破って演出マインドで提言されたことですね。立ち回りをされた主演の方で印象に残っている俳優さんはどなたですか。

八名 勝（新太郎）さん、若山さん（富三郎）さんの殺陣、立ち回りは本当に上手かったですね。若山さんが最も凄くてとにかく速かったです。厳しかったけど、見せ場も作ってくれました。「カメラが前に寄れる角度を自分で作れ」と言ってくれるんです。テストのときなどに、「八名ここで一回転せえ、そうして俺のポジションを取れ。すれば照明が当たる」。主演用のライティングの下に入る、そうしたら悪役の私が大きく見える。それを切るともつとカッコいいわけです。若山さんはカメラマンに、「八名に寄ってここでワンカット撮っておいでくれ」と

言うんです。あの頃の東映は監督よりも役者が強かったですからね（笑）。お酒も飲まないでストイックな方で、テストのときからどんどん演出プランが変わる。自由に動いてみてくれ、芝居をするなどと言われました。勝さんは逆の「手」が上手かった。仕込み杖の手首の回しなんか素晴らしくて切ったあとの芝居がいいですね。鶴田さんからはただの立ち回りをするなど。「殺すほうは自分も怖いんだ、震えながら殺しに行くんだぞ、だから刀を持つときも「竹光」みたいな持ち方をするな」と言われました。主役は立ち回りをやらないときは「本身」の刀、特にカメラが寄っているときは「真剣」なんですよ。だからその重さと怖さが分かるんでしょうね。私は月に3回、トータルで1200回以上殺されました。

存在感と馬以下

——八名さんは『仁義なき戦い』などでもかなりリアルな芝居を重ねておられます。短いカットの間に

エネルギーを凝縮させる悪役の存在感を感じますね。

八名 そうですね、深作（欣二）さんみたいな監督はリアリズムが徹底していました。現場に臨むにも演技パターンを3通り持っていないといけない。3つやってみて、「じゃあ2番目でいこう」とか言われるんです。リハーサルをやらないしカメラを止めないんです。恐ろしいことが何回もありました。『仁義』の「広島死闘編」。縛りあげた川谷拓三を海に放り込んでモーターボートで引つ張るシーン。浮いてくるかと思ったら、本番は沈んだまんまなんです。川谷が潜ったまま出て来ない。姿が見えない。どうするんだ。どうするんだと皆がパニックになってるのに監督は、「回せ!」。ええー、死ぬぜって思っていたら、案の定引き上げたら意識が無いんです。でも休ませないで次のシーン。そのまま木に吊り下げて千葉真一さんたちに拳銃やライフルで撃たれまくるんです。観た方は分かると思うんですが、撃たれた衝撃でクルクル回るんですが、これは川谷が工夫

して自分でロープを捻って回っていたんです。まだ無名でしたけど、いい演技をして絶対のにし上がろうという悪役の気概を感じましたね。深作監督と言えば私も同じ「広島死闘編」の冒頭で、北大路（欣也）さんに食堂で頭から熱い汁をかけるシーンがあったんですが、このときも火傷するんじゃないかと思つて手加減をしたら、「そんなヤクザがどこにいる」と叱られました。欣也さんはまた頭洗つて、メイクし直してまたかけられて火傷しました。

——しかし、八名さんはもつとひどい目に？

八名 もちろんです（笑）。横浜港の貨物船で撃ち合つて海に落ちるシーンで、一緒に落ちた主役の渡哲也は真つ先に助けられる。でも私は後回しです。「浮いていろよ」と言われて。高倉健さんの映画のときも私の乗っている馬が倒れたんです。俺も脳震盪を起こしていたんですが、スタッフは俺が倒れているのを通り越して馬を助けに行つたんです。私は馬以下なのかとそのときに思いました。

悪役については本当に勉強しましたね。特に洋画から。ジャック・パランスとカリチャード・ウイドマークのタバコの吸い方や酒の飲み方。表じゃ刑事が寒空の下で張り込みながら、パンをかじっている一方、部屋の中ではワルがパスタをガツガツ食っている。その対比。強烈な悪を演じればその分、主役が引き立って映画もよくなる。徹底的に観て研究しました。演じる上ではアンソニー・クインが一番好きですね。所作もセリフも存在感も悪が滲み出る。葉巻の煙だけで殺意を表す。あれが本当の悪役です。ただ切られるだけじゃだめなんです。私は血のりを工夫したり、いろいろ自分で考えた。そこからあいつを使いたいと監督に思わせた。どう自分が映っているかも考えた。客席から、監督から。野球の体験から言えば、嫌がられるピッチャーになろうというのと同じです。役者としても予定調和を壊す。八名はどういう狂気を持つんだこの映画では、と思わせました。例えば仕込み杖じゃなくてこうもり傘に

ドスを入れるとか、仕掛けをしましたね。それは作るのが難しいと言って小道具が泣くんですが（笑）。

媚びとボランティア

昔、仲間とスナックで飲んでいたときに初老の女性が絡んで来た。「映画がつまらないのはお前ら悪役のせいだ」「何でだ?」「悪役の目が媚びている」。そう言うんです。また使って下さい、監督さん、主役さん、プロデューサーさん、そういうのが目に出ているから殺意が無いと言われた。そう言われればわしら媚びているな。こっちからお願いますと言うのはもう止めよう。撮影が終わってから飲みに行つて、「次は何を撮るんですか、使って下さい」つて言うのは止めよう。媚びないで悪役を維持していくのは難しいんですよ。でも、「飲みに行こう」と誘われて、「いえ、野暮用で」と言つて断る。そういうのを心がけました。

——そういった悪役に誇りを持たれた流れから「悪

役商会」というグループ形成に至るわけですね。

八名 私のいた東映だけでない、日活、東宝、松竹、悪役で集合してみると提案したら、全部で12人集まりました。何をやるかと相談したときに、悪役がボランティアをしたら面白いんじゃないかとなったんです。慰問に行くのですが、杉並の養老院なんかは最初は入れてくれなかった。事前に約束していたんですが、いざ行ってみたら怖いんですね、「中に入らずに庭を掃除してくれ」と言われた。掃除しているうちに中でお年寄りが手を振ってくれる。で、ようやく中に入れてくれて会話する。「皆さんテレビは何を見ているの?」「水戸黄門」「あんなのは簡単だ。やってみよう」。で、立ち回りをを見せて、「できる人はいる?」と聞いて参加してもらう。喜んでもらえるんですね。そうやって手弁当で地方にもいろいろと行きましたね。自分で製作費を全部出して作った「おやじの釜めしと編みかけのセータ」という自主製作の映画も、そういった思いやり

をテーマにした映画です。ずっと悪役をやつて来ましたが、これは優しい映画です。DVDも販売して売り上げは被災地への義援金にしています。東北や熊本の災害に苦しんでいる人に映画を通じて恩返しをしようと思ったんです。

——映画を通じた社会貢献ですね。プロ選手でセカンドキャリアを考えている後輩がいたら、どのようなアドバイスをされますか。

八名 まず己をよく知れということです。自分が何者かを知らないといけない。そこからです。何を求められて何ができるのか。役者だったら自分の表情や感情を見極めていくつかの引き出しを作ることです。これは他のジャンルでもそうじゃないでしょうか。社会に出れば余計なプライドは邪魔になるだけです。その意味でも現役時代から愛情を持つて叱ってくれる人は重要です、大切にしないといけません。

大相撲夏場所千秋楽で優勝インタビューに答える白鵬
(2016年5月22日、両国国技館)

白鵬のセカンドキャリアは どうなる？

朝日新聞記者 竹園隆治
文・中敬雄

白鵬(はくほう) 1985(昭和60)年3月11日、モンゴル・ウランバートル出身。2000年に来日。宮城野部屋へ入門し、01年春場所で初土俵。04年夏場所で当時昭和以降4番目の若さの19歳1カ月で新入幕。新大関で迎えた06年夏場所で21歳2カ月で初優勝。これは歴代4番目の若さだった。07年夏場所を初の全勝優勝で飾り、場所後に第69代横綱に昇進。10年には双葉山の69連勝に続く、歴代2位の63連勝を記録。優勝37度、全勝優勝12度とともに歴代1位。192^{キロ}、156^{キロ}。

新横綱稀勢の里誕生で沸く大相撲界。19年ぶりとなる日本出身横綱が表舞台の話題を独り占めしているが、ここに来て陰りが見え始めた第一人者、横綱白鵬のセカンドキャリアにもひそかな注目が集まっている。番付を上り詰めた横綱にとって、引き際と進路は最重要課題。歴代最多の37度の優勝を誇る大横綱が苦境に立たされている。

1月22日の初場所千秋楽。すでに初優勝を決めていた稀勢の里との結びの一番は、白鵬の現状を如実に表した。相手十分の左四つだったが、出足を生かして土俵際まで攻め立てた。これまでなら不利な四つでも慌てない。それが勝負を急いだ。膝に持病を抱える左足が上滑りする。ようやく残った稀勢の里の突き落とし気味の投げにバランスを崩した。足が出ずに前のめりに倒れ、主役を引き立てるだけの敗戦を喫した。

「まっすぐいって、勝敗は宿命、運命に任せた。土俵際で我慢された。強い大関が優勝した。(今場所

の自分は)取りこぼしが多すぎた。まあ、しょうがない」。最終的に平幕への2個の金星を含む11勝4敗。鶴竜、日馬富士の2横綱が休場した穴を埋めるべく死力は尽くした。だが、14日目に3敗目を喫し、1差で追っていた稀勢の里の優勝を許した。沸き返る館内を背に国技館を後にした。

次の春場所のある3月には32歳になる。昨年は春夏の2度優勝したが、9月の秋場所で痛めている左膝に加えて右足親指の負傷などで横綱昇進後初めて休場した。11月の九州場所では歴代3人目の通算1000勝を達成したが、11勝止まり。そして今年初場所も11勝。4場所連続で優勝を逃したのは綱を締めてから初めて。第一人者であることは変わりないが、明らかに全盛期に比べれば衰えが見える。

下り坂を迎えた力士の誰もが考えるのが、引退の時期とその後の身の振り方だ。相撲界の場合、力士が現役を退くと、親方らになって相撲協会に65歳の定年まで残るケース(70歳まで再雇用可)と、角界

と縁を切って別の人生を歩む道がある。一度角界を離れると、戻るとは出来ないルールのため、進路が決まらなければ、引退も出来ないのが現実。親方で残れば、最低でも年収は1000万円を超える。師匠で部屋経営もすると協会から部屋、けいこ場の維持費のほかに力士が幕下以下なら1人月7万円の養成費が、関取以上になれば、番付に応じてさらに部屋に金が入る。ご祝儀やパーティーでの収入もそれが定年まで続くのだから、力士のほとんどが親方で残りたい意向を持つのは当然だろう。

功績と年寄名跡

しかし、誰もが親方になれる訳ではない。基本的には十両以上で通算30場所、幕内ならば20場所、または小結以上になることが条件だ。さらに105と数の決まっている年寄名跡（親方株）を取得する必要がある。横綱は5年、大関なら3年は現役名で残れる制度もある。極め付けは一代年寄。顕著な功績を

残した時に認められるもので、過去には大鵬、北の湖（ともに故人）、貴乃花の3人がいる。千代の富士も認められたが、本人が所属していた九重部屋を継ぎたいと辞退。一旦、別の名跡を襲名後、九重親方になった。基準は明確ではないが、いずれも優勝20度以上の横綱が対象だ。

だが、そんな実績の前に絶対的な条件がもう一つある。「日本国籍を有する者」とする一文だ。「国技である相撲道の伝統と秩序を維持し継承発展させる」（相撲協会定款）として、「ちゃんまげを結い、着物での外出などを義務づける力士に日本文化を指導する立場の親方は日本人であるべき」との考えからだ。このため、外国人が親方になるには母国籍を捨て、帰化するしかない。過去には元関脇高見山、元大関小錦、元横綱曙（いずれも米国出身）もこの手法で協会に残った。現在は元横綱武蔵丸の武蔵川（米国出身）、元大関琴欧洲の鳴戸（ブルガリア出身）、元関脇旭天鵬の大島（モンゴル出身）の3親

方がいる。元小結時天空の間垣親方（モンゴル出身）もいたが、1月に病死している。

さて、そこで白鵬だ。実績は申し分ない。一代年寄を念頭にしても、功績に異論を挟む余地はないだろう。実力のある力士の多くは、引退後に備えて現役時代に名跡を取得し、それを他人に貸し出しておく。新横綱の稀勢の里らもそうだ。しかし、白鵬はまだ名跡を手にしていない。帰化申請をしておらず、モンゴル国籍のままだからだ。元々、協会に残る意志のなかった朝青龍らのように引退後角界を去るつもりなら問題無い。だが、白鵬はすでに内弟子を取り、まげを切った後は師匠として協会に残りたい意向を持つ。だが、それがかなうのは引退時に日本国籍を持つている場合のみだ。帰化が認められるには普通なら約1年。妻が日本人の白鵬ならもう少し短い可能性もあるが、いずれにしても余裕を持って申請する必要がある。

母国愛と絶対条件

「それなら、さっさと申請をすればいい」という関係者もある。だが、それがまた簡単ではない。最大の理由は白鵬の父・ムンフバト氏（75）の存在。20代前半にモンゴル相撲の横綱を務めたムンフバト氏は、レスリングでも1964年東京から五輪出場を果たして、68年メキシコではフリースタイル87^キ級で銀メダルを獲得。4人が誕生したモンゴル五輪史上初のメダリストの1人として、国民的な英雄になっている。日本で言えば、プロ野球の長嶋茂雄氏のような存在か。アルツハイマー病を患っていると聞くと、人一倍母国への愛着が強く、息子の帰化へは反対という。白鵬は父の存命中は意向に逆らえないだろう。大相撲は出稼ぎの場としてモンゴルでも高い認知度を誇っているが、「国を捨てる」形になる帰化には、国民の大半が寛大ではないと言われる。「ならば、特例として日本国籍を有しない場合でも

一代年寄を認めては」との声もある。白鵬自身も大鵬の32度の優勝を超えたあたりから周囲に同様の希望を漏らし始めた。大相撲史上最多の優勝回数を持つ大横綱として。しかし、この考えには相撲協会は対応する気が無い。当時の北の湖理事長は「全く考えていない。年寄になるには、日本人であることが絶対的な条件」と話し、同理事長の急死を受けて、あとを引き継いだ八角理事長（元横綱北勝海）も同意見。背景には日本文化を力士に伝えるという前提とともに、外国人全盛の土俵の実情がある。もし、特例を認めると、白鵬ほどではなくても、日本人横綱を上回る成績を上げる外国人力士が新たに出る可能性は大いにある。その場合に白鵬の前例は、特例ではなくなるからだ。

定員と決断

実は名跡問題は、外国人だけに厳しい訳ではない。力士の実績が問題ない日本人でも空いている名跡が

なくて、角界を去らざるをえなかった者も過去には多々いる。また、現在は禁止されているが、名跡を借りて務めていた親方は、正規の所有者が名跡を別の者に貸したり、売り渡した場合は資格がなくなっていた。年寄名跡を最大105としているのは、出費のかさむ人件費を増やさないための方策でもある。そうやって定員を守ることで、江戸時代から続く組織を自己防衛している側面も無視はできない。

約1200人の小、中学生が参加し、国技館で開かれるようになった横綱主催の白鵬杯わんぱく相撲大会は今年、7回目を迎えた。相撲の歴史に関する書物を読みあさる姿勢も、現役力士としてずば抜けている。だが、今のままでは引退しても年寄名跡は取得できず、横綱名で残ることも出来ない。現役を続けるしかない。「(2020年の)東京五輪で土俵入りがしたい」と意欲を口にする大横綱が、第二の人生に向けてどんな決断を、いつ下すのか。その時まで白鵬からは目が離せない。

セカンドキャリアの現状

波多野圭吾

バスケットボールのBリーグが開幕し、近年ますますの盛り上がりを見せる日本のプロスポーツだが、全ての競技団体が選手のキャリア支援を行っているわけではない。キャリア支援の観点からすれば、選手たちの置かれている状況は未だ厳しい状況にあると言わざるを得ない。

日本のプロリーグとして最も長い歴史を持つプロ野球は、組織的に選手のキャリア支援を始めたのが2007年。ここ10年ほど前からのことである。その活動は、現役を引退した選手の就職支援窓口業務を中心とした「引退選手のキャリア支援」と、パソコンや英会話などを学ぶ学校等を紹介する「現役選手の各種ビジネススキルの習得支援」の2つに大別

される(*)。高校野球等の指導者になることを希望する選手向けに「学生野球資格回復制度」の情報も発信されており、一見するとNPB(日本プロ野球機構)によって手厚いキャリアサポートがされているように見える。しかし、実際にNPBの窓口を訪れてサポートを受ける選手は年間10人にも満たない(*)。その一方、戦力外通告等で選手登録を抹消される選手は毎年80名を越える。こうした数字だけを見ても、プロ野球界で選手のキャリア支援が十分に機能しているわけではないことがわかる。

Jリーグは、2002年に「キャリアサポートセンター(CSC)」を設立し、日本のプロスポーツ界で最も早く選手のキャリア対策事業に取り組み始

めた。Ｊリーグも、当初はパソコンなどの実務講座や引退後の選手の就職支援を中心に活動していたが、2010年の事業の見直し以降は若手選手向けの教育や研修を事業の中心に据え、その対象をトップチームの選手だけでなくアカデミー（育成組織）所属選手にまで拡大した。ＣＳＣは2013年にリーグの組織変更に伴い発展的に解散したが、現在は管理統括本部企画部内に「人材教育・キャリアデザインチーム」が設けられ、それまで担当部署が異なっていた選手の教育や研修、キャリア支援などの業務がひとつに集約された。具体的には「Ｊリーグ新人研修」などの教育研修や、就学支援、就職・就業に関する情報提供などのセカンドキャリア支援の窓口業務が行われている。また、それらと連動して各クラブではスタッフや外部講師などによるプロ選手としての自覚を促す教育や、ビジネスマナー、人権、SNSの使用等に関する研修会が実施されている。中には、ホームタウン活動などの社会貢献活動や自ク

ラブのスポンサー企業での就業体験を通じて選手の社会性を高めようとするクラブも存在する。

魅力的な人材と魅力ある転換

Ｊリーグのキャリア支援がNPBのそれと大きく異なるのは、教育などを通じて日常的に選手のキャリア形成を手助けしている点にある。NPBもＪリーグと同様に新人選手研修会を実施しているが、試合日程等の問題もあつて日常的な支援はほとんど行われていない。それに対して、Ｊリーグはトップチームだけでなく中学生・高校生年代の選手たちにも教育を施しており、単に競技に優れた選手を育てるのではなく、社会や地域にとって魅力ある人材の育成をめざしてキャリア支援の活動を展開している。

このように、「トップアスリートとしてのアスリートライフ（パフォーマンスとトレーニング）に必要な環境を確保しながら、現役引退後のキャリアに必要な教育や職業訓練を受け、将来に備える（*2）」

キャリアの過ごし方は、「デュアルキャリア (Dual Career)」と呼ばれている。これまで日本国内では

選手のキャリア問題を議論する際の用語として「セカンドキャリア」を用いてきたが、セカンドキャリアという言葉自体が現役中のキャリアと引退後のキャリアを区別することになり、それが「現役中からクビになった後のことを考えてどうするんだ」と選手や関係者がキャリアを考えることの障壁になっていた。実際、古くからスポーツ選手のキャリア問題に取り組む欧米では「セカンドキャリア」という用語はほとんど使われておらず、前述の「デュアルキャリア」や、現役引退をひとつの人生の終わりではなく、長く続くキャリアの転換点として捉える「キャリアアトランジション (Career Transition)」という用語が使われている。キャリアに対するこうした欧米の考え方は日本にも少しずつ広がってきており、文部科学省などの公的文書や学術研究の場においてはセカンドキャリアという言葉は徐々に使われ

なくなってきた。

挑戦と人間性

デュアルキャリアを歩む日本人選手のひとりに、岡田優介がいる。岡田は現在Bリーグ・京都ハンナリーズに所属するプロバスケットボール選手でありながら、公認会計士の資格を持つ異色の存在だ。青山学院大学在学中の2005年に「自分しかできないことをチャレンジしていきたい(*3)」と公認会計士試験の受験に向けて勉強を開始。2007年にトヨタ自動車アルバルクに入団した後も練習や試合の合間を縫って勉強を続け、トヨタ入団から3年後の2010年に見事試験に合格。トップアスリートでありながら試験に合格したその事実だけでも驚きだが、資格の取得は引退後に会計士になろうと思つてのものではなく、自分自身の信用力や社会的な力を身につけようという発想からだったそうだ(*3)。岡田はさらに日本バスケットボール選手会の初代会

長や3人制バスケットボールのプロチーム「DIME・EXE」の共同オーナーも務めており、コートの内外でバスケットボールやスポーツの普及振興に尽力している。

スポーツ選手のキャリアの問題は、決してトップ選手に限ったものではない。高校や大学にスポーツで進学しながら、そこで活躍できなかった選手たちにも同様に関わってくる深刻な問題だ。選手以外の肩書きを持つ選手はまだまだ少なく、「一意専心」や「二兎を追う者は一兎をも得ず」といった考え方が根強い日本では、現役中は自分の競技以外のものに挑戦しにくい風潮がある。しかし、その選手のキャリアを生きるのは誰でもないその選手自身であり、周囲はあくまでその手助けしかできない。だからこそ、あらゆるカテゴリーの指導者や関係者は、選手のキャリアについて正しく理解するとともに、その支援を行う環境を整えていかなければならない。

Jリーグチェアマンの村井満は、選手として活躍

するためには技術や身体能力だけでなく「人間力を鍛えていくことが重要(*4)」だと話す。村井のこの発言は、選手の人間性を育てることが引退後の人生だけでなく、現役中のパフォーマンスにも好影響をもたらすことを何よりもわかりやすく示している。選手が人として魅力ある存在となりそのキャリアを充実させることは、スポーツ界の充実にもつながっていく。

(文中敬称略)

【参考】

- *1『プロ野球チームセカンドキャリアサポートについて』(西本祥子取材・スポーツゴジラ第30号31〜34頁)
- *2『デュアルキャリアに関する調査研究 報告書』(独立行政法人 日本スポーツ振興センター・平成25年度文部科学省委託事業)
- *3 スポーツキャリア総合ポータル ロールモデル紹介 <http://www.jpnsport.go.jp/Portals/0/sport-career/introduce/case02.html>
- *4『豊かなスポーツ文化をめざして』(波多野圭吾構成・スポーツゴジラ第33号36〜46頁)

プロ野球界から初の公認会計士—— 奥村武博 「この世で唯一超えられない壁は 自分で作る壁です」

構成 川本凜太郎



阪神タイガースの元投手、奥村武博さんは、元プロ野球選手として初めて公認会計士になった。1997年のドラフト6位で阪神に入団したが、一軍公式戦出場を果たせず、わずか4年で戦力外通告を受けた。引退後は飲食業を経て、公認会計士試験に挑戦。9年の歳月をかけて合格した。野球一筋の元プロ選手が、なぜ難関の資格を取ることができたのか。どんな苦労があったのか。そして、その人生経験をふまえた「デュアルキャリア」の考え方について語ってもらった。

奥村 武博（おくむら・たけひろ） 1979（昭54）年7月17日、岐阜県多治見市生まれ。土岐商業高校時代は投手として夏の県大会準優勝。卒業後、97年のドラフトで6位指名を受けて阪神タイガースに入団。98年はウエスタン・リーグ5試合に登板して0勝2敗。その後は故障などで一軍出場経験のないまま01年に戦力外通告を受けた。13年に難関と言われる公認会計士の資格試験に合格。14年に優成監査法人入所。17年に公認会計士登録。一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構の代表理事も務める。



阪神タイガース新入団選手発表会に臨む奥村武博氏(後列左端)、
前列左端は井川慶氏、後列左から3人目が坪井智哉氏(1997年12月18日、大阪市内のホテルで)

公認会計士の奥村です。以前はプロ野球の阪神タイガースの投手でした。引退後、いったんは飲食業の道に進みましたが、その後、9年という長い歳月をかけて公認会計士の資格試験に合格しました。現在は会計士の資格を生かして、野球、サッカー、陸上、バレーボールなどの現役選手に対する財務面のコンサルティングや、引退後に起業を目指す選手や競技連盟などの財務面のサポートをメインに仕事をしています。一方で2017年10月に一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構を設立して、代表理事をしています。後で詳しくお話しますが、この機構の活動を通じて、これまでの私の経験をふまえた引退後のキャリア形成への取り組み『デュアルキャリア』という考え方を、アスリートやスポーツに関わる人たちに広めていきたいと思っています。

私は野球を始めた幼稚園の頃から将来の夢はプロ野球選手になることでした。中学3年の秋、地元の岐阜県立土岐商業に甲子園出場経験のある監督が就

任したと聞いて、その高校への進学を決めました。当時は商業高校が何を勉強する学校なのかも知りませんでした。が、結果的にその選択がずっと後になって、今の仕事と結びつくことになります。

チャンスと戦力外通告

夏の高校野球県予選は高校2年が準決勝、3年は決勝で敗れて、結局、甲子園には出場できませんでした。私は身長が190cm近くあるのですが、それほど球速のある投手ではなく、コントロールを武器に打たせて取るタイプだったので、プロになれるとは思っていませんでした。ところが、夏の大会が終わった3年の秋、監督から「タイガースから指名の話がきている」と聞かされ、1997年11月のドラフト会議で6位指名されました。すでに就職も決まっていたため、親をはじめ周囲にはプロ入りに反対する人が多かったのですが、小さい頃から憧れていたプロ野球選手になれるチャンスですから、反対を

押し切って入団しました。

ドラフト同期には後に阪神のエースからヤンキースに移籍した私と同じ高卒の井川慶や、東芝から入団した坪井智哉さん、他球団では現巨人監督の高橋由伸さんがいました。新人ながら一軍で活躍する選手がいる一方で、私は1年目の98年半ばに右ひじを痛めて、オフに手術を受けました。翌99年はずっとリハビリで、ウエスタン・リーグ最終戦で1イニング投げただけでした。

その年の秋のキャンプでたまたまコントロールの良かった私の投球を見た野村克也監督に、「小山正明2世」と、阪神の往年の名投手になぞらえて評価していただきました。それが功を奏したのか3年目は春季キャンプから一軍に帯同して、オープン戦でも2試合に登板させてもらいました。ただ結果的にここが私のキャリアハイになりました。開幕戦は二軍で迎え、その後に肋骨を骨折して再びリハビリに専念。4年目の01年には右肩を痛めて、シーズン終

了後に戦力外通告を受けました。

結局、私のプロ生活は一軍公式戦の出場もなく、わずか4年で終わりました。戦力外になる時は本当にあつけなかった。球団幹部に寮の一室に呼び出されて「来季は契約しません」とお決まりの言葉を告げられました。ほかにも何か話したとは思いますが、その一言だけで頭が真っ白になって覚えていません。その後、1年間は打撃投手として球団に残りました。打者が打撃練習をする時に投げる投手です。打撃投手は打たれるために投げるのですが、自分はどうしても打たれたくないという意識が働いてしまふ。結局、その打撃投手も1年で戦力外になりました。

この時は、このまま肩の痛みを抱えたまま野球界にしがみついても、選手として復活することも、打撃投手を長く続けることも無理だろうと自分でも感じていました。同年代と比べても、4年間大学に行つて、1年間浪人したくらいの年齢なので、早いう

ちに外に出た方がいいだろうと考えて、野球界から完全に離れることを決断しました。

しいたけとメロンで1年

引退後に始めた仕事は飲食業でした。一般的にも野球選手のセカンドキャリアとして飲食業をイメージする人が多いと思います。引退する選手にとつても、もつともイメージしやすい職種です。自分もそうでした。なぜかというと現役時代に野球以外の世界で一番接点が多いのが飲食業界だからです。

引退してすぐに友人とバーを経営したのですが、その後、ホテルの調理場に職を変えました。就職面接のときにはタイガースの元投手という経歴を言わず、履歴書にも書きませんでした。そうすると社会では、最終学歴が高卒で、卒業後めばしい職歴もなく4、5年を過ごした22、23歳のフリーターという扱いになります。そうなる仕事はもう単純作業しか与えられません。先輩が隣でガバツと割ったメロ

ンの種をかき出したり、しいたけの軸をちぎるといった作業を1年延々繰り返し返すわけです。

なかなか辛い仕事だったので、メロンの種をかき出す手の動きはカーブを投げる時に似ているなどか、しいたけの軸を取るのはスライダーやな、などと思いつきながら作業をしていました、その一方でこの仕事をずっと続けて自分の将来はどうなるんだろいかという不安感が募り、そして野球選手という肩書がなくなったときの自分の無力さを痛感させられました。

総額約60億円と1日7000円

高校時代はずっと野球をやっていたのでアルバイトの経験もない。だから履歴書の書き方も分からないう。タイガース時代は寮生活だったので、水光熱費などの目に見えないお金を意識したこともなかった。本当に世間を何も知らなかったし、社会生活を営むための知識やノウハウは何もなかった。でも大阪で

仕事をしていて、いくらタイガースの元選手という肩書を隠しても、さすがに気づかれるだろうと思っていたのですが、これがまったく気づかれない。自分は圧倒的な無名選手でした。この先、どうしようかと不安ばかりが募ってきました。

私が社会に出た03年、ずっとBクラスだったタイガースが18年ぶりにリーグ優勝しました。この年に20勝5敗の大車輪の活躍をしたのが私の同期だった井川慶でした。日本を代表する投手になった同期の活躍にうれしくなる一方で、同じスタートラインに立っていたのに自分は何をしているんだ、わずか数年でこの差は何なんだと、今の境遇と比較して自分がどんな置いていかれるような焦燥感がこみ上げてきました。タイガースは05年にもリーグ優勝して、翌06年に井川は総額約60億円でヤンキースに移籍しました。一方で自分はひたすらメロンの種をかき出し、しいたけの軸をちぎる。それで1日7000円、8000円。彼が投げる一球より少ないかもしれない

い……いろんなことが頭をよぎり、この時期は本当にどん底でした。

この生活から抜け出すには、何かを変えないといけないと思いました。でも結局、思いつくのはホテルがダメなら次はカフェなど、発想が飲食業から抜け出せない。それはなぜかというと世の中にはどんな仕事があり、どんなことがお金になるのかをまったく知らなかったからです。そんな時、ある人から分厚い資格のガイドブックを渡されました。「資格を取りなさい」というわけではなくて、「まずは視野を広げなさい」と言われました。

習慣と三振

そのガイドブックで公認会計士という資格を見つけたとき、私の昔の記憶と結びついたんです。それが高校時代の簿記の学習経験でした。高校は商業高校だったので、卒業までに簿記検定2級までは取るという暗黙の了解がありました。検定試験に受から

ないと、野球部の遠征に連れていつてもらえなかった。だから簿記はしつかりと勉強しました。自分でも簿記は嫌いではなく、授業も真面目に受けました。その経験があつたので公認会計士の資格に挑戦しようと思ったのです。

ご存じの通り公認会計士は難関資格です。長い挑戦になりました。すぐに資格予備校に申し込んで、アルバイトをしながら勉強を始めたのですが、そもそも高校を卒業してから長時間机に向かって集中して勉強する経験がなかったので、まずその習慣をつけることに非常に苦労しました。何しろプロ野球選手頃は新幹線で2時間座って移動するだけでも苦痛でしたから。だから毎日何時間も座って勉強できるまでかなり時間がかかりました。それでも、日商簿記検定の1級に合格したり、ちよつとした成功体験が重なって成果を感じるようにはなりました。最初は大阪でアルバイトをしながら勉強していたのですが、その後、東京の会社で正社員として働きなが

ら受験勉強を続けました。

そして、09年に短答式試験に合格しました。公認会計士の試験には短答式試験と論文式試験の2段階あります。短答式試験に合格すると2年間に論文式試験を3度受けられます。これを全部不合格になることを『三振』と言います。11年に私は『三振』してしまいました。もう一度、短答式試験からやり直します。「野球選手が三振したらあかんやろ」などと散々周囲から揶揄^{やゆ}されて、もうあきらめようと思ったこともあります。でも何とか思い直して、勉強への取り組み方を見直して、2年後の13年11月に合格することができました。プロ野球選手を引退して12年、勉強を始めてから9年。まさに9回裏のサヨナラ満塁ホームランでした。

共通点と合格

『三振』した私がなぜ2年後に合格できたのか。もちろん一秒も無駄にしないようにストイックな生

活環境に変えて、猛勉強しました。ただ、この2年間で一番大きく変わったのは、スポーツと勉強の共通点に何となく気がついて、発想の転換ができるようになったことです。野球で培ったことは勉強にも生かせるようになるようになって、実際にそれを勉強に取り入れることで、飛躍的に成績が伸びたのです。

具体的に説明すると、スポーツと勉強はどこが共通しているかというところからなんです。例えばスポーツ選手は一回失敗したら、なぜ失敗したのかを考えて、修正してもう一度トライする。それを繰り返すことで成長します。例えばビジネスの世界でもPDCAサイクルという同じような手法があります。目標を設定して、予算を決めて、活動を始める。目標に到達しなければ原因を分析して、やり方を修正して、再び目標に向かって活動する。それを繰り返すことで業務が改善されます。受験勉強のサイクルも同じなんです。模試を受けて、間違えたら復習して、修正して改善する。それを繰り返して課題を克

服していく。そこに気がついてからは、畑違いだと思っていた公認会計士との距離がグッと縮まって、勉強に取り組む姿勢や効率が劇的に変わってきたのです。

私が通った高校がたまたま商業高校で、そこでたまたま簿記に出会い、それが公認会計士につながりました。すごく不思議な縁だと思う一方で、人生にとって無駄になる経験なんて一つもないんだと強く感じました。野球の経験も最後に受験に生かすことができました。そこから私はスポーツ選手のセカンドキャリアについての考え方、『デュアルキャリア』の重要性に気づいたのです。

私はプロ野球選手を引退して、それからセカンドキャリアを考えました。それまで野球しかしてこなかったので、すごく狭い選択肢の中から次を選ばなければならなかった。でもアスリートの期間は長い人生の一部にすぎません。だから、長い人生を歩む上でアスリートの時期に、同時にそれ以外の部分も

育てましようというのがデュアルキャリアという考え方です。

気づくキャリアと気づく能力

現役中から引退後のことを考えて、スポーツをやりながら公認会計士の資格を目指すといった、一般的な文武両道の考え方とは少し違います。今一生懸命やっているスポーツの練習や試合の中で、実は社会でも生かせるこんな能力が育っている。それを意識して取り組むだけでも全然違う。それが引退後のキャリアにつながるという考え方です。

例えば問題解決能力。試合の立ち上がりが良くなかった投手が、尻上がりに調子を上げることがよくあります。これは自分の問題点に気づいて、試合中に修正して改善しているわけです。シーズンを通して調整や、来シーズンへ向けた新たなウイニングショットの練習などでも、自然と問題解決能力が養われています。状況判断能力もそうです。対戦チーム、

試合展開、対戦相手、気温や気候など、1球1球あらゆる要素に左右されながら状況が変わります。その都度、自分で逐一状況を判断して行動しています。ですからこの能力は実は野球選手は非常に高いと思います。

ビジネスでもチームで仕事をするときに自分がどんな立場で、どんな役割を果たすべきかを自分で考えて行動することが求められます。一般的にスポーツ選手の能力、スポーツ選手に求められるものといえば、根性とか体力とか上下関係といったところにフォーカスされがちですが、私はそういった部分に加えて、実は問題解決や状況判断といった能力もすごく高いと思っています。

この能力に一番気づかなければいけないのがアスリート本人なんです。野球しかしてこなかったという事実は、野球以外のことができないということを実証するものではありません。自分は野球を通じて、社会でも生かせるこんな能力を培ってきましたとい

う自負があれば、いろんな業界にチャレンジしているはずですよ。

学生のアスリートはスポーツ以外に授業の時間が確保されています。私も簿記を授業で学びました。そういった授業を通して知識を増やしたり、学校行事などスポーツ以外のことに意識を高めておくだけでもデュアルキャリアになると思っています。私は働きながら公認会計士の受験勉強をしていました。大人になつてから勉強する時間を確保するのはすごく大変なことで、高校時代、あれだけ授業時間、勉強時間を確保してもらえたのは本当に幸せなんだとつくづく気づかされました。

ゴールと通過点

私は懂れていたプロ野球選手になりました。でも1年目からケガをして、一軍公式戦で投げることなく、わずか4年で戦力外になりました。そもそもなぜケガをしたのか。突き詰めて考えると私はゴール

がプロ野球選手になることでした。それに満足して、そこからの成長をそれほど強く求めていなかった。例えば大谷翔平選手はプロ野球はメジャーへの通過点でした。つまり目標設定をどこに置くかで、取り組む姿勢が変わってくる。だから、今、自分は目標設定が非常に重要だと思っています。

壁と自分

資格試験に合格して、実務経験を積むインターン期間を経て、17年6月に公認会計士として登録を完了しました。新しい会社も立ち上げました。でも、自分は一度、苦い経験をしているので、今はすべて通過点でゴールではないと自分に言い聞かせています。

結局、自分は野球しかしてこなかったから野球しかできないという考え方は、自分で自分の可能性を閉ざしてしまっているんだと思います。『この世で唯一超えられない壁は自分でつくった壁である』と

いう言葉を私は最近とても大事にしています。自分で壁をつくって無理だと思ってしまうと、問題点を改善しようと思わない。壁を越えようとしなくなります。でも、できないと思わなければ、何とか越えようと考えて道筋を探し続けるはずなんです。

私も「元プロ野球選手が公認会計士の資格試験に合格するわけないだろう」と散々言われました。でも、自分だけは絶対に合格できるはずだという強い思いを持って、自分の可能性を信じて、粘って粘って合格することができました。私の場合は簿記でしたが、スポーツ以外の可能性の種は、アスリートの中に必ず眠っているはずです。それを私は自分の経験から学びました。自分自身が可能性を閉ざさなければ道は必ず開けてくると思います。

(この記事は、2017年11月28日に東京・渋谷ハクジューホールで行われた、日本スポーツ学会主催第5回スポーツ・セカンドキャリア・シンポジウムをもとに構成しました)

セカンドキャリアで成功する②

五輪二大会連続金・柔道家

上野雅恵が みつけた夢仕事

取材・構成 川本 凜太郎

柔道女子70kg級で2004年アテネ、08年北京と五輪を連覇した上野雅恵さん(39)が、第三の人生で「もう一つの夢」を実現させた。09年の引退後に専門学校で動物看護師、トリマー、ドッグトレーナーなどの資格を取得、昨年12月に東京都東久留米市にペットサロンを開業した。競技とは無縁の業界へ転身した金メダリストが、その理由と新たな夢について語った。

上野 雅恵(うえの・まさえ) 1979(昭54)年1月17日、北海道旭川市生まれ。3歳で柔道を始める。旭川南高2年の高校選手権で準優勝。97年に住友海上(現・三井住友海上)入社。70kg級で98年の全国女子体重別優勝。00年シドニー五輪は9位。01、03年の世界選手権で優勝し、04年アテネ、08年北京と五輪連覇を達成。09年3月に引退した。得意技は大内刈り、大外刈り、寝技。3姉妹の長女で次女順恵は12年ロンドン五輪63kg級銅メダリスト。三女巴恵は70kg級で世界ジュニア王者になった。

◆『DOG58』〒203-0023 東京都東久留米市南沢5の3の12 電話・FAXは042・445・3942



ペットサロンの店名は『DOG58』（ドッグゴワ）。今年5月で14歳になった愛犬ゴワの名前をつけたという。入り口がガラス張りで、道路から明るい店内が一望できる。正面の約6畳ほどのスペースを犬たちが元気にのびのび走り回っていた。店には上野さんの柔道家としての現役時代の栄光を示すものはない。看板にも「上野雅恵」の名前はなかった。そこに第二の人生にかける彼女の決意、強い意志が感じられた。

上野 「お客さんは私が柔道をしていたことを知らないです。メダリストがやっているお店だと冷やかして来られても困るし、本当に犬のことを大事に思っているお客さんに来てほしいので、お店の宣伝もしていませんし、ホームページもつくっていません。場所は郊外ですが、環境がよくて犬を飼っている人が多いので、少しずつお客さんは増えています。その人たちにリピートで来てもらうことが重要だと思っています」

犬のトリミングや一時預かりなどを請け負う。店は上野さんの住居も兼ねているので、大切なペットを24時間体制で見守ることができるのが強み。夜間に犬を狭いケージに入れっ放しにすることもない。モットーは「犬も飼い主も安心できる店」。

気持ち良さを犬に覚えてもらう

上野 「お客さんにはトリミングと預かりを他のお店と併用してもらっては困ると伝えます。実はトリミングもスリッカー（毛を解くブラシ）をガンガン当てて、犬を雑に扱う店が多い。私は初めてのお客さんには必ずトリミングを見てもらいます。スリッカーやドライヤーも犬が痛がらない角度があります。丁寧な仕事を飼い主さんにお見せして、安心してもらうことが大切だと思っています。せっかくウチで気持ちのいいトリミングを犬に覚えてもらったのに、他の店で痛い思いをしてしまうと犬もかわいそうだし、私も手間がかかってしまいますから」

昨年12月の開店からまだ約半年だが、犬について語る上野さんの口調は熱く、知識も実に豊富で深い。そこに、現役時代のあの勝負師然とした寡黙な武道家のイメージはない。

上野 「今は週1回、所属先の三井住友海上で柔道のコーチをしています。残る6日はずっとお店にいます。朝、犬を散歩に連れて行つて、掃除や洗濯をして、トリミングをして、ご飯をつくってあげて……。午前10時から午後8時までシャッターを開けていますが、閉めている間もやることはたくさんあるんです」

朝から晩まで柔道だった

北海道生まれの上野さんは、幼い頃から実家で雑種の犬を飼っていたこともあり、当時から動物が大好きだったという。もともと6歳のとき、北海道・湧別町ゆうべつで道場を開いた父のもとで柔道を始め、小中学生時代は学校から帰宅すると父の道場で厳しく鍛

えられる日々で、動物に関わる仕事をするという発想はなかった。

上野 「柔道をするのが当たり前で、ほかに選択肢がありませんでした。特に長女だったこともあり、とにかく父の指導が厳しくて練習ですごく追い込まれて、試合でも怒られる。だから私は柔道が好きじゃなかった。学校が終わって夕方から練習。朝も家の前の電柱にチューブを巻き付けて引っ張ってました」

進学した旭川南高校でも柔道部に所属。3年の時、96年アトランタ五輪で同校の先輩でもある恵本裕子が61kg級で金メダルを獲得したシーンを、高校の校長室のテレビで見て、初めて五輪を知ったという。卒業後の97年、その恵本が所属していた三井住友海上に入社。柳澤久監督の指導を受けて、一気に日本のトップ選手へと成長した。翌98年4月の体重無差別で闘う全日本選手権では70kg級ながら19歳で準優勝。同11月の全国体重別で初優勝を遂げた。

上野

「高校生の頃は五輪がどんな大会かも知りませんでした。卒業後は大学に進学するつもりでしたが、3年の時に三井住友海上の北海道合宿に参加して気が変わりました。練習は反復練習が多くて、科学的なトレーニングもやっていました。これは違うなど。柔道が続けるなら、世界一になるまでやろうと心に決めました。五輪で金メダルを取った選手がいるなら、私もそこに行けば取れると思いました」

初出場した00年シドニー五輪は3回戦で敗れたが、翌01年の世界選手権（ミュンヘン）で初優勝して世界の頂点に立つと、大阪で開催された03年の世界選手権で連覇を達成。そして、04年、アテネ五輪の決勝で宿敵ボッシュ（オランダ）に一本勝ちして悲願の金メダルを手にした。当時25歳、70kg級はまさに『上野時代』だった。そのアテネ五輪後、上野さんはオスのチワワを購入する。白い毛がゴワゴワしていたので『ゴワ』と名付けた。

苦境時代を支えてくれた犬

上野

「それまでウサギやハムスターを飼っていたのですが、やっぱり犬が飼いたいと思ってペットシヨップに行きました。サークルの中にチワワが5、6匹いて、一番トイレを覚えていなくて、一番元気だったのがゴワでした。1週間考えてから買いました」

アテネ五輪後は故障なども重なり、思うような成績を残せなかった。3連覇がかかっていた05年の世界選手権（カイロ）ではメダルを逃す。07年は全日本選抜体重別で初戦敗退するなど、99年から続いていた日本代表メンバーから外れ、世界選手権への出場を逃した。そんな苦境の時代、上野さんの心の支えになったのがゴワだった。

上野

「精神的にすごく癒やされました。家に帰ってゴワを触っているだけで、イライラや落ち込んでいた気持ちが全部消えて、精神的に安定するんです」

2004年アテネ五輪で金メダル獲得



だから休日は散歩や食事にも一緒に行きました。でも柔道をしながら犬を飼うのはすごく大変で、練習でとても疲れて帰宅したあと、ふんや尿の掃除をして、ご飯をつくって、散歩にも連れて行かなければならない。世話がかかるんです。でも、それ以上に返してくれるものが大きかったですね。この子のために頑張ろうと思いました」

『トリ』の幸せのために

そして08年、上野さんは完全復活を成し遂げる。アジア選手権で優勝すると、北京五輪では圧倒的な強さで連覇を達成する。大会前に全出場選手のデータを分析して、自分の勝利を確信していたという。大会本番では怖いくらいに冷静で、完璧に心のコントロールができていたようだ。もしかすると愛犬との4年間の生活も、上野さんの心に、何らかの影響を及ぼしたのかもしれない。そして、09年3月、全日本柔道連盟に強化選手の辞退届を提出して、現役

引退を発表する。

上野 「北京の前からこの大会でやめようと思っていました。いろいろ苦しい思いもしたし、子どもの頃からずっと我慢して頑張ってきたので、もういいだろうと。ずっと選手をやってきたので、急に指導者になるのは絶対にいやでした。正直に言うのと、現役を終えた直後は、柔道着も着たくないという感じでした」

引退会見後、上野さんが選んだ新たな道は、意外にもペットビジネスの専門学校への入学だった。取り寄せた資料の中にあつた、「すべては犬の幸せのために」という文字に目が止まった。新宿区にある専門学校だった。

上野 「現役時代、ゴワに本当に助けてもらいました。だから、引退後に何をしようかと考えたとき、ゴワのために何かしてあげたいと思って、ペットの専門学校に行くことを決めました。新宿の専門学校に体験入学に行ったのですが、先生が姿を現すと犬

たちがワッといっせいにそのもとに集まった光景を見て驚きました。すぐ犬に好かれているんです。そして、その先生に『この専門学校で学ぶ技術は犬の幸せのためにやっていることだから』と言われて、ここで学びたいと思いました」

専門学校は2年間。上野さんが選んだ動物看護コースでは、犬のトータルケアを学ぶことができた。トリマーとドッグトレーナー、動物看護師の資格を取得。さらに犬に対する人間の関わり方の大切さにも気づかされたという。

ドッグフードも試食、シャンプーも体験

上野 「生徒がトリミングやトレーニングをすると犬がバタバタ動くのに、先生がやると全然動かない犬がピッと先生の目を見るんです。先生から『犬が先生なんだよ。犬から信頼されて、目を見てもらえような人にならなさい。そのために日々、努力しなさい』と言われました。犬はもともと群れの中で

ボスに守られて生活してきたので、ボスになった人間が、しつかり守ってあげるよ。安心していいよという感じで接しないと、言うことを聞いてくれないんです」

一方でペットフードやワクチンの知られざる実態や、金もうけ優先のペットショップやブリーダーなど、日本のペット産業が抱えるさまざまな問題点に、強い不安を抱くようになったという。

上野 「特に今まで知らなかった、ペット業界の裏側が分かりました。安いドッグフードには人間が口にできないような材料が使われていました。私も実際に食べてみましたが、油っぽくてまずい。体に悪い化学物質や添加物も入っていました。犬のシャンプーも実際に使ってみると皮膚や毛がさがさになるものがある。混合ワクチンを打って死んでしまった犬もありました。ペットが摂取するものは人間のようになりつつありました。ペットが摂取するものは人間の状況で、私がゴワによかれと思ってやってきたことも、

実は虐待だったんだなと気づきました。ゴワのためにも、これからは私自身でしっかりやらなきゃと思いました。ひどいことをするのも人間なら、それを助けるのも人間なので」

上野さんは専門学校で2年間、みっちり勉強してペットビジネスの資格と専門知識を身につけた。しかし、卒業後、再び柔道の世界に戻る。11年2月、コーチとして三井住友海上柔道部に現場復帰した。

上野 「専門学校に通っている時も、三井住友海上には所属していて、大会などには顔を出していました。コーチとして戻ったのはロンドン五輪を目指していた（3姉妹の次女）順恵よしえのことが気がかりで、ロンドンで金メダルを取ってほしいと思っていたので、そこまではサポートしようと思いました」

順恵さんは北京五輪代表をあと一歩で逃した後、09年、10年と世界選手権を連覇するなど、12年ロンドン五輪での金メダル有力候補として期待されていた。五輪本番は準々決勝で敗れたが、敗者復活戦で

勝ち上がり、銅メダルを獲得。長女雅恵さんに続き、姉妹で五輪メダリストになった。その後、上野さんは全日本のコーチも任されたが、16年リオデジャネイロ五輪を節目に、きっぱりと柔道の現場を離れる決断をした。

柔道家は犬よりわがまま

上野 「所属のコーチを4年、全日本のコーチを2年やって、恩返しもできたし、もういいかなと。どこかで区切りをつけないとズルズルしてしまうから、コーチはリオまでと決めていました。やつぱり人に教えるのは難しいですよ。特に柔道家は気が強くてわがままですから（笑）。人間を教えるより、やつぱり犬の方がいいと。純粹でかわいいし」

リオデジャネイロ五輪後、上野さんは1年間、都内のペットサロンに勤務して、実践的な勉強を積んだ。一方で自らお店を経営するための場所探しなど準備をすすめ、17年12月、満を持して、東京・東久

留米市に念願のペットサロンをオープンした。

野菜は旬のものを

五輪金メダリストという看板は、第二の人生ではまったく通用しない。それは上野さんが一番よく分かっている。しかし、意外にも柔道人生で培った経験は今、ペットの世話に大いに役立っているという。

上野 「柔道で鍛えた瞬発力や反応が、動物を扱うのに役立っています。専門学校のとくに、他の学生が鈍くて、全然違うなと感じていました。みんなが力負けしていた大型犬も、私は軽く押えますから。犬の毛をカットするときも犬が安心する押え方で安定させることができます。柔道で培った自分の心をコントロールする力も犬を扱うときに役立っています。人間が平常心でいないと、犬は不安になります。焦ったり、不安な気持ちで接するとすぐに伝わるんです。あと毛をカットして整えるトリミングの技術は、毎日練習していないと腕が落ちる。それも

技の練習を毎日していないと鈍ってしまう柔道と同じなんです。実は共通点は数多くあるんですよ」

自身を金メダルに導いた、人一倍研究熱心で、どんなに辛くても決して信念を曲げないいちずな性格も健在。犬にはペットフードではなく、毎日、手づくりご飯をつくっている。食材選びから神経をとがらせている。シャンプーも人間用のせっけんシャンプーを使用する。手間とお金がかかるが、人間ではなく犬が中心という信念を貫いている。

上野 「犬はもともと肉食だったのですが、人間に飼われることで雑食になったので、野菜も消化できます。だから食事は肉8割、野菜2割の割合です。一番栄養がある鶏の胸肉をゆでて、野菜は旬のものですね。シャンプーはなるべく香料の入っていない、毛にも皮膚にもいい、私も利用しているものを使っています。人にいいものは犬にもいい。すべて犬を中心に考えています」

ペットサロンを経営する上で、顧客らとのコミュニ

ニケーションは欠かせない。現役時代、口数の少ない印象が強かった上野さんも、苦勞しているという。

上野 「初めての接客なので、今も大変ですが最初は特に大変でした。安いドッグフードがいかに危険なのかを伝えるときに、お客さんにどう言えば分かっていただけかなど試行錯誤しました。でも私も現役を引退してから専門学校に2年間通いましたし、柔道ではコーチとしてもコミュニケーションの重要性を学んでいたもので、少しずつ慣れてはきました。私の話を聞いて手づくりご飯に変えてくれた飼い主さんもあります。だから、ウソをつかず、誠心誠意、一生懸命伝えれば、共感してくれるお客さんは来てくれると思います」

『ゴワ』との時間を大切に

柔道では五輪で金メダルを獲得して世界の頂点に立った。ペットサロンの経営者としては、将来にどんな大きな夢を持っているのか。その答えは意外な

ものだった。

上野 「夢もありますし、「私がやらなきゃ」という使命感もあります。でも一番の夢はゴワとずっと一緒にいることです。5月に14歳になりましたが、心臓に重い持病を抱えて薬を飲んでいるので、今は死に目に一緒にいてあげたいという思いが強いんです。コーチをしているとどうしても不在がちで、預けることが多かったのですが、絶対に後悔すると思いました。現役時代から本当にゴワには与えてもらったものがすごく多かった。だから今、こうやって一日中ずっと一緒にいられるだけで本当に幸せなんです」



セカンドキャリアを語る

構成 阿部雄輔

女子柔道78kg超級の現世界チャンピオン朝比奈沙羅選手は、目前に迫った東京オリンピックを目指しながら、将来医師になるための勉強にも励んでいる。スポーツ選手は勉強なくて当然という風潮が今なお根強い中で、勉強して自分の価値を上げることが常に考えているという彼女の人生観を培ったものは――。

朝比奈 沙羅（あさひな・さら） 1996（平8）年、東京都生まれ。渋谷教育学園渋谷中学校・高等学校卒業後、東海大学体育学部武道科へ入学、今春卒業予定。2004年アテネ五輪100kg超級の鈴木桂治選手の試合に魅了され、小学2年生で講道館の門を叩き柔道を始める。中学2年生で全国中学大会70kg超級に優勝し日本代表に初選出。その後11年世界カデ（17歳以下）70kg超級、14年世界ジュニア（21歳以下）（史上3人目）78kg超級、18年世界選手権78kg超級で優勝し、年齢別の3カテゴリーすべてで世界一となった。その他の主要タイトルは15年ユニバシアード、17年全日本選手権、17年世界選手権（無差別）など。18年4月からパーク24柔道部に所属。大学生が在学中に実業団に所属するのは柔道界では初めて。一方「オリンピックの金メダリストで医師」の夢を実現するべく医進系予備校にも通っている。2018年12月4日、東京都渋谷区のハクジュホールで行われた「第6回スポーツ・セカンドキャリア・フォーラム」に登壇（聞き手・長田渚左）

——「スポーツ・セカンドキャリア・フォーラム」は本日で第6回目になります。これまではJリーガーだった方が弁護士になったとか、元プロ野球のピッチャーが公認会計士になったとか、そのサクセスを振り返るかたちでお伝えしてきましたが、今回は違います。22歳の現役世界王者、柔道女子78kg超級の世界チャンピオン朝比奈沙羅さんに、今現在進行形でお考え中のことをお聞きします。まず最初にかがいきましょう。朝比奈さん、将来何になりたいと今お考えですか？

朝比奈 2020年東京オリンピックで金メダリストになり、競技を引退した後に医師の道に進むのが今の私の夢です。

——練習でお忙しい毎日ですが、今日はこのフォーラムの後に「日本スポーツ学会大賞」の受賞式があって、受賞者の猪谷千春さんが講演されます。猪谷さんと一緒にいただければとおっしゃって、出演を快諾してくださいました。

朝比奈 父に教えられて、猪谷さんが受けていらった教育「猪谷メソッド」を小さい頃から自分も実践してきたんです。お箸で小豆を拾うのを右手だけでなく左手でもやるとか、ボールも左右両手で投げられるようにとか。猪谷さんがいらつしやるとうかがって、自分も登壇させていただけたら光栄だと思います。

——お父様、お母様のご職業は何でしょう？

朝比奈 父が歯科麻酔科医で、母が歯科医院を開業しています。父方の祖父も歯科医師で開業していました。——周りのお医者様の人口密度が非



常に高いんですね。朝比奈さんご自身がお医者様を
目指しているのもその影響ですか？

朝比奈 そうですね。やっぱり幼少期から医療にか
かわる人や場所に近い環境にいたので、自分がそう
いう世界にいるのが当たり前と言うか、自然とそこ
を目指すようになっていきました。ちよつと言いは
悪いかもしれませんが「洗脳」と言いますか、気
づいたらその道を目指していましたね。

——子供の頃、お父様に本当の手術をナマで見せて
もらったそうですね。

朝比奈 上行結腸癌の摘出手術をリアルタイムで拝
見しました。

——ご覧になって、わっ気持ち悪いとか思わなかつ
たですか？

朝比奈 気持ち悪いというより面白いなあとと思って。
子供の頃から理化学研究所に連れて行ってもらった
り、マウスを使った実験と一緒にやって、こういう
のが外科手術だぞと教えてもらったりしていました

から。初めて本当の手術を見た時には、何て言うん
ですか「生」、生きてるってこういうことだなあつ
ていう「生」を感じた瞬間でした。そういうのを含
めてうまいこと洗脳されているなと思います。

一日11時間の猛勉強も実らず医学部受験に失敗。
体育学部で学んだ4年間を将来に活かしたい。

——柔道はいつから始められたのですか？

朝比奈 小学校2年生の秋からです。その前はほか
のスポーツをいろいろやっていたんです。両親は共
働きで自分は鍵っ子だったんですが、ともかく習い
ごとが多くて、習いごとから習いごとにハシゴさせ
られていて、算盤そろばんに行つてからバスケの練習だつた
り、公文に行つてからピアノへ行ったり、一日にふ
たつ習いごとに行くのが普通つていう生活を月曜日
から土曜日までやっていて、日曜日も水球の練習に
連れて行かれたりしていました。

——そんな中で柔道に集中するようになったきつ
かけは何でしょう？

朝比奈 アテネ・オリンピックの鈴木桂治先生の柔道（100 kg超級金メダル）を見て感動したんです。今でもとても尊敬している先生です。

—— どんどん柔道が強くなって、中学・高校では日本一、世界一にもなります。そこでもうひとつの夢、お医者様になる夢をかなえるには大学受験をして医学部に入らなければなりませんね。

朝比奈 高校3年生で医学部受験する時に、夏にはどうしても勉強時間が取れなかったので、冬休みには一日11時間机に向かっていました。

—— それだけ努力されたにもかかわらず、4年前は医学部受験に失敗してしまいました。

朝比奈 2月2日と3日、両日試験を受けて、合否の結果を見たのが地下鉄の南北線の中だったんですけど、両日ともダメだったって分かった瞬間に、人目もはばからず電車の中で号泣してしまいました。自分、めっちゃめっちゃ泣き虫なんです。

受験に失敗して東海大学の体育学部に入って、最

初はそれまでやってきた勉強と違うのに悩んだんですけど、4年間体育学部で過ごして、体育学部だからこそ見えてきたものがあるし、ここで得た経験を医学部に編入した時に活かせると考えられるようになりました。保健体育科の教員免許の取得も目指していて、先日教育実習に行つて生徒たちと触れ合つて感じたんですけど、教師も素敵な職業ですね。

**悔いの残る銀メダルから3889日。
あの敗戦があつたから強くなった。**

—— 中学3年生で16歳以下の世界一を決める「世界カデ」に優勝、高校3年生で21歳以下の世界一を決める「世界ジュニア」に優勝、そして大学4年生でアゼルバイジャンの首都バクーで行われた「世界選手権」に優勝して世界チャンピオンになりました。決勝の相手はキューバのイダリス・オルティス選手。延長戦になりましたね。

朝比奈 オルティス選手はロンドン・オリンピックの金メダリストでレジェンド中のレジェンドです。



人柄もとても素敵で、ライバルではあるんだけど大好きな選手です。柔道は指導3つで反則負けになるんですが、オルティス選手との決勝はお互い指導2つずつという状況で、「ゴールデ

ンスコア」という、どちらかが先にポイントを取った時点で勝敗が決まる延長戦に入りました。

前年のブダペスト世界選手権決勝はまったく同じ状況で、中国の于頌選手とゴールデンスコアの延長戦に入って、自分が指導を取られて負けて銀メダルで終わりました。その負けが悔しくて、絶対に同じ

負け方はしないという強い気持ちを持って攻め立てた結果、相手に指導が出て、金メダルを獲ることができました。前年指導を取られて負けた日から389日。389日間うまくいくことばかりじゃなかったけれど、やっぱりあの負けがあつたからこそ強くなれたのかな、成長できたのかなと思います。

——9月に世界チャンピオンになって帰国しますが、11月の「グランドスラム・大阪」で、日本の選手に敗れてしまいます。

朝比奈 素根輝選手という高校3年生の今すごい伸び盛りの選手なんですけど、準決勝の残り30秒、背負い投げで技ありを取られて負けてしまいました。

——柔道つてときどきこういうことがありますね。昔、斉藤仁選手が、「富士山はエベレストより高い」つて名言を言いましたけど、オリンピックで2度金メダルを獲った斉藤さんでも、日本に帰ってくると山下泰裕さんに勝てなかった。

朝比奈 バクーの世界選手権の前の4月の「全日本

体重別」「全日本選手権」では両方とも素根選手に負けて、自分は日本一になっていない。世界ランキングで世界選手権の代表に選んでいただいたんです。――素根選手には苦手意識がありますか？

朝比奈 4月の時はちよつとあつたような気がします。グランドスラム・大阪の時は苦手意識を克服できていたと思うんですが、世界チャンピオンにもなつて、今日は絶対勝てるというような、心の中の浮ついた部分に隙が生まれて投げられてしまったのかなあと思うんですね。次の4月にはまた直接対決になると思うんで、そこでは必ず勝てるようにしっかりと準備したいです。

――2019年は東京で世界選手権がありますね。
朝比奈 そうですね、2月のドイツ遠征から自分の2019年シーズンをスタートします。東京オリンピックを考えた上で2019の東京世界選手権というのはやっぱり獲つておかなきゃいけない試合になると思いますし、そこからは負けられない試合が続

いていきます。自分自身本当にしつかり追い込んで、ひと回りもふた回りも強くなないと、東京オリンピックの金メダルには届かないと思っています。

――そうすると当分はお勉強より柔道の方にバランスは傾きますか？

朝比奈 やっぱり現時点では東京オリンピックが迫っているので、柔道の方に少しウェイトを多く置いている状態ではあります。ただ予備校に通ったり、自分自身で独自に勉強も進めたりして、勉強もおろそかにならないようにしたいですね。

スポーツ選手は勉強しなくてよいといわれるが、勉強は自分自身の価値を上げるために必要なこと。

――トップスポーツ選手でお医者様になるつて、これまで海外の選手ではいたんですね。1980年のレークプラシッド冬季オリンピックのスピードスケートで、500mから10000mまで全5種目で金メダルを獲つたエリック・ハイデンは、その後自転車競技をやった後、整形外科医になりました。

オリンピックの競泳リレー種目で金メダルを8個獲ったジェニファー・トンプソンは麻酔科医です。だけど日本ではなぜかそういう人があられなかった。

朝比奈 やっぱり自分が思うに、日本っていう国のスポーツのレベルだったり医学のレベルは現状世界水準でトップクラスなので、どちらもレベルが高いからこそ現実的に両方目指すことが難しいんじゃないでしょうかね。

——それもありますけど、スポーツをやっている人間は勉強しなくていいっていう風潮があるでしょう。朝比奈さんは渋谷教育学園渋谷っていう超進学校に通っていらしたから、そういう環境じゃなかったのでしょうか？ 毎年東大に30人ぐらい入るような学校ですよ。

朝比奈 自分の代は浪人生も含めてですけど35人東大に入りました。

——そうするとやっぱり勉強するのが当たり前と

いう環境だったんですね。

朝比奈 そうですね。さつき高校3年の冬休みに11時間勉強したって話をしましたが、それが全然当たり前と言うか、まわりの同級生は夏休みも10時間ぐらい勉強していたので、自分はインターハイとかで夏に勉強できなかった分を取り返すのに11時間じゃちよつと少ないかな、ぐらいの認識でした。だから勉強すること自体は苦にはなってなかったです。

——日本のスポーツ選手って長く頭の中が筋肉で良いっていうような風潮が先輩から後輩に流れていくみたいなことがあったんですけど、朝比奈さんにはあんまり関係ないですね。

朝比奈 自分は結構現実主義者なんです。柔道はコンタクトスポーツ、人とぶつかることが多い競技なので、長くやれても女性では30歳ぐらいが限界。人生80年と考えた時に、30歳で引退してあと50年残ってる。その50年をどうするかっていうことをもう若い頃、小さい時から考えていたので、勉強するの

は必要なことだと。

——それは誰かに教わったことなんですか？

朝比奈 とくにそういうことはないですね。自分自身自分の価値というのを常に考えます。今は柔道選手としてそれなりに収入もいただいているし、いろんなところで良い思いをさせていただいています。が、じゃあ朝比奈沙羅という人間から柔道を引いた時に何が残るかということを常に考えている。自身自身の価値を上げていかないと、そう考えているので、スポーツ選手は勉強しなくていいという風潮があったとしても、自分はやっていたと思います。

自分には本当の最終的な夢というのがあって、ああ今日も良い日を過ごしたって、床についてそのまま死ぬのが夢なんです。だからそういう死に方をするためにどう生きたらいいかというのを……。

——考えてる？

朝比奈 はい。

——ほとんど武士道ですね。

朝比奈 本当にいつ死んでもいいやと思ってるし、いつ死んでもいいと思えるような日を過ごせるように心がけてはいます。

**3人の名医との出会いが
医師を目指す決意を育てた。**

——なるほど。朝比奈さんがお医者様を目指すようになったのには、素敵なお医者様たちとの出会いもあったそうですね。

朝比奈 自分の中では3人の名医がいるんですけど、一人目は田渕健一先生という整形外科の先生で、自分が腕を痛めて、捻挫だろう、といってそのまま練習を続けていたんですけど、その時に柔道にかかわるとても大事な骨の骨折というのを見抜いてくださった。

——捻挫じゃなかったんですね。

朝比奈 捻挫じゃなかったんです。自分の柔道人生を救ってくださった先生です。

二人目は金成道先生っていう今の主治医で、この

方も整形外科医です。足を骨折した時にいろんな病院で診てもらったんですけど、手術しようと言う方しかいなくて。自分としては、柔道は裸足でやるスポーツなので足の感覚をなくしたくないという思いが強くて、手術は絶対したくなかった。その中で、じゃあ手術をしないで根気強く治すという選択をしようかって提案してくださったのが金先生です。高校生の時からずっと診ていただいています。

三人目は先日お亡くなりになった聖路加国際病院の日野原先生。

——日野原重明さん？

朝比奈 はい。一度本物と言うかご本人にお会いして、その時に幸せを引きつけるオーラみたいなものを感じさせてもらいました。お医者さんってどうしても病氣だったり怪我を治せば良いみたいないところがあるんですけど、日野原先生は怪我や病氣だけではなくて、その人そのものを知ろうとしてくださる先生でした。

——この3月に大学を卒業される予定です。そこで医学部にお入りになるのか、東京オリンピックの後、2年後にお入りになるのか、医学部に入れば6年、そして国家試験を受けて、さらに2年以上研修医をされて、ようやくお医者さんになると30歳過ぎちゃう。そのあたり不安感とか焦りはありませんか？

朝比奈 時間がかかるのはしょうがないと言うか、必要な時間だと思えますので、何も異論はありません。本当にあと60年ぐらいの人生、まだ60年もあるという感覚なので、じっくり自分の夢と言うか自分のやりたいことに向き合っていこうと思います。

——私の小さい頃の夢はケーキ職人でした。また子供の頃からずっと本気でウルトラマンになろうと思っていた友人がいますが、彼がなったのは新聞記者でした。朝比奈さんの夢も変わっていくのかもしれませんが、夢をかなえた時、もう一度「セカンドキャリア・フォーラム」に来てください。

朝比奈 こちらこそ、ぜひお願いします。

第7回 スポーツ・ セカンドキャリア・ フォーラム

司会=長田渚左

松 修康
×
岸川登俊



日本野球機構の2018年のデータによれば、プロ野球選手の平均引退年齢は29.7歳、平均在籍年数は9.5年。子供の頃からのあこがれの職業、プロスポーツ選手になっても、現役生活はいつか必ず終わりを迎える。アスリートの引退後の第二の人生を考える本フォーラム、今回は同じ企業で働く元プロ野球選手2名に体験談を披露してもらった。

愚痴か溜息か舌打ちの現役時代

——本年度、第7回スポーツ・セカンドキャリア・フォーラムにはスピーカーとして、現在株式会社白寿生科学研究所に勤務されている元プロ野球選手お二人に来ていただきました。白寿生科学研究所は「ヘルストロン」という高圧電位治療器の開発、製造、販売を中心に、健康食品やサプリメントなども扱っている会社です。2013年に入社、現在事業開発部で働いておられる松修康さん、そして2018年9月入社の岸川登俊さんは人材開拓課の所属です。奇しくも現役時代はサウスポー、左投手でした。皆さん、子供の頃の将来の夢は何でしたか？

松 プロ野球選手です。

岸川 私もプロ野球選手です。

——お二人とも小さい頃からの夢を叶えられたわけですね。さて、松さんはプロ野球の現役時代、どんな選手でしたか？

松 自分は現役選手時代の7年間、ずつとうまくいわずに悩んでいました。愚痴か溜息か舌打ちか……そんな毎日でした。大学生までは何が何でもプロ野球選手になるって目標があつたんですけど、プロ野球選手になった瞬間に、一年でも長くできたらいやっていう、気持ちが弱い人間になつてしまったんです。毎日愚痴って、練習よりお酒の方に逃げているような人間でした。

——岸川さんはどんなプロ野球選手でしたか？

岸川 プロ野球に入っただけで小さい頃からの夢が叶ってしまったというところがありません。1年目の開幕から1年間一軍にいさしてもらつたんですけど、そこから上り詰めようというふうな向上心を持ってなくて。こういうものかと思つて続けていたら、どんどん新しい子が入ってきて、どんどん抜かれていつて、あれ、俺何やってんだろうって言つてる間にトレードに出される。そんな感じで何かあれよあれよという間に現役選手生活が終わつて

しまいました。

プロ野球を去る日がやってくる

——現役を終えられた後、岸川さんはジャイアンツで16年間バッティングピッチャー、打撃投手をおやりになった。打撃投手って1年間に3万球投げるそうですね。しかもバッターが気持ちよく打てるボールを投げなきゃいけないんでしょう？

岸川 そういうふうになると、何て言うか、自分の技術が狭まるんですよ。イップスとかにもなってしまうので、自分のフォームで投げればストライクが入るのだと、自分に言い聞かせるのが大事ですね。それが自信になってストライクが入る。そのストライクが入る球が良い回転になるので、バッターも気持ちよく試合の準備ができると、そういうふうには考えてました。そこで他人のためにって思って投げるとプレッシャーがかかって、その気持ちがボールに乗り移ってちょっとタレたり、ちょっと曲がつ

たり、そういうことが起きるんですよ。

——打撃投手として非常に評価が高かった岸川さんですが、それでもプロ野球選手をやめなければならぬ日が来ます。

岸川 私が43歳の時に、ジャイアンツが打撃投手は45歳までという定年制度をつくったんです。それで定年後の就職先もスポーツメーカーに決めました。ところが私、高橋由伸と10年間個人練習みたいなかたちでやらしてもらっていて、定年のタイミングがちょうど高橋が監督になる時だったんですね。監督





松 修康 (まつ・のぶやす) 1976 (昭和51) 年7月23日、神奈川県横浜市生まれ。宇都宮学園高から東北福祉大を経てドラフト2位 (逆指名) で99年、福岡ダイエーホークス入団。実働4年、59試合1勝5敗0S。2006～07年、横浜ベイスターズの打撃投手、08～12年、北海道日本ハムファイターズの打撃投手、08北京五輪日本代表、09WBC日本代表の打撃投手を務めた。左投左打

から力を貸して欲しいと言われて、決まっていた就職先も断って、結局もう2年ジャイアンツにお世話になりました。47歳の時にほんとの定年を迎えたんですけれども、さあそこからどうしよう。東京ガスで7年間社会人経験はありますが、普通のサラリーマン生活をしていないですから、パソコンも使えないし、何のスキルも身につけていない。持っているのは運転免許証ぐらいです。実際50歳手前の人間を雇ってくれる企業などなかなかないことを考えた時に、家族を養っていくには長距離トラックの運転手さんとか、それがダメなら交通整理とか、そういうところまで腹をくくりました。

——松さんの野球人生はいかがだったんですか？

松 選手をクビになった時には嫁のおなかの中に子供がいて、早く仕事探さないといけないと焦りました。たまたま横浜ベイスターズからバッテリーングピッチャーの話をいただいて飛びついたんです。ベイスターズで2年、その後ファイターズで5年。ファ

イタリズでは先輩たちがよく次の人生どうしよう、40歳過ぎたら職がないぞって言いながらお酒を飲んでいたんで、そろそろ考えないと思いつながら、結局真剣に考えないで過ごしてしまいました。

だからファイターズをクビになった時にはパニックって、頭真っ白になりました。2012年のことですが、この年はリーグ優勝してジャイアンツと日本シリーズを戦って、東京ドームで負けてシーズンが終わって、数名はそこでクビを宣告されたんです。マネージャーに、「俺、大丈夫？」って聞いたら、「松さんの名前は入ってないんで、明日の朝みんなと一緒に飛行機で札幌に戻ってください。そこで解散です」と。当時横浜に住まいがあつて、嫁には、「今年も大丈夫。優勝旅行はハワイらしいよ」って言うて、次の日札幌ドームに着いてクビを告げられました。

「野球しかない人生」というレール

——トップスポーツ、エリートスポーツをやっている人は必ず終わりが来ます。Ｊリーガーの現役生活は平均6年、25歳ぐらいでいたい終わるし、プロ野球はそれより4年ぐらい長いんですけど、必ず終わりが来ます。その前に少し勉強するとか、何年か先に終わることを想定して今から何か準備するとか、そういうことは考えられませんでしたか？

松 僕が今思っているのは、少年野球や高校野球の指導者やまわりの大人たちが、僕らを野球だけの人生、野球しかない人生というレールの上に乗るよう仕向けてきたということです。ほかのスポーツや勉強も一生懸命やりながらではなく、野球だけに集中しろと言われ続けてきた。高校生になると野球だけやっていて勉強しなければやっぱリテストで点数取れないですよ。点数取れないと、お前はバカだと言われて、だんだん自分でもそう思うようになる。



岸川登俊（きしかわ・たかし）1970（昭45）年1月30日、東京都大田区生まれ。88年、安田学園高を卒業し東京ガスに入社。ドラフト6位で95年、千葉ロッテマリーンズ入団。98～99年、中日ドラゴンズ、2000～01年、オリックス・ブルーウェーブに在籍。実働7年、87試合0勝4敗0S。02～17年の16年間、読売ジャイアンツの打撃投手を務める。左投左打

——ある意味勉強しなくても人生の扉がバンバン開いちやった世界ですからね。

岸川 正直勉強する時間がなかったですね。私の場合は朝6時に起きて、練習で疲れ果てて家に帰ってくるのは11時ぐらいでしたから、それからご飯食べてお風呂入ったらもう12時超えてしまう。授業中ずっと起きていたら身体がもたないです。

松 ホークスに「六法全書」を読んでいるチームメイトがいました。でも、お前は野球に集中してないからダメなんだって、それを否定する指導者もいましたね。僕はホークスに入ってきた外人選手とよく食事したんですけど、彼らは人生よく考えていて、日本で稼いで、田舎の牧場で一生バードウォッチング、バードハンターになって暮らすんだってやつもいましたし、一番仲良かったのはズレータっていうドミニカの選手ですけど、「俺はドミニカに帰った時に一生遊んで暮らせるだけのお金を日本で稼ぎに来た。お前は何のために野球をやっているのか？」

って彼に聞かれて、僕は答えられませんでした。城島（健司）は釣りが大好きで、現役時代から、引退したら俺は釣り師になってテレビで釣りの番組持ったって言っていて、今実現させていますよね。だから考えてるやつは誰に言われなくても考えてる。僕は何とかなるだろう状態でしたね。

——ここで角度を変えて、採用する側にお話を聞きます。白寿生科学研究所には複数の元プロ野球選手やほかのスポーツのトップ選手が働いておられますが、副社長の原浩之さん、彼らには会社員として特別な何かがあるのでしょうか？

巡りあいとマインドセットの大切さ

原 野球以外ではセパタクロ、ラクロス、アルティメットのトップ選手を採用していますが、たとえばセパタクロだったらいきたい高校時代までサッカーをやっていて、大学に推薦で入れないようなレベルの選手が転向してトップになることが多いんで



す。彼らはこの競技だったらトップになれるかもっていう目で競技を探してトップになっている。だからマイナーな競技の日本代表クラスは頭が良いです。仕事もすぐ覚えます。

一方元プロ野球選手は「鰻」という漢字が読めなかったり、「ボージョレヌーボー」を英語読みしたり、大変なエピソードばかりですけど、甲子園やプロ野球の大きな舞台で頂点に立ったり敗北や挫折を経験しているからでしょうか、総じて人に伝える力に優れている。一生懸命お客様に語りかける時の説得力

は大きいです。2006年に都城高校のエースだった元ダイエーホークスの田口竜二を採用してから間違いなく戦力になるのが分かって、現在在社しているプロ野球OBは7名です。

今日の3人の中で一番長く働いてくれているのは松ですが、日本シリーズが終わった翌日に札幌で戦力外通告を受けて、帰ったらすべてがなくなっている、嫁さんにも言わなきゃいけない、新千歳空港で泣きながら最終便まで飛行機ずらしたっていう話をフェイスブックに書いたのをホークスの先輩でもある田口が見て、「どうしたの、松？」って声をかけた。田口に会いにうちの会社に来たら、ホークスの球場に置いてあった「ヘルストロン」があつて、「どうしてここにあるんですか?」「うちの会社の製品だよ」っていうところから縁を感じて入社することになったんです。ところがその後イーグルスからバツティングピッチャーで誘われて、ああ行っちゃうかなと思ったんですけど、そっちを断わって、思い

のほか強い気持ちで入ってきてくれました。

松 正直パソコンの電源の入れ方からして分からなくて、隣の社員に、教えてもらおうところから始めました。野球しかない人生のルールに乗っけて、いざ野球をあきらめないといけないという時に、僕が田口に巡りあつたように、社会人で活躍している人、いろんなセカンドキャリアの経験者に巡りあえるかっていうのがすごい大事なのかなと思います。

もうひとつ思うのは、野球しかやってこなかったとか、何々しかしてこなかったことがどうしてもネガティブにとらえられるんですが、僕は、「それって何かに長けてるってことでもあるんだ」と言いたいんですね。「他の人にはできなかったことが君にはできた。そのことには自信を持つていい。それに代わる何かを考えよう」って。第一の人



原浩之副社長

生、野球で輝いた。じゃあ次の人生も何かで輝こう
ということですね。

岸川 昨年9月に入社して、働いています。この春
に巣鴨店で研修をさせて頂いて、初めてお客様に
「有難う」って言っていたきました。バッティン
グ・ピッチャー時代も選手たちに「有難う」って言っ
てもらえるのがすごい励みになりました。人の役
に立つ仕事、私は好きですね。

（本稿は2019年11月27日に東京・渋谷区ハクジュホー
ルで行われた「第7回スポーツ・セカンドキャリア・
フォーラム」を構成して、2020年3月11日に刊行し、
2024年に再編集しました）

セカンドキャリアで成功するⅡ

キャリアはつながっている

取材・構成 川本凜太郎



バンコク・アジア大会の柔道女子48kg級決勝で真壁友枝は北朝鮮のチャ・ヒョニョンを破り金メダルを獲得(1998年12月7日、タイ・バンコク)



1998年アジア大会(タイ・バンコク)柔道女子48kg級の金メダリスト、真壁友枝さん(48)は現在、三井住友海上火災保険株式会社に岡山支店津山支社長の重責を担っている。現役時代はあの谷(旧姓田村)亮子の好敵手として、名勝負を繰り広げたトップアスリート。引退後は所属する三井住友海上女子柔道部のコーチを経て、会社に残って社業に専念する道を選んだ。真壁さんにアスリートの“第2の人生”について聞いた。

真壁 友枝(まかべ・ともえ) 1974(昭49)年11月28日、岡山県勝央町出身。小2から柔道を始め、岡山東商高2年で全国高校選手権48kg級優勝。卒業後に三井住友海上入社。48kg級で98年全日本選抜体重別で準優勝。同年のアジア大会で金メダル。02年の全日本選抜体重別で初優勝を飾った。03年の引退後、08年まで柔道部でコーチ。同年に一般社員として岡山支店津山支社に配属。東京本社勤務を経て、現在は津山支社長。

真壁さんは津山支社長に就任して、今年で3年目を迎えた。中国地方に点在する約25の支社のうち、女性の支社長は現在3人。支社長就任当時は真壁さん1人だけだったという。会社の高い評価と信頼の証でもあるが、本人は笑って謙遜する。

真壁 支社長が向いているとは思いません。私に任せてくれた勇気ある上司に本当に感謝しています。その想いと期待に応えないといけない、応えたいという気持ちで日々仕事に励んでいます。

周囲の話では津山支社で営業で好成績を収めて表彰されたという。その後、社内のチャレンジ制度を利用して東京本社の営業推進部にも勤務。まだ「女性の内務」という意識が強かった時代から、厳しい営業畑でキャリアと実績を積み上げてきた。

真壁 2008年に東京から地元津山に戻ってからは、私もずっと事務職でした。4年目くらいから「女性も営業を」という方針になって、私が支社の女性で一番年上だったこともあり、5年目から営業

担当として外に出るようになりました。

あらゆる業種を通じて営業職は、ノルマのある『過酷な職種』の代表格と言われる。精神的に耐えられなくなつて、離職を選ぶ人も少なくない。真壁さんもその厳しさに直面した。

真壁 優先順位を間違えたり、商品の内容を聞かれて答えられなかったり、調べるのに時間がかかったりと、とにかく失敗だらけで、自分の情けなさ、ふがいなさをかみしめる毎日でした。「当たり前」ができない現実が、精神的にも苦しかったですね。

辞めたいと思ったことは「いっぱいありました」と即答した。それでも、翌日はまた営業の現場に足を運んだ。

真壁 与えられている責任は果たさなければいけない、その思いだけでした。自分が嫌だからといって、お客さんとの約束は当然のことながら、これまでもたくさんの方々に散々迷惑をかけているうえに、さらにそれを途中で投げ出すということはできなかった

た。何よりも私には何をやっても「三井住友海上女子柔道部」という看板がついてきます。いいことも悪いことも。「柔道部に迷惑をかけられない」という想いも常に私の意識の中にありましたね。

夢と正社員

岡山県美作市で生まれた真壁さんは勝央町に移り、転校を機に小学2年の時にスポーツ少年団で柔道を始めた。岡山東商業高校2年の全国高校選手権の48kg級で優勝。大学からの勧誘もあったが、卒業後は女子柔道部のある三井住友海上に入社した。

真壁 岡山で行われた都道府県対抗の団体戦で、東京都代表が全員、三井住友海上の選手だったことがあり、すごくクールで強くてかっこよかった。恩師に紹介していただいた北田典子先輩（旧姓持田・87年世界選手権61kg級銅メダル）にも憧れました。

もう一つ、入社前の会社訪問で「この会社に入りたい」と、心に決めた出来事があった。

真壁 会社訪問をさせていただき、面談していただきました。その際の会社の方たちのお話が、給与や条件面などのお金や環境のお話ではなくて「どんな選手になりたいのか」「オリンピックを目指すのか」といった夢を尋ねてくれたのがとても印象的でした。「応援してくれる会社」というところに惹かれ、どうしても入社したいと監督にお願いました。

三井住友海上はアスリートも正社員として採用する。午前中は一般の社員と同じように会社に出勤して、所属部署で仕事をこなす。真壁さんはその会社の方針が、今につながっているという。

真壁 最初は営業を統括する東京営業推進部で、その後は人事部の能力開発チームに異動し、研修の資料をつくったりしていました。今思うと会社で勤務するということが、すごく大事だったと思います。満員電車に乗って通勤したり、職場の方々とコミュニケーションを取ったりして、社会とつながりを持てた。あの経験がなければ、競技生活を終えて、す

ぐに社会の生活に慣れるのは難しかったのではないかと思います。

柔道部の柳澤久監督（当時）も、社会とのつながりを持つことを重視していた。柔道の稽古とともに、歴史の講義や漢字のテストなども取り入れた。眞壁 稽古の前後に先生の講義があったり、夏休みに『五輪の書』を読んで読書感想文を書きなさいとか。柔道だけじゃなくて、本を読んで学んだり、考えたりすることを習慣化させてもらいました。その経験は今でも役に立っていると思います。

96年のアトランタ五輪で先輩の恵本裕子が、日本女子柔道界初の金メダルを獲得した。その後、専用の道場も完成。眞壁さんにとって五輪は、夢から目標へと変わり、日本のトップ選手へと駆け上がった。48kg級で96、97年と全日本実業選手権を連覇。98年にはアジア大会で金メダルも獲得した。しかし、五輪には手が届かなかった。

最強ライバルと覚悟

同じ時代に1歳年下の谷（旧姓田村）亮子がいたからだ。48kg級で五輪で金2つを含む5大会連続メダルの偉業を達成した、日本柔道界を代表する絶対女王の時代だった。不運な巡り合わせとも言えるが、眞壁さんは「幸せな時代だった」と振り返る。

眞壁 数年前に同じ48kg級の後輩、近藤亜美（14年世界選手権優勝、16年リオデジャネイロ五輪銅メダル）に「谷選手はやっぱり強かったですか？」と聞かれて、私もそういう時代を過ごし、戦っていたんだ、幸せな時代だったなと思いました。田村（谷）を倒すことだけを考えて大会に臨んだら、1回戦で負けてしまったこともありました。上を目指すには、まず目の前のことに全力を尽くすことの大切さも学びました。

谷とは4度対戦して、1度も勝てなかった。98年の全日本選抜体重別選手権、99年の福岡国際は、い

ずれも決勝で敗れた。しかし、谷と同じ時代を生き
た経験は、今の仕事にも活かしているという。

真壁 今振り返ると、田村を本当に倒すという覚悟
で臨んだのか、というところまでの覚悟はなかった
のではないかと思います。98年のアジア大会に出場
した時、田村が背負っているものの大きさを感じま
した。もし自分が代わりに五輪や世界選手権に出
て、金メダルを取る覚悟があるのだろうか。その
時、与えられた役割、責任を果たすことの重要性を
感じたんです。その思いは今の業務にもすごく活
きています。この仕事を任されている以上は、投げ出
すわけにはいかない。選ぶ側にも選んだ（任せた）
責任があつて、選ばれた側には選ばれた（果たす）
責任がある。その覚悟を持たなければいけない。と。

選択と資格

真壁さんは03年に現役生活に幕を下ろした。その
後もコーチ兼マネジャーとして柔道部に残り、女子

52kg級の世界王者で五輪銅メダリストの中村美里ら
を指導した。一方で合宿の空いた時間などを活用し
て、多くの資格を取得した。

真壁 コーチ業は難しかったです。昨日まで選手同
士だった関係から、選手とコーチになり、立場が変
わっても、基本は人と人。接し方や伝え方を含め、
もっと勉強し、人としての幅を広げなければいけ
ないと思いました。また、コーチ業も永続的に続ける
ことはできない、辞めてから次へスタートしても遅
いと思って、今のうちにいろんな資格を取ろうと考
えました。損害保険や生命保険の資格はもちろん、
興味のあるカラーコーディネーター、アロマコー
ディネーターなどの資格を取りました。やりたいこ
とが具体的にあつたわけではなくて、自分の幅を広
げるためでした。

08年の北京五輪後に柔道部を退部。コーチ時代に
さまざまな資格を取得していたが、真壁さんが第2
の人生に選んだのは、所属する会社で社業に専念す

ることだった。

真壁 その時、もう33歳でした。地元の津山に戻って再就職するのか、東京で再就職を探すのかなどいろいろ考えると、やはりこの年齢でゼロからスタートするのは厳しいと思いました。そもそも再就職先があるかどうかも分からないですし、特にやりたいことも見つからなかった。同じゼロからスタートするのなら、お世話になった会社に戻返しができればいいなと考えました。

日本のトップアスリートは、現役を引退すると所属企業も退社して第2の人生を歩むケースが圧倒的に多い。しかし、アスリートも一般社員と同じ正社員として雇用している三井住友海上は、引退後も出身地などで一般社員として仕事を継続することを推奨していた。

真壁 津山に帰る前に代理店向けの研修に参加させていただいたり、いろいろとサポートしてもらいました。本当に会社と周りの方々に恵まれたんだと

思っています。

チャレンジと役割

現役時代も東京本社で業務経験はあったが、津山支社で働いてみると分からないことが多かったという。損害保険の資格は持っていたが「すっかり忘れていた」。『元柔道アジア王者』の看板など通用しない世界。「本当に毎日が勉強という感じでした」と振り返る。そんな息つく余裕のない日々の積み重ねで、いつの間にか14年が過ぎていた。

真壁 入社を希望した「夢を応援してくれる」社風は、一般社員として勤務してから一層感じています。職場の皆さんが、できない私に根気強く付き合っている、指導してくれた。キャリアビジョンを描き、「こうなりたい」と言えば、それを応援してくれる環境がある。こんな私に期待してくれる上司もいれば、こんな私を支えようと頑張ってくれる仲間もいる。正直、今の仕事が自分に向いているかどうかなんて

分かりません。与えられた役割を果たそうと必死に頑張り、頑張り切った先が、誰かの役に立てていたら、よかったと思います。選んだ道が成功なのか、失敗なのかは後にならないと分からないですし、それも自分の捉え方と頑張り次第だと思っています。失敗も迷うことも、たくさんありますが、何事にもチャレンジし、一歩踏み出すことで、どんどん違うものが見えてくる。それは柔道のキャリアでも同じです。五輪に出られなくても、世界を目指して頑張ったことは、無駄ではなかったし、勝てなかったことで逆に成長できたと思う。この経験は自分の糧であり、私にしかない経験として、引き出しになっていると思います。

アスリートの引退後の人生は『セカンドキャリア』と呼ばれる。しかし、真壁さんのキャリアをたどると、現役時代の柔道部での生活、会社での勤務経験、谷亮子という高い壁……現役時代から続くあらゆる経験の積み重ねが、見事に一つの人生として

つながっている。

真壁 現役生活が終わったから柔道人生が終わりじゃなくて、ずっと続いていくものだと思います。柔道という経験を積んで、次のステージに向かうというだけで、経験してきたすべてのキャリアが、現在の自分の価値につながっているんだと思います。今も自分の幅を広げるために、1年に1つの資格取得を目指しています。でも、やはり一番の頑張るモチベーションは柔道部の選手の活躍です。頑張っている姿を見るとすごく励みになるし、勇気をもらいます。だから私も、選手たちに少しでも還元できるように、これからもチャレンジを続け、私にできること、私にしかできないことを、頑張っていきたいと思っています。



三井住友海上火災保険株式会社は、30年以上にわたりスポーツ界の第1線で活躍する選手の育成に取り組んできた。女子柔道部は金メダルを獲得した惠本裕子、上野雅恵、新井千鶴ら多数の五輪メダリストを輩出。女子陸上競技部も土佐礼子、渋谷陽子らが五輪に出場している。スポーツ支援の理念と意義について、人事部の木山和彦スポーツ振興チーム長に聞いた。



木山和彦

——1989年に女子柔道部、91年には女子陸上競技部を創設。長くスポーツ活動を支援しています。企業としてどんな価値を見いだしているのですか。

木山 『チャレンジ精神』『あきらめない姿勢』『わくわくする心』といったスポーツの持つ意味は、グローバルな保険・金融サービス事業を通じて、安心と安全を提供し、活力ある社会の発展を目指すという弊社の経営理念と通じるものがあります。それがスポーツ振興に取り組み私たちの根底にあります。

——具体的にどんな取り組みをしていますか。

木山 『社会人として一流を目指す』『地域との交流』『社員・代理店一体となった応援』という3つの柱

があります。今回のテーマでもあるセカンドキャリアという観点で考えると『社会人として一流を目指す』が、大きな軸になりますね。

——『一流のアスリート』ではなく、なぜ『一流の社会人』のですか。何とも渋い言葉ですね。

木山 社会人として一流という言葉の概念は難しいものですが、あえて1番目の柱として掲げているのは理由があります。弊社のアスリートは全員正社員で雇用しています。各部署で仕事をしながら競技に取り組んでもらうことが大前提。これは30年以上変わっていません。トップ選手になれば競技団体からの大会派遣や、代表合宿への参加の依頼がきま

す。その時は競技活動を優先させますが、それ以外はメダリストでもみんな同じ。コロナ禍により、在宅勤務は増えたものの、電車に乗って会社に出勤しています。競技によつて少し異なりますが、一般の社員と同じ午前9時出社で、アスリートの勤務時間は正午までの3時間。午後からは競技活動に専念できます。14年に発足したトライアスロン部、パラアスリートや女子サッカー、女子ラグビー、卓球の選手もいますが、全員職場で勤務しています。

——近年は企業に所属していても、競技だけに専念しているアスリートも多いです。企業とスポンサー契約を結んで、金銭面の支援だけをしてもらうケースも増えています。

木山 競技だけ、スポンサー契約だけとなると、候補は有名選手に偏つてしまい、育成という話ではなくなります。それは弊社にはなじまない。オールドスタイルかもしれませんが、まず社会で通用する考え方や知識を身に付けて、社会人としての土台を築

いた上で、競技も強くなつてほしいというのが基本方針です。勤務時間も3時間程度と限られているので、練習できないから勝てないというのは言い訳になりません。競技に専念しなければ五輪やパラリンピックに出場できない、メダルが取れないというわけでもない。弊社の今までのオリンピックやパラリンピアン、メダリストの存在が裏付けになっていきます。

——柔道女子48kg級でアジア大会を制した真壁友枝さんも、満員電車に乗って勤務したことで、社会とのつながりが持てたと話していました。

木山 一般社員と一緒に働くことで、業務だけではなく、例えば立ち居振る舞いや、電話の対応も含めて、すべてが勉強になりますし、様々な刺激を受けます。一方で同じ職場の社員も、一緒に働いている選手が大会で優勝したり、メダルを取ったりすると、『お互い頑張ろう』という相乗効果も出ます。

——そういえば三井住友海上は、社員などで構成す

るアスリートの後援会組織『ガッテンダーズ』が有名で、競技会場では社員や代理店の皆さんと一緒に大勢で応援されています。

木山 同じ会社でも、馴染みのない選手が大会に出場するとしても、なかなか応援に行く気持ちにはなれないと思います。しかし、ふだん職場で机を並べて働いている身近な同僚が、大会に出場するとなれば、自然と応援したいという気持ちが高まってきます。そこから応援の輪がどんどん広がって、うねりになっていくのかなと感じています。

——『一流の社会人を目指す』という言葉で思い出すのは、女子柔道部の創部以来の指導方針です。柔道の稽古だけではなく、読書感想文を書かせたり、漢字のテストをしたり、歴史の講義をしたり、いろんな学び、勉強をさせているのが印象的でした。

木山 女子柔道部は週1回、講師を呼んで英語の勉強もしています。女子陸上競技部でも同様に勉強会を行っています。

——アスリート教育が会社全体にしつかりと根付いているんですね。

木山 人事部でも毎月1回、所属する40人のアスリートに研修を実施しています。毎回いろいろなテーマを選定し、講師を招いています。これは、社会人として、アスリートとして成長してもらうための教育です。

——アスリートを人事部と広報部が2本柱でサポートしているのも特徴的です。採用、育成は人事部、広報は社内外PRと役割を分担しています。

木山 私たち人事部が年に1〜2回、アスリートと面談して、競技や職場での活動や、希望や悩み、セカンドキャリアを含めた将来設計などを聞いて、会社としてどんなサポートができるかを考えます。

——セカンドキャリアのお話が出ましたが、引退すると所属企業を辞めるアスリートが圧倒的に多い中、三井住友海上では継続雇用を推奨しています。

木山 そこに大きな意味があります。アスリートは

引退後の人生の方がずっと長いので、現役中から会社で仕事をして、そこで培った考え方や知識を生かして、引退後も本業での仕事をしてほしいと考えています。もちろん退社して新しい道に進む方もいますが、会社に残って頑張りたいという方は、全員に仕事を担ってもらう用意があります。正社員で採用しているのは、そういうメッセージでもあります。

——特徴的なのは引退後に故郷に戻って、地元のお店で働き続けられることです。

木山 幸いなことに弊社には全国各地に支店などの事務所があります。引退後は出身地の実家などから通える所で働いてもらうというのが基本的な考え方はです。勿論、状況によって柔軟に対応しています。

——真壁さんが岡山支店津山支社の支社長として活躍されていますが、引退後も継続して働いている方は何人くらいいるのですか。

木山 約30年間で170人ほどアスリートを雇用してきました。少し古いデータですが、現時点で会社

に残って業務についているのは、25人ほどです。

——96年アトランタ五輪の柔道女子61kg級代表の恵本裕子さんが、五輪前に「金メダルを取ったら専用の道場を作って下さい」と社長にお願いして、本当に金メダルを獲得した。そうしたら彼女の希望通りに道場ができた。とても印象に残っています。

木山 女子柔道部は『女性活躍』という観点も大切に行っている経緯もあります。それまで道場がなく、出稽古やビルの一室で練習していたので、より環境を整えることで、女性活躍の幅をさらに広げようという考えだったのだと思います。女子柔道部はこの時に建てられた道場で今も練習を行い、何人もの五輪メダリストを輩出しています。

弊社はスポーツ支援を経営の一部として考えていますから、いい時も悪い時もしっかりと寄り添って続けていくという考え方があります。それが企業が果たす社会貢献の一つの形だと思っています。

セカンドキャリアで成功するⅡ

プロ野球界から初の公認会計士——

奥村武博

**「この世で唯一超えられない壁は
自分でつくる壁です」**

構成 川本凜太郎



阪神タイガースの元投手、奥村武博さんは、元プロ野球選手として初めて公認会計士になった。1997年のドラフト6位で阪神に入団したが、一軍公式戦出場を果たせず、わずか4年で戦力外通告を受けた。引退後は飲食業を経て、公認会計士試験に挑戦。9年の歳月をかけて合格した。野球一筋の元プロ選手が、なぜ難関の資格を取ることができたのか。どんな苦労があったのか。そして、その人生経験をふまえた「デュアルキャリア」の考え方について語ってもらった。

奥村 武博（おくむら・たけひろ） 1979（昭和54）年7月17日、岐阜県多治見市生まれ。土岐商業高校時代は投手として夏の県大会準優勝。卒業後、97年のドラフトで6位指名を受けて阪神タイガースに入団。98年はウエスタン・リーグ5試合に登板して0勝2敗。その後は故障などで一軍出場経験のないまま01年に戦力外通告を受けた。13年に難関と言われる公認会計士の資格試験に合格。14年に優成監査法人入所。17年に公認会計士登録。一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構の代表理事も務める。



阪神タイガース新入団選手発表会に臨む奥村武博氏(後列左端)、
前列左端は井川慶氏、後列左から3人目が坪井智哉氏(1997年12月18日、大阪市内のホテルで)

公認会計士の奥村です。以前はプロ野球の阪神タイガースの投手でした。引退後、いったんは飲食業の道に進みましたが、その後、9年という長い歳月をかけて公認会計士の資格試験に合格しました。現在は会計士の資格を生かして、野球、サッカー、陸上、バレーボールなどの現役選手に対する財務面のコンサルティングや、引退後に起業を目指す選手や競技連盟などの財務面のサポートをメインに仕事をしています。一方で2017年10月に一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構を設立して、代表理事をしています。後で詳しくお話しますが、この機構の活動を通じて、これまでの私の経験をふまえた引退後のキャリア形成への取り組み『デュアルキャリア』という考え方を、アスリートやスポーツに関わる人たちに広めていきたいと思います。

私は野球を始めた幼稚園の頃から将来の夢はプロ野球選手になることでした。中学3年の秋、地元の岐阜県立土岐商業に甲子園出場経験のある監督が就

任したと聞いて、その高校への進学を決めました。当時は商業高校が何を勉強する学校なのかも知りませんでした。が、結果的にその選択がずっと後になって、今の仕事と結びつくことになります。

チャンスと戦力外通告

夏の高校野球県予選は高校2年が準決勝、3年は決勝で敗れて、結局、甲子園には出場できませんでした。私は身長が190cm近くあるのですが、それほど球速のある投手ではなく、コントロールを武器に打たせて取るタイプだったので、プロになれるとは思っていませんでした。ところが、夏の大会が終わった3年の秋、監督から「タイガースから指名の話がきている」と聞かされ、1997年11月のドラフト会議で6位指名されました。すでに就職も決まっていたため、親をはじめ周囲にはプロ入りに反対する人が多かったのですが、小さい頃から憧れていたプロ野球選手になれるチャンスですから、反対を

押し切って入団しました。

ドラフト同期には後に阪神のエースからヤンキースに移籍した私と同じ高卒の井川慶や、東芝から入団した坪井智哉さん、他球団では前巨人監督の高橋由伸さんがいました。新人ながら一軍で活躍する選手がいる一方で、私は1年目の98年半ばに右ひじを痛めて、オフに手術を受けました。翌99年はずっとリハビリで、ウエスタン・リーグ最終戦で1イニング投げただけでした。

その年の秋のキャンプでたまたまコントロールの良かった私の投球を見た野村克也監督に、「小山正明2世」と、阪神の往年の名投手になぞらえて評価していただきました。それが功を奏したのか3年目は春季キャンプから一軍に帯同して、オープン戦でも2試合に登板させてもらいました。ただ結果的にここが私のキャリアハイになりました。開幕戦は二軍で迎え、その後に肋骨を骨折して再びリハビリに専念。4年目の01年には右肩を痛めて、シーズン終

了後に戦力外通告を受けました。

結局、私のプロ生活は一軍公式戦の出場もなく、わずか4年で終わりました。戦力外になるときは本当にあっけなかった。球団幹部に寮の一室に呼び出されて「来季は契約しません」とお決まりの言葉を告げられました。ほかにも何か話したとは思いますが、その一言だけで頭が真っ白になって覚えていません。その後、1年間は打撃投手として球団に残りました。打者が打撃練習をするときに投げる投手です。打撃投手は打たれるために投げるのですが、自分はどうしても打たれたくないという意識が働いてしまう。結局、その打撃投手も1年で戦力外になりました。

このときは、このまま肩の痛みを抱えたまま野球界にしがみついても、選手として復活することも、打撃投手を長く続けることも無理だろうと自分でも感じていました。同年代と比べても、4年間大学に行って、1年間浪人したくらいの年齢なので、早い

うちに外に出た方がいいだろうと考えて、野球界から完全に離れることを決断しました。

しいたけとメロンで一年

引退後に始めた仕事は飲食業でした。一般的にも野球選手のセカンドキャリアとして飲食業をイメージする人が多いと思います。引退する選手にとっても、もつともイメージしやすい職種です。自分もそうでした。なぜかというと現役時代に野球以外の世界で一番接点が多いのが飲食業界だからです。

引退してすぐに友人とバーを経営したのですが、その後、ホテルの調理場に職を変えました。就職面接のときにはタイガースの元投手という経歴を言わず、履歴書にも書きませんでした。そうすると社会では、最終学歴が高卒で、卒業後めばしい職歴もなく4、5年を過ごした22、23歳のフリーターという扱いになります。そうなる仕事はもう単純作業しか与えられません。先輩が隣でガバツと割ったメロ

ンの種をかき出したり、しいたけの軸をちぎるといった作業を1年延々繰り返すわけです。

なかなか辛い仕事だったので、メロンの種をかき出す手の動きはカーブを投げるときに似ているなとか、しいたけの軸を取るのはスライダーやな、などと思い描きながら作業をしていました、その一方でこの仕事をずっと続けて自分の将来はどうなるんだろうかという不安感が募り、そして野球選手という肩書がなくなったときの自分の無力さを痛感させられました。

総額約60億円と1日7000円

高校時代はずっと野球をやっていたのでアルバイトの経験もない。だから履歴書の書き方も分からないう。タイガース時代は寮生活だったので、水光熱費などの目に見えないお金を意識したこともなかった。本当に世間を何も知らなかったし、社会生活を営むための知識やノウハウは何もなかった。でも大阪で

仕事をしていて、いくらタイガースの元選手という肩書を隠しても、さすがに気づかれるだろうと思っていたのですが、これがまったく気づかれない。自分は圧倒的な無名選手でした。この先、どうしようかと不安ばかりが募ってきました。

私が社会に出た03年、ずっとBクラスだったタイガースが18年ぶりにリーグ優勝しました。この年に20勝5敗の大車輪の活躍をしたのが私の同期だった井川慶でした。日本を代表する投手になった同期の活躍にうれしくなる一方で、同じスタートラインに立っていたのに自分は何をしているんだ、わずか数年でこの差は何なんだと、今の境遇と比較して自分がどんどん置いていかれるような焦燥感がこみ上げてきました。タイガースは05年にもリーグ優勝して、翌06年に井川は総額約60億円でヤンキースに移籍しました。一方で自分はひたすらメロンの種をかき出し、しいたけの軸をちぎる。それで1日7000〜8000円。彼が投げる一球より少ないかもしれないな

い……いろんなことが頭をよぎり、この時期は本当にどん底でした。

この生活から抜け出すには、何かを変えないといけないと思いました。でも結局、思いつくのはホテルがダメなら次はカフェなど、発想が飲食業から抜け出せない。それはなぜかという世の中にはどんな仕事があり、どんなことがお金になるのかをまったく知らなかったからです。そんなとき、ある人から分厚い資格のガイドブックを渡されました。「資格を取りなさい」というわけではなくて、「まずは視野を広げなさい」と言われました。

習慣と三振

そのガイドブックで公認会計士という資格を見つけたとき、私の昔の記憶と結びついたんです。それが高校時代の簿記の学習経験でした。高校は商業高校だったので、卒業までに簿記検定2級までは取るという暗黙の了解がありました。検定試験に受から

ないと、野球部の遠征に連れていってもらえなかった。だから簿記はしつかりと勉強しました。自分でも簿記は嫌いではなく、授業も真面目に受けました。その経験があつたので公認会計士の資格に挑戦しようと思ったのです。

ご存じの通り公認会計士は難関資格です。長い挑戦になりました。すぐに資格予備校に申し込んで、アルバイトをしながら勉強を始めたのですが、そもそも高校を卒業してから長時間机に向かって集中して勉強する経験がなかったので、まずその習慣をつけることに非常に苦労しました。何しろプロ野球選手頃は新幹線で2時間座って移動するだけでも苦痛でしたから。だから毎日何時間も座って勉強できるまでかなり時間がかかりました。それでも、日商簿記検定の1級に合格したり、ちよつとした成功体験が重なって成果を感じるようにはなりました。最初は大阪でアルバイトをしながら勉強していたのですが、その後、東京の会社で正社員として働きなが

ら受験勉強を続けました。

そして、09年に短答式試験に合格しました。公認会計士の試験には短答式試験と論文式試験の2段階があります。短答式試験に合格すると2年間に論文式試験を3度受けられます。これを全部不合格になることを『三振』と言います。11年に私は『三振』してしまいました。もう一度、短答式試験からやり直します。「野球選手が三振したらあかんやろ」などと散々周囲から揶揄^{やゆ}されて、もうあきらめようと思つたこともあります。でも何とか思い直して、勉強への取り組み方を見直して、2年後の13年11月に合格することができました。プロ野球選手を引退して12年、勉強を始めてから9年。まさに9回裏のサヨナラ満塁ホームランでした。

共通点と合格

『三振』した私がなぜ2年後に合格できたのか。もちろん一秒も無駄にしないようにストイックな生

活環境に変えて、猛勉強しました。ただ、この2年間で一番大きく変わったのは、スポーツと勉強の共通点に何となく気がついて、発想の転換ができるようになったことです。野球で培ったことは勉強にも生かせるようになる。飛躍的に成績が伸びたのです。に取り入れることで、

具体的に説明すると、スポーツと勉強はどこが共通しているかというところからなんです。例えばスポーツ選手は一回失敗したら、なぜ失敗したのかを考えて、修正してもう一度トライする。それを繰り返すことで成長します。例えばビジネスの世界でもPDCAサイクルという同じような手法があります。目標を設定して、予算を決めて、活動を始める。目標に到達しなければ原因を分析して、やり方を修正して、再び目標へ向かって活動する。それを繰り返すことで業務が改善されます。受験勉強のサイクルも同じなんです。模試を受けて、間違えたら復習して、修正して改善する。それを繰り返して課題を克

服していく。そこに気がついてからは、畑違いだと思っていた公認会計士との距離がグッと縮まって、勉強に取り組む姿勢や効率が劇的に変わってきたのです。

私が通った高校がたまたま商業高校で、そこでたまたま簿記に出会い、それが公認会計士につながりました。すごく不思議な縁だと思う一方で、人生にとって無駄になる経験なんて一つもないんだと強く感じました。野球の経験も最後に受験に生かすことができました。そこから私はスポーツ選手のセカンドキャリアについての考え方、『デュアルキャリア』の重要性に気づいたのです。

私はプロ野球選手を引退して、それからセカンドキャリアを考えました。それまで野球しかしてこなかったたので、すごく狭い選択肢の中から次を選ばなければならなかった。でもアスリートの期間は長い人生の一部にすぎません。だから、長い人生を歩む上でアスリートの時期に、同時にそれ以外の部分も

育てましようというのがデュアルキャリアという考え方です。

気づくキャリアと気づく能力

現役中から引退後のことを考えて、スポーツをやりながら公認会計士の資格を目指すといった、一般的文武両道の考え方とは少し違います。今一生懸命やっているスポーツの練習や試合の中で、実は社会でも生かせるこんな能力が育っている。それを意識して取り組むだけでも全然違う。それが引退後のキャリアにつながるという考え方です。

例えば問題解決能力。試合の立ち上がりが良かった投手が、尻上がりに調子を上げることがよくあります。これは自分の問題点に気づいて、試合中に修正して改善しているわけです。シーズンを通じた調整や、来シーズンへ向けた新たなウィニングショットの練習などでも、自然と問題解決能力が養われています。状況判断能力もそうです。対戦チーム、

試合展開、対戦相手、気温や気候など、1球1球あらゆる要素に左右されながら状況が変わります。その都度、自分で逐一状況を判断して行動しています。ですからこの能力は実は野球選手は非常に高いと思います。

ビジネスでもチームで仕事をするときに自分がどんな立場で、どんな役割を果たすべきかを自分で考えて行動することが求められます。一般的にスポーツ選手の能力、スポーツ選手に求められるものといえ、根性とか体力とか上下関係といったところにフォーカスされがちですが、私はそういった部分に加えて、実は問題解決や状況判断といった能力もすごく高いと思っています。

この能力に一番気づかなければいけないのがアスリート本人なんです。野球しかしてこなかったという事実は、野球以外のことができないということを経験するものではありません。自分は野球を通じて、社会でも生かせるこんな能力を培ってきましたとい

う自負があれば、いろいろな業界にチャレンジしているはずですよ。

学生のアスリートはスポーツ以外に授業の時間が確保されています。私も簿記を授業で学びました。そういった授業を通して知識を増やしたり、学校行事などスポーツ以外のことに意識を高めておくだけでもデュアルキャリアになると思っています。私は働きながら公認会計士の受験勉強をしていました。大人になつてから勉強する時間を確保するのはすごく大変なことで、高校時代、あれだけ授業時間、勉強時間を確保してもらえたのは本当に幸せなんだとつくづく気づかされました。

ゴールと通過点

私は憧れていたプロ野球選手になりました。でも1年目からケガをして、一軍公式戦で投げることなく、わずか4年で戦力外になりました。そもそもなぜケガをしたのか。突き詰めて考えると私はゴール

がプロ野球選手になることでした。それに満足して、そこからの成長をそれほど強く求めていなかった。例えば大谷翔平選手はプロ野球はメジャーへの通過点でした。つまり目標設定をどこに置くかで、取り組み姿勢が変わってくる。だから、今、自分は目標設定が非常に重要だと思っています。

壁と自分

資格試験に合格して、実務経験を積むインターン期間を経て、17年6月に公認会計士として登録を完了しました。新しい会社も立ち上げました。でも、自分は一度、苦い経験をしているので、今はすべて通過点でゴールではないと自分に言い聞かせています。

結局、自分は野球しかしてこなかったから野球しかできないという考え方は、自分で自分の可能性を閉ざしてしまっているんだと思います。『この世で唯一超えられない壁は自分でつくった壁である』と

いう言葉を私は最近とても大事にしています。自分で壁をつくって無理だと思ってしまうと、問題点を改善しようと思わない。壁を超えようとしなくなります。でも、できないと思わなければ、何とか超えようと考えて道筋を探し続けるはずなんです。

私も「元プロ野球選手が公認会計士の資格試験に合格するわけないだろう」と散々言われました。でも、自分だけは絶対に合格できるはずだという強い思いを持って、自分の可能性を信じて、粘って粘って合格することができました。私の場合は簿記でしたが、スポーツ以外の可能性の種は、アスリートの中に必ず眠っているはずです。それを私は自分の経験から学びました。自分自身が可能性を閉ざさなければ道は必ず開けてくると思います。

(この記事は、2017年11月28日に東京・渋谷ハクジューホールで行われた、日本スポーツ学会主催第5回スポーツ・セカンドキャリア・シンポジウムをもとに構成しました)

ガンバ大阪でプレーする八十祐治
写真奥の5番は元日本代表の宮本恒靖

セカンドキャリアで成功するⅡ

Jリーガーから初の弁護士

八十祐治

構成
阿部雄輔

2016年12月6日日本スポーツ学会第4回セカンド
キャリアシンポジウムで講演する八十祐治

八十 祐治（やそ・ゆうじ） 1969（昭44）年10月31日、大阪府高槻市生まれ。大阪府立茨木高校、神戸大学経営学部を卒業後、93年、ガンバ大阪に入団。95年、ヴィッセル神戸（JFL）、96～97年、アルビレックス新潟（北信越リーグ。入団時のチーム名はアルビレオ新潟）でサッカー選手としてプレー。公式戦出場3試合、0得点。98～2000年、横河電機サッカー部に所属。JFL公式戦出場43試合、2得点。現役時代のポジションはMF。2005年11月、旧司法試験に合格。司法修習60期。07年9月、弁護士登録。大阪弁護士会所属。

1993年5月、Jリーグ開幕の年にガンバ大阪に入団した八十祐治さん。開幕5試合目でJリーグのピッチに立ったが、プロ選手5年間は公式戦出場通算3試合にとどまる。その後働きながらサッカーを続けた横河電機でまわってくる仕事は雑用ばかり。元Jリーガーのキャリア自体が世間では評価されないという現実には直面し、社会に通用する資格を取ろうと決意した八十さんは無謀にも最難関の司法試験を目指す。新聞もインターネットも見ず、外に食事にも出かけずに地道に勉強を積み上げて、4年後にみごと司法試験に合格した。

——大阪弁護士会に所属しておられる弁護士さん、八十祐治さんをご紹介します。どこからどう見ても立派な弁護士さんですが、「元Jリーガー」という異色のキャリアをお持ちです。

1993年5月15日、Jリーグが開幕しました。それまで日本のサッカー界はプロ契約をしている選

手はいましたが、チームや組織はアマチュアでした。そこにホームタウンと下部組織を持ったプロのチームによるプロリーグ、Jリーグができました。ものすごい人気でしたね。

八十 神戸大学2回生の時にはJリーグができるのが分かっていました。その頃からもう毎日プロになることばかりを考えて、勉強そつちのけでサッカーに打ち込んできましたので、ガンバ大阪のスカウトから声をかけていただいて契約書にサインした時には、さすがに手が震えました。契約金は大して高くなかったのです。お金よりもプロになれたということが嬉しかったですね。

初めてJリーグのピッチに立ったのは5月29日、カシマスタジアムでの鹿島アントラーズとの試合です。超満員のスタジアムで、となりの選手の声も聞こえないぐらいの観客の方々の声援の中でプレーして。試合は結局0-4で負けたんですけど、個人的にはかなり浮かれた気分でした。

ところがガンバ大阪には2年間在籍して、結局出場できたのは3試合だけでした。プロの壁にぶち当たったという、まさにその言葉通りでしたね。小学校からサッカーを始めて、常に努力すれば周りに評価されてきました。レギュラーになり中心選手になり、大阪の代表に選ばれたり関西の代表に選ばれたり、大学でもユニバーシアードの候補に選んでいただいたり。ほんとにやればやるほど周りから評価されてきたっていうのが、プロになるまでの私のサッカー人生だったんです。ところがプロに入ってからなかなか評価をしてもらえない。一軍で十何試合ずつとベンチ入りして、試合も途中から出してもらったりっていう時期があったんですけれども、そこで結果を出せない。二軍に落ちてからは早く結果を残さないと一軍に戻れない、でも残せない、焦る気持ちも出てきて、ますます結果につながらない。完全に負のスパイラルに陥っていました。

3年目にヴィッセル神戸に移籍をさせてもらって

バクスター監督に出会い、ようやくレギュラー取れそうだという時、開幕2週間前に左足首の靭帯を切ってしまった。その時はさすがにショックでしたね。——ガンバ大阪に2年、ヴィッセル神戸に1年、アルビレックス新潟に2年、そしてJFLの横河電機に3年と、生き場所を変えていった8年間を、四十代の現在振り返っていかがですか？

八十 23歳でプロ入りして31歳で引退したのですが、ほんとにもがき続けた8年間でした。自分としては努力をしているつもりでも、何ひとつうまくいかなかったっていうのが二十代の印象ですね。もちろんプロになる時はこんなはずではなくって、ガンバで成功して、30歳を超えてもガンバで活躍するっていう気持ちを持って入団してますので、思い描いていたのとまったく違う二十代でした。

——色でたとえると、いろんな色のインクをぜんぶ混ぜて真っ黒になっちゃったみたいな、そんな二十代でしょうか。

八十 プロに入るまでは試合中、俺にボールを寄越せ、俺が何とかしてやるから俺にボールを出させていう気持ちでプレーしてたんです。けれどプロに入ってから、ミスをしたらどうしよう、またミスするんじゃないかっていうふうに思うようになって、途中から、ほんとにぶれぶれのサッカー人生でした。アルビレックスを解雇される時に、選手としては使わないけれどチーム内部の仕事したらどうだっという話もあったんですけど、まだ28歳で、どうしても気持ちがおさまらなかった。プロ契約ではありませんが、働きながらプレーさせてもらえるということで、JFLの横河電機にお世話になることにしました。

——お仕事はどんなことをされてました？

八十 主に人事の仕事です。人事と言ったら聞こえが良いですけども、雑用ばかりでした。電球が切れたから替えてくれとか、そのゴミを片づけてとか。横河電機では、昼は仕事をして夜に練習をして、土

日にJFLの遠征があつて試合をして、帰ってくる。とまた次の月曜日からフル回転で仕事と練習というような生活を続けてきました。31歳になってさすがに体力も少し落ちてきた。先輩たちもそのあたりで引退されることが多くて、チームもそろそろ若手に切り替えた方が良くのかなあと、そんなふうに思ったのが31歳の時でした。

——31歳で引退後、なぜ司法試験受験を選ばれたんですか？

八十 定年まであと30年間雑用みたいな仕事を続けるのかという問題に直面しました。3年間サラリーマンをさせてもらつて、君はサッカーしかやってきてないから、大した仕事はできないでしょというようなことを言われて、すごく悔しい思いをしていました。このままこの会社について、そういう悔しい思いを晴らせるのか、何かサッカーと同じぐらい熱意とか気持ちを込めてできる仕事はないか、年齢に関係なく仕事をするには資格を取るしかないって、

そういうふうに思ってたんですね。

サッカー選手として成功しなかった悔しい気持ちが鬱積してましたし、なおかつサラリーマンとしても評価していただけなかった。社会ではプロサッカー選手であったこと自体がさほど評価されないという現実にも直面して、そんな人たちを見返してやろう、自分の力でサッカー選手の価値を見せてやろう、それなら一番難しい司法試験に受かってみせよう、そんな気持ちでしたね。

ただその時にはまだ司法試験がどれだけ難しいかを知りませんでした。合格率3%だとか、難しいってことはうすうす分かってましたけれども、一次試験と二次試験があつて、二次試験はさらに三段階あるなんていうことも、司法試験の予備校2年分の授業料100万円、なけなしの100万円を振り込んだ時に調べてはじめて知ったんです。

——奥様は反対されなかったんですか？

八十 妻も私と結婚するぐらいですからちよつと変

わつたところもあつて、まあ頑張つてみたいな感じで軽く言われたのを覚えています。僕がサッカーで悔しい思いをしているのをずーつと傍で見えていましたし、僕が言い出したら聞かないのも分かっていましたからね。

——それからは横河電機のサラリーマンをやめて、勉強一筋ですね？

八十 仕事をしていると勉強時間を確保できないので、会社をやめて地元の大阪府高槻市に戻つて勉強をはじめました。もともと勉強が得意ではないので、最初は机に向かうだけでも苦痛だったのですが、一日12時間ぐらいは勉強しました。ただ働いてないですからお金がない。妻が働いていた時期もあります、上の子供はちっちゃかつたし、その上何を思ったか、僕が合格する年に妊娠をしまして、また働けなくなるといふ、人生設計まったく行き当たりばったりなんです。可哀相ですけど子供には外食なんかさせたことがなかったですし、新聞を取つてない、

インターネットにも接続してないので、外部から情報が入ってこない。そもそも三十過ぎのおっさんが仕事をやめて勉強だけしてるとですね、社会から隔離されたような気持ちになります。その期間自分でも思っていないぐらいのプレッシャーで苦しみました。受かる保証のないこんなことをやっていて良いのかって毎朝起きたら思うし、その不安を振り払うためには勉強しないといけないとか気持ちも揺れ動いて。ちょっと頭がおかしくなりそうでした。

——平成17年11月9日のことを教えてください。

八十 最終合格した日ですね。合格発表は東京の法務省の赤煉瓦の建物に貼りだされるんですけども、僕は大阪にいますので、ちょっとタイムラグがあるんですが、ホームページに上がるのを待っていました。インターネットに接続して待っていたら、東京にいる兄がわざわざ見に行ってくれて、携帯に電話してくれましたよ。受かったと聞いた時は嬉しいより何より、ああこれで司法試験の勉強をしなくて良い

んだという、そういう気持ちだけでしたね。

——元プロサッカー選手で司法試験に合格された方はほかにいないそうですが、サッカーをやつてらしたことが試験に役に立ったことはありますか？

八十 スポーツつて試合にスポットが当たりますけど、練習やふだんの生活からほんとに地道に地道に積み上げて、そうしてやつとグラウンドに立つてプレーするっていう、地道な作業の繰り返しですよ。勉強も結局一緒に、地道な作業を繰り返して繰り返して基礎の部分をしつかり積み上げていく部分はサッカーと一緒に思いながら、むしろ生意気ですけど、サッカーでは地道にやつても結果が出ないことが多かったんですが、勉強は地道にやつていれば自ずと知識も増えていきますし、結果が出るので、司法試験もサッカーよりは通りやすいなと思った。通ったから言えるんですけど。

——プロスポーツ選手のセカンドキャリア問題を語る時、現役生活は必ず何年かで終わるのだから、

その時のことを頭に置いて、資格を取るとか、そういう考えを持つていた方が良いんじゃないかという意見があります。八十さんはどう思いますか？

八十 J1やJ2の選手にプロサッカー選手の先輩としてお話しさせていただく機会が何度かありました。やめたあとのことを考えるのも良いことです。でもプロサッカー選手であれば、今日の前のことに100%捧げて欲しい。100%ここに打ち込む体験を積み重ねていけば、サッカー以外のことにチャレンジする時も役に立つて伝えていきます。

ただ僕の場合は正直やりきったという気持ちにまではならなかった。その煮え切らない部分が司法試験への後押しをしたのもたしかです。サッカーでもうひとつ成功していたら、違う進路を選んだかもしれない。煮え切らない気持ちを精算するために司法試験に挑んだっていうのが正直なところですね。

—— 弁護士さんとして今、どんなお仕事をされていらつしやるんでしょうか？

八十 離婚とか相続とか、ご家庭の資産に関する紛争や、家を建てたのに欠陥があるやないかとか、そんなほんとに巷であふれてるような紛争に入らせてもらう仕事が多いです。

—— お仕事面白いですか？

八十 つらいです。もともとサッカー以外では荒っぽいこと好きな方じゃないんで、人の紛争に入っていくのは本当にしんどいです。ただそういう紛争ばかりやってるわけじゃなくて、山口蛍選手（現セレッソ大阪）が2015年12月にブンデスリーガのハノーファーに移籍するまで2年間、代理人をさせてもらったり、サッカー選手と一緒に仕事することもありましたし、弁護士はほんとに幅広い仕事ができます。弁護士のやりがいつて、カッコ良く言うところ、立場の弱い方がひとりではなかなか声を上げられないところを法律の専門家としてサポートできるところで、一緒に声を届ける仕事ができるときは、ああ良かったなあと思いますね。

セカンドキャリアシンポジウム

ファーストキャリアは プロスポーツ

司会進行・構成 長田渚左



八十祐治氏

奥村武博氏

守屋拓郎氏

本誌『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会とともに、アスリートのセカンドキャリア（デュアルキャリア）をテーマに繰り返し特集してきた。近年はアスリートの意識や周囲の環境に変化が見られるようになってきた。そこで日本スポーツ学会はセカンドキャリアで活躍する元プロ選手3人をゲストに迎え、『第121回スポーツを語り合う会』として11月19日に都内でシンポジウムを開催した。

——プロスポーツ選手を引退後、難関国家資格を取得して、セカンドキャリアへの扉を開いたお三方をご紹介します。

ガンバ大阪などに所属したJリーガーから弁護士に転身して15年の八十祐治さん、そして、公認会計士になられたプロ野球・元阪神タイガース投手の奥村武博さんと、元プロキックボクサーの守屋拓郎さんです。八十さん、奥村さんは以前にもスポーツ学会で講演されておりますので（内容は本誌57号P15とP25くに再録）、初登場の守屋さんのプロフィールをご紹介します。

1983（昭和58）年、茨城県結城市生まれ。男ばかりの3人兄弟で、東京都町田市で育ちました。『キャプテン翼』の影響でサッカーを始め、中学でもサッカーを続け、堀越高校のセレクションを受けて合格。ところが、半年で退学して、1年後に高校再試験を受けたら不合格。その後、通信制の高校に入学し、編入試験を受けて入った都立松が谷高等学校

校を卒業しました。



——守屋さん、波乱の高校時代でしたね。

守屋 自分でも将来どうなるのか不安でしたが（笑）、まあ思い返せばいろいろ考える時間だったのかと……。

——卒業後は浪人中にキックボクシングのジムに入門して、2003年7月にプロのライセンスを取得。翌2004年には早稲田大学社会科学部へ入学しました。どうして早稲田を志望したのですか。

守屋 親に「お前に早稲田なんてとても無理だ」とあきれられまして、負けず嫌いに火が付きまして。今に見てろ、入ってみせる」という気になりました。——その後、アルバイトをしながらキックボクサーを続けました。2009年RISE70kgトーナメン

ト準優勝、ニュージャパンキックボクシング連盟ミドル級3位、全日本キックボクシング連盟スーパーウエルター級6位などの実績があります。キックボクサーとしてご自身でどう評価されていますか。

守屋 中途半端でした。「日本チャンピオンにならないなら、ランキング1位も意味がない」とジムの会長に言われてました。失敗したと思っています。

——そして、30歳を迎えたタイミングで公認会計士を目指して勉強を始めました。数ある国家資格の中で、なぜ公認会計士に挑戦しようと思ったのですか。

守屋 大学の授業で簿記に出会い、興味を持ちました。キックをやっていたときにお金の苦勞もしましたから、お金の専門家になるのもいいかなと……。1次の短答式試験には2度目で合格したのですが、2次の論文式試験に3度失敗して、優成監査法人（現太陽有限責任監査法人）へ監査補助者として入社しました。試験は最後に1回だけ挑戦してダメだったからあきらめる覚悟でしたが、その会社説明会で

リクルーターとして話をされた奥村（武博）さんに出会い、著書『高卒元プロ野球選手が公認会計士になった！』（洋泉社）を頂きました。それが大きな励みになって、何とか論文式試験に合格し、最終試験の修了審査にも2021年4月に合格しました。

——挑戦から8年かかりました。今は奥村さんと同じ会計事務所（オフィス921）に所属されています。八十さん、守屋さんのライフヒストリーをお聞きになっていかがですか？



八十 はい。高校時代の波乱の時間も驚きましたが、一度決めた目標に進むパワーは、まさにスポーツのスキルアップと同じだと思いました。8年かけての合格。守屋さん立派ですね。

テクノロジーと意識変化

——日本のスポーツ選手のセカンドキャリアへの認識は、ひと昔前と大きく変化しました。広島カープのファンの西本祥子さんは、衣笠祥雄さんからあるエピソードを聞いたそうですね。

西本 初優勝した75年の主力メンバーにゲイル・ホプキンスがいました。彼はいつも練習の合間にベンチで分厚い本を読んでいた、衣笠さんが「何を読んでいるの」と聞いたそうです。それは医学書でした。

「野球選手を終えたら医者になるから」という彼の話に、衣笠さんはひっくり返るほど驚いたと言っていました。当時、日本の野球選手にそんな発想をする人はいませんでした。ホプキンスは時間を見つけて、広島大学医学部で聴講生として授業も受けていて、米国に帰国後、整形外科医になりました。

——日本スポーツ学会事務局長で早稲田大学教授の太田章さんは、レスリングで4度五輪代表になっ

ています。確か最後の92年バルセロナ五輪で対戦した米国の選手は弁護士ではなかったですか？

太田 はい。米国のクリス・キャンベルです。彼は米国がボイコットした80年モスクワ五輪が幻に終わり、81年の世界選手権で優勝した後、弁護士になりました。ところが、84年ロサンゼルスと88年ソウルの五輪フリー90kg級で、私が2度銀メダルを獲得するのをテレビで見て奮起してトレーニングを再開。バルセロナ五輪で私は3回戦で敗れましたが、彼は銅メダルを獲りました。

——あの当時、太田さんの金メダルへの道を阻んだ男の異色のキャリアには驚きましたが、今の時代の日本のアスリートのセカンドキャリアへの意識は大きく変化しました。例えば女子柔道で世界王者になった朝比奈沙羅選手、ラグビーW杯日本代表だった福岡堅樹選手は、大学の医学部に入って、医師になるべく勉強を続けています。バスケットボールBリーグのアルティイリ千葉に所属する岡田優介選手や、

陸上男子800m元日本記録保持者の横田真人氏も公認会計士の資格を取得しています。この「二毛作」とも言われる考え方、意識の変化を、アスリートで



ユアルキャリア推進機構の代表理事も務める奥村さんはどう分析しますか。
奥村 一番違うのは情報量です。昔はセカンドキャリアやデュアルキャリアという単語すら聞かなかったし、キャリアサポートの意識も希薄でした。加えてテクノロジーの変化。大リーグのダルビッシュ投手の練習がSNSなどですぐに見られる時代です。〇〇選手が医者になる、〇〇氏が公認会計士になるという話も身近に知ること、こういう資格がある、こういう仕事がある……とケーススタディーも広がった。じゃあ自分もチャレンジしてみようと

なる感じで、選手の意識もひと昔前とは違ってきています。

——八十さん、ちなみにJリーガーから弁護士になった方は他ほかにいますか？

八十 いないですね。昭和、平成、令和と見てきて思うのは、昔のようにサッカーが上手ければ、サッカーだけやっていればどういかなるという時代ではなくなっていることは確かです。今のプロ選手は知的好奇心が強くて深い人が、最終的に日本代表などで活躍しています。さまざまな分野にも目を向ける能力が大事になってきている気がします。振り返ると、ガンバ大阪に入団した頃なんて、僕以外はやっぱりな選手ばかりでした（笑）。

——守屋さん、この3人のメンバーの中で一番の若手ですが、昔と今を比較して何か感じることはありますか？

守屋 スポーツを辞めてからの人生のほうがもの凄く長いわけで、そのことに早く気づくことで、自分

の可能性もより広がると思います。早く自覚したほうが視野も広くもてると思います。

——さて、資格を取ったことで新たな人生の扉を開いた3人に質問します。「セカンドキャリアで驚いたことは何ですか？」キャッチフレーズを挙げて説明してください。

八十 **低い評価**と書きました。大学でスポーツをすると（社会に出ても）体育会系のつながりがありますが、プロにまでなった場合は社会に出ると『サッカーしかしてなかったでしょう』『サッカーしか分からないでしょう』という低い評価になってしまったことを身をもって感じました。

守屋 **非常識**と書きました。自分はアスリートだったので、挨拶や時間厳守は徹底していましたが、社会に出て仕事をすると、ルーズな人が少なくないことを知って驚きました。

奥村 **共通点の多さ**です。戦力外通告を受けたときは、野球しかしてこなかったからこの先どうした

らいいのか、自分には丈夫な体しかないから肉体労働しか思い浮かばなかったのですが、公認会計士の試験に取り組むようになって、スポーツでパフォーマンスを上げていくのと根本は同じだと気づきました。スポーツで上手い人のやり方を手本にするのは当然のことです。社会も同じなんだと。それを分かってから成績も伸びました。

失敗と成功の関係

——2つ目の質問です。「スポーツ選手はセカンドキャリアで通用するのか」。スポーツの特徴に『失敗』があります。例えば取り返しのつかないような局面でのありえない落球。他にも滑る、転ぶ、落とすなど、人前でみつともない失敗をさらしてしまう経験が誰にも付いてまわります。そのスポーツでの経験は、今の仕事に生きていますか？

奥村 **大いに活躍できる**と書きました。おっしゃる通りです。大失敗から何を学ぶかなんです。野球

は失敗のスポーツと言われてまして、日本を代表するイチロー選手だって、10回打席に立ってヒット3本しか打てない。7回は失敗しているわけです。その失敗を何につなげてゆくのか？ です。逆に言えば、失敗すれば失敗するほど成功に近づいてゆくとも言えるわけです。私も公認会計士の試験に9回ぐらい失敗していますが（笑）そこからどうしたらいいのか？が、スポーツ選手の通常のマインドですから、時にその失敗だけ切り取られて映像で使用されて憤慨したりもしますが、それが結果として人の行動のアイスブレイクにもなりますよね。

守屋

【通用します】と書きました。スポーツ選手は通用します。仕事をする上では円滑な人間関係が大切ですし、アスリートは何とかしてやり抜こうという力も強いです。例えば少し理不尽な状況にあっても、難しい組織であつても、アスリートは闘って何とかしようという場面の経験が人よりも多いですから、社会で仕事をするノウハウを初めから身につけ

ているとも言えると思います。

八十

【通用する】と私も書きました。スポーツで培った経験や能力を次に何かを見つけて注ぎ込むことができれば、人に負けない熱量を発揮して進めると思います。問題はその次をどう見つけ出し、つなげてゆくかだと思います。

ライセンスと二歩二歩

——3つ目の質問です。人生100年時代です。今、自身のセカンドキャリアとどう向き合っていきたいと思っていますか？

八十

【一本道】と書きました。サッカーをやっていたときはスポーツは失敗の連続なので、その失敗をどう乗り越えるか、失敗をどう成功に変えるかを考えていました。また一方でプロ契約を打ち切られるのではないかという半端ではない緊張感との闘いもありました。辛かったですが濃密な5年間でした。今は精いっぱい仕事をしていると、思わぬ良い結果

が付いてくる、思いもしない判決が出るという良い面での緩さもあります。自分の仕事を常に見つめ直し、サッカーをやっていたときの厳しさをこれからも忘れずに、次の目標、次の課題に一つ一つ丁寧に取り組んでいこうと思っています。

守屋

希少価値

です。キックボクシングをやっていたときも特別なものを身につけたいと思い、ローキックを研究しました。好きな呼び名ではなかったですが、その威力は『死神ローキック』と言われていました（笑）。これからAI（人工知能）時代が進んでゆくでしょうが、仕事の最後の判断は人間がするものです。AIに負けない希少価値を身につけたいと思っています。

奥村

チャレンジ

です。人生の土台は競技生活にあったと思いますが、実際にプロ野球選手としては1年目から手術しなければならなくなり、4年目に戦力外通告となったわけです。要因はいろいろとありますが、なぜそうなったか？ を考えると、幼稚

園児のときから夢はプロ野球選手になることで、実際にドラフトにかかってプロになり、入団会見でユニホームを着て写真をとったときにゴールになっていたと思います。大谷翔平選手の人生のプランニングでよく出てくるようになりましたが、1年目に一軍に上がる、3年目にはこうなるというプロ野球選手の青写真、設計図が自分にはなかった。自分なりに頑張っただけ……。今、周囲からは公認会計士の資格を取ってセカンドキャリアの成功者と言われますが、第2の人生でまだ何も成功なんかしていない。次のステップ、その次のステップとチャレンジしていかなければならない。今、土俵に上がっただけだと思います。一生もののライセンスは手に入れました。おかげさまで戦力外通告だけはありません（笑）。死ぬまで一步一步です。最後に『楽しい人生やった』と、シューと消えてゆく。そんなフェードアウトができるようにチャレンジしてゆきます。

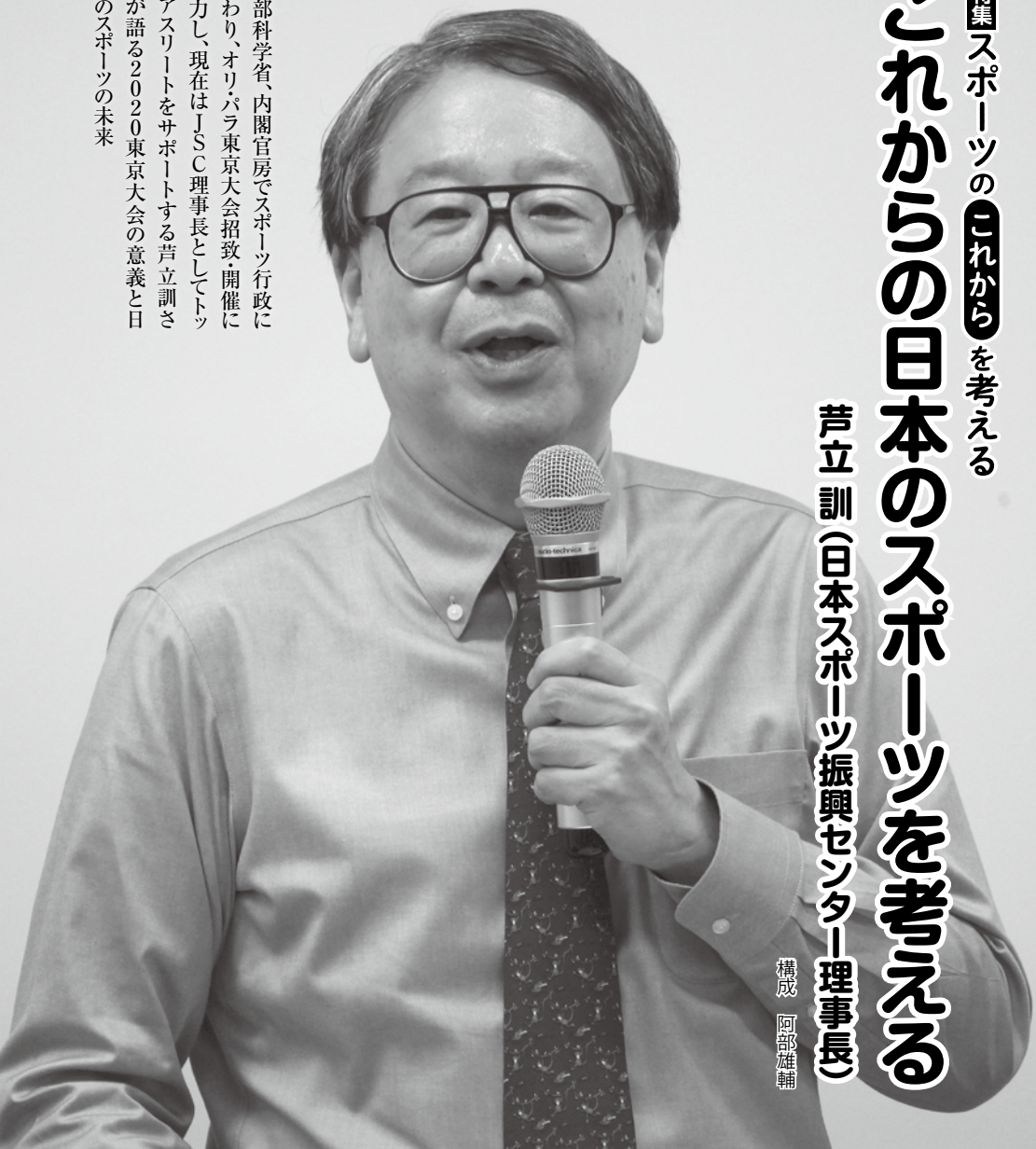
特集 スポーツのこれからを考える

これからの日本のスポーツを考える

芦立訓（日本スポーツ振興センター理事長）

構成 阿部雄輔

文部科学省、内閣官房でスポーツ行政に携わり、オリパラ東京大会招致・開催に尽力し、現在はJSC理事長としてトップアスリートをサポートする芦立訓さんが語る2020東京大会の意義と日本のスポーツの未来



芦立 訓（あしだて・さとし）1960（昭35）年10月7日、宮城県生まれ。85（昭60）年、上智大学法学部法律学科を卒業し、文部省（現・文部科学省）に入省。2008（平20）年より同省スポーツ・青少年局スポーツ課長としてオリンピック・パラリンピック東京大会招致に携わる。13（平25）年の招致決定後、14（平26）年より内閣官房で政府のオリパラ推進事業の総合調整にあたる。18（平30）年、文部科学審議官を拝命。20（令2）年、同省を依願退官。21（令3）年、公募に応じ、独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長に就任。22（令5）年、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士課程修了。

私は2008年から国のスポーツ行政に携わるようになりました。当時は2016年に東京でオリンピック・パラリンピックを開くための招致活動をしている時代でした。その後2009年のIOC総会で負けて、2011年に石原都知事がもう一度オリンピック招致を掲げて再選を果たし、2013年、ブエノスアイレスのIOC総会で2020東京大会招致が決まりました。招致が決まってもまずわれわれが取り組んだのは、鉄道の駅やホテルのバリアフリーの問題でした。

メインスタジアム国立競技場の最寄駅であるJRの千駄ヶ谷駅がバリアフリーになっていなかったり、地下鉄銀座線の外苑前駅もホームが狭くてホームドアもありませんでした。当時鉄道事業者さんから聞いたところによると、ホームドアというのは非常に重くて、単にホームドアを付けなければならないのではない。ホームから強化していかなければならぬから、むしろくちやお金がかかるということだっ

たんですが、鉄道事業者の協力を得て少しずつ進めていく間に、徐々に軽いホームドアができるようになりました。こういうこともオリ・パラでホームドアを付けようとしたことが、今日少しは役に立っているのかなと感じるところでございます。

バリアフリー化改修工事に補助金が付いた

ホテルについてはバスルームが一番大きな課題でした。車椅子の方はアスリートも含めて、他人の力を借りずにご自分でシャワーを浴びたい方がたくさんいらっしゃいます。車椅子自体も基本的には防水仕様で、そのままシャワーを浴びても大丈夫です。ところが日本のホテルはほとんどのホテルにぜんぶバスタブが付いているんですね。オリ・パラの準備をしていた頃は、1つ星から5つ星まで東京にはバスタブのないホテルはほとんどありませんでした。車椅子で来られたお客様が自分の力だけではシャワーを浴びられないんです。

対策として2019年にホテルを改修するための補助金を設けました。補助金って民間の事業者には普通出さないんです。それを観光庁に頼んで補助金を付けていただいたんですが、あまり受け入れられませんでした。ホテル関係者に聞きましたところ、当時はバリアフリーにしている客室はお客様に人気がなく、最後まで売れ残るんだということでした。本格的にバリアフリーに改修していただいたのは大磯プリンスホテルだけと記憶しています。

一方で海外の例を調べた時に、ドイツには全室バリアフリーにしているホテルチェーンがあることを知りました。こういう気づきがあっただけでも東京大会の仕事をしていて良かったなあと感じているところであります。

ところが東京大会についてはその後、汚職や談合というような事件が発覚して、金儲けのためのイベントだったんじゃないか、広告代理店などが儲けるイベントだったんじゃないかと、そういう話に上書

きされてしまった部分があるわけです。もちろん反省すべきところはたくさんあると私は思うんですけども、一方で折角やったこのイベントをさらに引き続きスポーツの発展に役立てていくにはどうしていったらよいのか、どうすべきなのかと考えますと、やはり立ち返るべきところは「スポーツ基本法」ではないかと思います。

「スポーツ基本法」が東京2020のレガシー

「スポーツ基本法」は2011年6月に公布、8月に施行されましたが、生まれたきっかけは政策的必要ということだけではありませんでした。

本格的に日本でオリンピック・パラリンピックを開催しようという機運が出てきた後、IOC総会で東京を支持してもらうために何が必要かという議論が行われてきた中で、体系的な法律を持つことが大事ではないかという意見が出てきた。つまり投票権を持つ人たちにネガティブに見られないためという

のがきつかけだったのかもしれませんが、結果として、体系的に、グローバルな観点で大切だと思われることについて、研究者も含めて多くの方が議論に参加したかたちで、超党派の議論の中で生まれた「スポーツ基本法」は、私は非常に大きな意味があるのではないかなと思います。

日本の法律の大半は内閣提出の法案ですが、「スポーツ基本法」は議員立法です。超党派の議論を経て多くの皆さんのコンセンサスを得ながらつくられた法律ということです。制定されていく過程において行われたいろんな議論が収斂しゅうれんされたかたちになっています。おおよそ日本のスポーツ界においてコンセンサスを得られている事項が網羅的に盛り込まれている法律が「スポーツ基本法」で、そこに書いてあることをどう具現化していくのか。「スポーツ基本法」により一層磨きをかけて魂を込めていくという作業が何よりも大事なのではないかと思っている次第であります。

スポーツ界には常にさまざまな課題があります。その課題を何かよく分らないまま触っていくのではなく、少しでも体系的に、あるいは地図を見ながら取り組んでいこうと考えた時に、網羅的、体系的に国民的コンセンサスを得た法律である「スポーツ基本法」を常に振り返り立ち返りながらスポーツのあり方、スポーツの政策を考えていく。そのことが実は東京大会の大きなレガシーのひとつ、法律がレガシーと言うよりはこの法律に基づいて、さらなるスポーツの発展を考える手がかりとしてこれを大切にしていくことが、非常に大事なことなのではないかなと思います。

デフリンピックとスペシャルオリンピックス

ポスト東京2020の課題の中でいくつかポイントを挙げるとするならば、パラリンピックをやった国として、もつと障がい碍者スポーツに取り組まなければならないのではないか。パラリンピックが障がい碍者

スポーツの右代表であることは間違いありませんが、それ以外にたとえば東京都が2025年に開催する予定のデフリンピック、あるいは知的障害の方々のスペシャルオリンピックス。こういうものをどう考えていくか。私個人の理解では、まずは東京でパラリンピックを成功させる。障害者スポーツ全体の底上げというよりは一点突破型でパラリンピックの振興を進めていくということで今日まで来たけれど、今後はパラにとどまらず、デフとかスペシャルなども含めての障害者スポーツのあり方が問われることになるわけです。

それからトップスポーツと、グラスルーツスポーツと言うんでしょうか、生涯スポーツとをどう好循環させていくかということが「スポーツ基本法」を制定する議論の中で言われていた大きな課題だと考えますと、たとえば障害者スポーツと病院におけるリハビリテーションとのリンクというようなことも考えていかなければならないのではないのでしょうか。

トップアスリート支援で得た知見を一般に

文部科学省では私自身、生涯学習と言いますか、生涯にわたって勉強することが大事だという旗振りをしておりましてので、2020年に文部科学省を退職した後、旗を振った責任を取ろうと一念発起いたしまして、この早稲田大学の大学院スポーツ科学研究科に入って勉強をしました。2021年1月、公募に応じて現在も働いている日本スポーツ振興センター（JSC）に入りました。実際に東京大会が行われた時にはすでに国家公務員ではなく、日本スポーツ振興センターにいたわけであります。

JSCはトップアスリートのサポートがメインのミッションですが、私自身はJSCがトップアスリートを支えるために培ってきた知見をいかに地域の皆さんにご利用いただけるようにするかということが、これからの大きな課題だと思っています。

たとえば今、トップアスリートの皆さんにはスポ

ーツ医学とそのサービスの提供を受けるために東京都北区西が丘のH P S C（ハイパフォーマンススポーツセンター）にいらしていただいています。アスリートファーストということからすれば、西が丘へ来いというのは違うんじゃないか。本来は自宅へ行く、デリバリーサービスをすべきかもしれませんが、西が丘のスタッフの数に限りがある中で、ぜひ出前で行きますとはいかないわけです。

じゃあどうするのかという時に、テクノロジーというものを考えていく。たとえばスマホにアプリをダウンロードして、そのアプリを活用することによって海外にいても測定ができる、サポートを受けられるようにできないだろうか。さらに何年先かは分りませんけれども、一般の方々もスマホのアプリを使ってスポーツ医学のサービスにアクセスできるようにになれば、納税者からお金をいただいてトップスポーツのために開発し、蓄積したノウハウを、ようやく納税者にお返しできると思うんです。

アスリートのセカンドキャリアにチャンスあり

あるいはトップアスリートのセカンドキャリアについて。日本中の大学、公私立大学、短期大学や専門職大学まで含めれば1000ぐらいでしょうか。そこにトップアスリート経験者をプラスワンで雇用してもらうようなことができないか。私は文部科学省で私立大学を担当したことがあって、大学の経営者をいくらか存じ上げているんですが、生き残りを懸けて皆さん必死なので、良い話があれば、良い話についているのは著名人とかそういうことじゃなくて指導者として優れているという意味ですが、うちの大学の看板になるかもしれないから雇いたいというようなお話も伺っています。

私も日本スポーツ振興センターは「スポーツ振興基金」という基金を出しています。その中にアスリートでリタイアされた方を中心に、NF（国内競技団体）から推薦されて勉強するのであれば授

業料を負担するというメニューがあります。日本学生支援機構の奨学金は、利子つけて返してくださいという奨学金が中心になるわけですが、私どもの「スポーツ振興基金」の奨学金は渡しきりの給付金でありますので、返還義務はございません。しかし残念ながら毎年ぜんぶは手が挙がらない状況です。

私が今まで仕事の上で接した多くのトップアスリートの皆さんは、失礼な言い方をすれば、ご本人が思っているよりはるかに地頭が良い。素晴らしくセルフコントロールができています。ところが赤羽のホルモン屋でホッピー飲みながら話してみると、だいたい自己否定なんです。『ずっと運動ばかりやって、脳みそ筋肉なんです』みたいなことを言う人が多いわけです。

絶好のチャンスだと思えます。AIが出てきたり、今までのような学習法はちょっと見直さないとね、みたいな時代になってきているわけです。宿題だってAIに言ったらちゃんと書けるって私の子供

が得意げに言ってますよ。チャットGTPに細かく指示するとりポートすぐできちゃうんだと。そういう時代、地頭の良さは決定的に大事です。それまでの学習プロセスがどうだというより今対応できる地頭が価値を持つてくるとすれば、それこそスポーツの中で磨き上げてきた能力を発揮できる絶好のチャンスじゃないでしょうか。

世界のIFが目指した「eスポーツウィーク」

もうひとつ考えなければならぬ問題に、eスポーツがあるかと思えます。今年6月にシンガポールでIOC主催の「オリンピックeスポーツウィーク」が開催されました。ショッピングセンターの一角が会場で、薄暗い中ピカピカ光っていて、いろんな音がするという感じで、久々に新橋のゲーセンを思い出しました。IF（国際競技団体）のプレジデントが大勢来ていて、相当前のめりになっているIFも少なからず見受けられました。

eスポーツの、世代を超えて楽しむことができるという視点、あるいは障碍の有無を超えてひとつのルールで競えることをどう評価すべきなのか。それからフィジカルな要素を多く入れて、世界中の人と記録を競うというコンセプトのものをどう考えていくか。たとえばローイングのようなものは、本当にマシンを漕ぐわけです。漕いでインターネットでみんなでつないで、一定のルールで優劣を競ってみんな汗だくになる。これもeスポーツです。

今多くのIFは自分たちの種目から人が減つていくという危機意識を強く持っています。その集合体たるIOCは、10年以上前から若者のスポーツ離れに真剣に取り組んでいます。最初の取り組みは2010年にシンガポールで開かれた「ユースオリンピックピックゲームス」でした。

勝敗を競うより教育的機能や国際親善、友情の醸成というようなものに力点を置いて行われた「ユースオリンピック」ですが、これだけではスポーツ離

れを食い止められないという中で、次にIOCが手を打ってきたのが「アーバンスポーツ」の導入です。これが結実したのが2020東京大会で、スケートボードやスポーツクライミングが入ってきた。そこをもう一步踏み出そうというのがeスポーツなのか、なという感じがいたします。

スポーツは太陽の下で汗かいて筋肉を使つてという考え方からすれば、eスポーツに拒絶反応を示す方も当然いると思います。けれど、何か地殻変動が起きる可能性はある。見たくないものを見ていないといったの間にかおいてきぼりを食っちゃう可能性があるということですよ。

いろいろな意見があることも事実です。その証拠に、トマス・バッハIOC会長がシンガポールに來られる予定だったところ急遽キャンセルになりました。つまりまだせめぎ合いは続いているということで、まだ目をつぶっていてもいい時間かもしれません。けれどもシンガポールでうごめいているIFの関係

者をこの目で見た私個人の認識からいたしますと、そろそろこの問題に光も影も含めて向き合うべき時期に来ているような感じがいたします。

多様な課題に多元的、分散型で対応する時代へ

基本法の下にいろんな関係する法律がぶら下がるのが普通の法体系だとすれば、「スポーツ基本法」と東京大会前に制定された「ドーピング防止活動推進法」しかない現状はまだ道半ばです。たとえばスポーツインテグリティの大切さ、スポハラみたいなものも含めてどうアスリートの権利を保障するかみたいなことを法律化するのかどうか。その前にSNSなどからどうアスリートを守っていくのかということも大きな課題だと思いますし、さらに今ジャニーズ事務所性の加害の問題が言われていますが、こういういった問題はスポーツ界でも起きています。

課題はたくさんあります。ひとりの人間、ひとつの組織がすべて対応するのではなく、ディセントラ

イズって言うんでしょうか、多面的、多樣的にいろんなところが機能することがこれからの時代、大事ではないでしょうか。国がぜんぶ決めるとかJOCがぜんぶ決めるのではなく、いろんなところで多元的、分散型で決めていくことが求められるのだと思います。

そういう意味でもスポーツの世界で経験を積まれた方々、研究者の方々への期待も大きいのです。日本のスポーツの発展のためにより多くの方々に役割を果たしていただくことが「スポーツ基本法」制定の主旨に叶うことでもありますし、さらに言えば、制定のきっかけとなった東京大会をやつて良かったと皆さんに思っていたくようにスポーツ界が改革されることを、私としては強く望んでいるところでもあります。

（本稿は2023年9月20日、東京・新宿区早稲田大学戸山キャンパスで行われた「第125回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成したものです）

特集 トップアスリートの セカンドキャリア 引退後を語る

国枝慎吾 VS. 村田諒太

取材・構成 首藤正徳
長岡渚左

世界の頂点で一時代を築いた2人のトップアスリートが昨年、相次いで引退を表明した。車いすテニスでパラリンピックのシングルス3度優勝など数々の偉業を達成した国枝慎吾氏と、日本人ボクサーで初めてオリンピック金メダルとプロの世界タイトルを両方獲得した村田諒太氏。栄光の競技人生にピリオドを打って半年以上たった昨年11月、NHKの特集番組との共同企画で2人の対談が実現。引退決断の秘話から、現在の苦悩、そして未来について語り合った。夢をかなえたトップアスリートは、どんな第二の人生を思い描いているのか。スポーツゴジラ編集部の追加取材も合わせて、2人の今に迫った。

国枝 慎吾 (くにえだ・しんご) 1984 (昭59) 年2月21日、千葉県柏市生まれ。9歳の時、脊髄腫瘍で下半身まひに。小6で車いすテニスを始め、06年に初の世界ランク1位。09年プロ転向。パラリンピックは5大会連続出場。シングルスは08年北京と12年ロンドン、21年東京で金3個で、車いすテニス男子最多。ダブルスでは04年アテネ金、08年北京と16年リオデジャネイロで銅。現行グランドスラムはシングルス28勝、ダブルス22勝の計50勝で、車いすテニス史上最多。年間グランドスラム達成5回。世界ランキング1位のまま23年1月に引退発表。

村田 諒太 (むらた・りょうた) 1986 (昭61) 年1月12日、奈良市生まれ。伏見中1年でボクシングを始め、東京都高 (現京都広学館高) で高校5冠。東洋大で04年全日本選手権ミドル級で優勝など。11年世界選手権銀メダル、12年ロンドン五輪で日本人48年ぶりの金メダルを獲得。13年8月にプロデビューし、17年10月、WBA世界ミドル級王座を獲得し、日本人で初めて五輪金メダリストとしてプロの世界王者になった。2度目の防衛に失敗も、19年7月に王座奪回。22年4月にIBF王者ゴロフキン (カザフスタン) との王座統一戦に9回TKO負け。23年3月に引退発表。現役時代は帝拳ジム所属。183㌢の右ファイター。

外見と休日

国枝 お久しぶりです。楽しみにしていました。

村田 ありがとうございます。よろしくお願いします。顔、優しくなりましたね。

国枝 言われます。引退して1カ月くらいで言われましたね。顔が優しくなっただって。あとは「やせた」。言われませんか？

村田 僕も顔は優しくなっただって言われるんですよ。戦わなくなっただからですかね。筋肉の張りみたいなものもなくなっただって、人を威圧するようなものがなくなりましたね。そういうのテニスの選手でもあるんですね。

国枝 現役の時は眉間にしわを寄せて相手をにらむことも多いので、そういうところで顔の表情が変わったんじゃないかなって思いますね。（筋肉は）張りがなくなっただけですね。

ところで生活の張りはどうですか？ 今まで練習

で1日が終わっていたのに、それがなくなっただけの心境は？

村田 やつと最近になつてきみしきとか、物足りなさや若干克服できたかなと思っただけなんですけど、でもまだボクシングやれたらいいなとかも……最近も週1くらいで練習しているんですけど。

国枝 やつてます？ 一緒です。

村田 本当ですか。それは何を目的にですか？

国枝 一番はストレス解消ですね。引退して最初に車いすバスケット始めました。テニスを始める前に友達とやっていたんです。もともとスポーツが好きで競技を始めたので、今もどうしてもスポーツに興味がいってしまふ。平日に働いている一般サラリーマンが、土日にスポーツで汗を流すというのがすごく分かるようになりました。

ところで引退して一番つまらない日って、何も無い日じゃないですか？ そんなことないですか？

村田 分かります。それこそ、はい。

国枝 現役の時って、何もない日はいい休養の日だったじゃないですか。引退して何もない日って、1日を無駄にしちゃうような感覚ってありません？

村田 アイデンティティーが確保されてないんですよ。ボクサーとして、世界チャンピオンとしてのアイデンティティーが確保されているから休みも休養なんですけど、それがなくなっちゃったら休みがただのダメな日になる。

アスリートの楽と苦

国枝 (引退後も) やっぱ悔いなく過ごしたいし、いろんなことにチャレンジしたいという気持ちはあります。だけどアスリートってめちゃくちゃ楽じゃないですか。目標を持つのが、僕もよく講演会とかで「目標を持つことの素晴らしさ」を話します。でも本当に引退するまで分からなかったのですが、何を目標にするかって結構難しい。目標を持つことの生き生きとした感じを知っているだけに、葛藤も大

きい。今、何が目標かというと「目標を持つことが目標」という感じなんです。

村田 アスリートが楽ってめちゃくちゃ分かります。だって自分の得意なことをやっていればお金が稼げちゃうし、褒められるし、アイデンティティーとしては確実に担保されるし、肉体的な痛みや、心拍数が上がってゼーゼーするとかはあるけど、それ以外のところでは考えると、アスリートでいるほど楽なことではなかったです。

国枝 そうですよ。本当にそれが、引退して、すぐ思ったこと。

村田 これ人に言われるとむかつくじゃないですか。アスリートでいるって楽だよって。何が分かるんだと思うんですけど、わが事になると思いますよね。**国枝** 思いますよね。自分の中でも、アスリート時代のあの充実感を知っているから、引退して、同じとまではいかないまでも、やっぱり何かやりたいことがほしいというのが現状です。

無と褒美

村田 引退の一番の理由は何ですか？

国枝 体は結構痛んでいましたね。腰も3年以上、ボールも拾えないような状態になったりするくらいでした。そこは一番の理由です。あとは東京パラリンピックで金メダルを獲って、本当にそこを目指して7、8年間やってきたので、大会後は燃え尽きたな、引退したいなという心境でした。でもウィンブルドンだけ勝っていなかったで頑張つて、ウィンブルドンで勝った時に、コート上でチームのみんなと抱き合つて「引退だわ、これでいいわ」と。当然、身体にむち打つてできるところはあつたんですけど、何かを成し遂げたいという野心がなくなつた時に、果たして続けることが正解なのかどうかすごく悩みました。

村田さんの引退の理由は何ですか？

村田 もうやる理由がなかったからです。ゴロフキ

ンという目標だった人とやって、自分がこれ以上ボクシングに求めるものがなければ、お金を稼いだところで、人の評価を気にしたところで、そんな移ろいやすく不確かなものを追いかけるだけの人生って馬鹿らしいと思った時に、戦う理由をなくしました。

国枝 どんなタイミングで最終決断しましたか？

村田 僕はゴロフキンとの試合が決まった瞬間からずっと決めていました。正直、2019年7月に世界タイトルを奪回した試合が、自分の中で唯一自信のあつた試合で、本当にやりたいボクシングができたので、これでもういいよと思つて。ゴロフキン戦は勝とうが負けようが、引退はしようと思つていました。だからその時点でもう負けてるんですね。本当にゴロフキンを踏み台にして次に行くんだという気持ちがあれば、多分、練習の内容も違つたと思います。だから負けるべくして負けた。最大の僕のご褒美は、勝つことでも、お金でもなくて、ボクシン



グを終えられることだったと思うんですよ。だから試合が終わった瞬間、リング上でニヤツって笑っているところがあるんです。あの顔は多分、どこかでホッとして安心した自分が出てたんじゃないかと思っています。

ストレスとキャリア

国枝 僕が最終的に引退を決めたのは運転している

時でした。23年の1月3日、初富士を見て「登ったな」と「今度は下りよう」と。やはりその時だなと何となく悟りました。

話は変わりますが、コロナはキャリアに影響しましたか？

村田 逆にコロナの時期に2年数カ月間試合ができなかったことは、むしろキャリアの中で良かったなと思っています。チャンピオンになるとか、成功することは経験できますが、外的な要因で2年以上何回も試合を延期されるという経験は多分できない。その経験ができたことは、自分の人生の中でも大きなキャリアだと思うので、自分にとってあの時期はネガティブではなくて、いいキャリアをくれたなという感じです。

国枝 自分は海外に遠征する競技なので入国だとか、精神的なストレスが相当ありました。ロシアとウクライナの戦争も、欧州に行くのに北極を回ったりして、プラス4、5時間になって、しんどいなって思

う時もありました。そういう外的なストレスもトータルで考えると、引退の決断にかかわっていると思うことがありますね。

ところで村田さんはまだやろうと思えばやれる？

村田 やれるんですけど、これからの自分の人生を考えたときに、例えば今はAmazonというすごく大きな資本も入っているので、ワンマツチで復帰すればお金を稼ぐことはできるとは思いますが、でも所詮は期間限定じゃないですか。それをいくらやっても、結局どこかでタイムリミットが来る。そこに行くのは賢いとは思えないんです。だったら自分は人の役に立てるような人材として、ボクシングではないところでも活躍できる人間になった方がいいというのがあって、これからの時間を戦うことに費やすより、未来のために使うという選択をします。

国枝さんはまた試合をしたいと思うことあります？

国枝 はい。実際に週1回くらい練習すると、まああでるんですよ。現役時代に打ちにくいコースもあつたけど、ノープレッシャーだと打てちゃう時がある。「打てるな」と。そもそも楽しくてテニスを始めたので、たまに試合したいなんて思う時もあるんですよ。最近「やりたいんだつたらすればいいじゃない」と思う自分がいる。別に復帰というわけじゃなくて、ランキングを上げたり、世界を転戦するわけじゃないけど、練習の延長線上で試合をしたと思うのは自然な気持ちかなと思っています。

長田 私からお二人に少し質問させてください。引退した今、あらためて振り返って、スポーツでトップを極めて、一番養われたものは何でしょう？

国枝 自立心、決断力ですかね。自分で飛行機やホテルを予約して、ダブルスのパートナーを探して、大会の練習コートも確保して……基本的に全部自分でやらなきゃいけないスポーツなんです。そういう

う環境の中で、いかに自分一人で生きていくかという能力を身に付けてきてくれたと思うし、あと決断力に関してはコート上でどんな戦略で戦うのか、どのショットを選択するのか常に決断する。その意味ですごく決断力が養われたと思います。

村田 何だろうなあ。内省する心みたいなものはありますね。目の前の成し遂げたいことに一生懸命になる。一生懸命だからこそ省みて、内省する。そんな癖がついたのはよかったかな。あと（スポーツには）人生観が凝縮されていますよね。良い時もあれば悪い時もある。一つ一つの出来事に反応、リアクションしないといけない。（スポーツをやっている）短い期間に良い悪いが繰り返されるので、人生の縮図みたいなところがあります。人より早く、そういう経験をするようになるのが、ボクシングだけではなく、スポーツの良いところ、魅力でした。

長田 村田さんは自著で「自己肯定感を探す旅だった」とも語っています。

夢とゴール

村田 スポーツは自分と向き合うためのツールではない。ゴールがない、所詮スポーツですから。ゴールがないので、それをもって自分の価値とするのはもの凄く寂しいことだと思うんですよ。そうならないようにという心がけですよ。

長田 ところで夢を達成したアスリートは幸せになれるのか？ これは大命題だと思うのですが、いかがですか？

国枝 夢を達成したアスリートは幸せになれるか？ということとは、実は結構現役時代にも考えました。勝てばその瞬間は幸せかもしれない。でも、結局プレッシャーはより強くなってくるわけで、勝たなければいけないというマインドになって、テニス界でメンタルヘルスみたいなこともよく言われます。成功と幸せは別にイコールじゃないんだろーなと思います。結構負けけても楽しそうな人はいるじゃない

ですか。例えばお金を持っている人がイコール幸せかというと別にそうじゃないだろうし。

村田 国枝さんと同じ年の二個上の兄がいるんですけど、金は全然ないんですけど、サーフィンが大好きで、日本中いろいろ回って、種子島が最高だと言って、種子島に引越するんだって言って、本当に金を貯めて引越して、サーフィンしながら生活していて、オレの幸せ度と比べると変わらないと



ころか、兄貴の方が上だなと思っちゃうところもある。

国枝 テニスを離れて、人生においてどっちが幸せかということを考えると、あんな生き方もいいなつて何となく思う時はありますね。だから幸せって別に成功とかそんなに関係してないんじゃないかって思います。

村田 ハッピーというと常にハッピーみたいな感じで思うんですけど、夢を叶えたら何もかも満たされずつとハッピーでいられるのかと言うと波がある。夢を叶えたら四六時中ハッピーな満足感に満ちあふれたような日々を生きたいって思って、夢を叶えちゃうと、実はそうじゃなかったという不満が出るわけです。だから夢を叶えることが幸せで、夢が叶わないことが幸せじゃないと、簡単に言っているじゃないと思う。幸せかどうか、自分はまだ答えが出ていないですね。人生なので。幸せになりたいとか、後悔のない人生を生きるために、これからがあると

思うので。

国枝 ところで引退してよく聞かれるのですが「これから何されるんですか?」。これ答えにくくないですか?

村田 分かります。今やつと終わったところなんだって言う。

国枝 「国枝これから何するんだ?」というのは皆さん気になるところかもしれないし、そこで僕が5年くらい「何も無い」という状態が続いたら、みんなを不安にさせてしまうかもしれないけど、そこは時間も気にしながら、ゆっくり探したいなっと思ってます。でも自分が、いかに生き生きできるか、楽しめるかというのが一番の物差しですね。

村田 先日「40歳で不惑だよ。惑わないんだよ」って言われました。だから「村田くん、意外と時間ないんだよ。自分の道を決めるのは。とにかくやってみな。今やろうと思ってることをとにかくやれ」

って言われた瞬間、「そうだな、意外と時間ないな」と思っ、何かしら始めようと、始めるところからがスタートかなと思いはじめました。

国枝 そう。それこそ僕も1日もつたいなかったという気持ちになっってしまうところもあるので、何かにチャレンジし続ける人生を歩み続けたいと思ってるし、その意味でもアメリカに行こうという気持ちになりました。

村田 アメリカに行くことが目的ではなくて、アメリカに行くことは、それこそツールで、人生にチャレンジしていくということが大前提としてあるんですね。

国枝 当然、引退してまだビジョンはないわけですよ。それこそテニスに代わる熱量のものはないかもしれない。それでも何かをやりたいと思える人生をこれからも送りたいと思う。その中でやりたいことの選択肢をもっと増やしていきたいのかなと。国内だったらコーチや大会運営も含めていくらでもあるかも

しれない。でも、より視野を広げるために、アメリカのテニス協会から話もあったので、今年は1年アメリカでチャレンジしてみようと思っています。選手を教える過程で語学力もついてくると思うし、終わった後にいろんな選択肢がまた増える、やりたいことが見つかるというのも、今は期待しているところです。

村田 僕も今、まさにキャリアアランジションの時期です。よく「I」字型人材って言いますよね。

国枝 どういうことですか？

村田 僕らって「I」なんです。飛び抜けたものがある。飛び抜けたものがあるんだけど、一般教養だったり、世間をちゃんと見るというところがなくて、狭い中で非常にバランスが悪い。つまり、みんなが得たい特殊なものを持つているけど、横線の人間としての幅が足りない。だから僕は社会をしつかり、広く知っていくという観点をもつと持つことが大事だと思っていて、土台となるところを広げて、その

上でもう一回、ボクシング界に戻ってくるのであれば、それこそ違う形で貢献できると思いますね。

国枝 すごく共感します。何かあります？ ビジョン的なもの。ジム経営とか？

村田 後進の指導は僕の役割じゃない気がするなあ。教えることのスペシャリストは他にもいると思う。今まで築いてきた自分のキャリアをやっぱりうまく生かすべきじゃないかなと。名前だったり、発信力だったりとか、実績もあるので、それを生かすキャリアの方がいいだろうと思うんですけど、観点みないなものが少ないので、まずはその観点を広げることからスタートしたい。国枝さんと同じように、何かを今探す旅のリスタートかなって感じがしますね。

ライスワークとライフワーク

長田 お二人は現役時代に引退後のプランを考えていましたか？

国枝 実は現役時代にも引退したら何をしようかと考

えていました。本当に考えても考えても出てこない
ので、これは引退しないと分らないなと思ったん
です。それで今、引退して約1年たってますけど、
いまだに分らない。最初の3カ月はどうしたもの
かと思っただし、本当に引退してよかったのかなって
一瞬よぎった時も結構ありました。でも今は随分と
落ち着きました。先ほど話した、サラリーマンが土
日にスポーツするような感じに変わってからは、ス
ポーツとの付き合い方、距離感を自分の中で見いだ
した部分もあります。

村田 (現役時代に引退後のことは) 想像していな
かったけど、今は悪くないって感じです。ちよつと
しんどいなというアイデンティティーの喪失時期も
あったんですけど、その時期に慣れて。ただそれは
安定的ではなくて、例えばボクシングの試合の解説
に行ったりすると、「自分の方がすげえ」とか「何
でオレが解説しているんだろう」という気持ちにな
ったりする。でもその気持ちが四六時中ではなくて、

動きがある。そんな感じの日々ですね。

長田 今も心に穴が開いているような感じですか？
国枝 穴は開いていると思いますよ。いろんな仕事
をする中で時に埋まったりするし、やつぱり開いち
やっている感覚も正直あります。引退する時にユニ
クロの社長から「これからどうする？」と言われて
「講演の仕事とか」という話をしたら、「それ全部副
業だぞ」って言われたんです。本業を見つけないと
人生つまらんぞって。すぐグサツと胸に刺さって、
今でも心に留めています。

村田 講演も解説も副業ではない。メインジョブ
じゃない。言い方を変えるとライスワークであって、
ライフワークじゃないですね。何となくライフワー
クは失っているかなという感じはしますね。

村田 我々、本当に一本のことをやりすぎたんです
よね。このまま積み重ねていくもので生きていける
といえば生きていけるんだけど、それってどうなん

だろうと思うわけです。10代の頃からテニスやボクシングをやってきて、その頃の熱みたいな気持ちって、はつきり言ってもう持てないと思うんですよ。

国枝 いやだなあ。悲しいなあ。でもそれも分かります。

村田 みんな夢ってもつと先にあるのに、若くして叶ってしまつて。あと「セカンドキャリア」つて言葉。僕嫌いだつたんです。人生一度きりなのに、なんだ二回目みたいになつて思つていて。その言葉を使うのは嫌だなと思つていたんですけど、今実際に引退して思うのは、本当にセカンドだなつて。リストアートでもいいし、いろんな言い方があると思いますけど、一回ある意味では区切りはついたのかなと思います。ピリオドみたいなのがポンと。

国枝 セカンドだなつて、それは思いますね。スポーツ選手はきつと通る道だと思うし、それぞれがきつと悩みながら過ごしているんだらうなと、引退している方々をそういう目で見るようになりました。

見方が変わりました。

村田 大変恐縮ではあるんですが、国枝さんと対談させていただいて、あまりにも悩みの共通点というか、陥っているシチュエーションがすごく多くて、安心させられました。あの国枝慎吾が「ないよね目標」「今がそれ見つけに行く時間だよ」と、普通に悩んでいるということに対して、オレそんなじやダメだと思つていたけど、あ、いいんだみたいな、ちよつと安心させられました。本当にありがとうございます。

国枝 だからこそ今回、対談したかったです。きつと引退したアスリートはこのマインドになると思うんですよ。特に成功されている方が、そこを去つた後の人生の歩み方は非常に難しいというか、悩むところもある。これからどうやって自分の人生を設計していくかというのは、一つ何か共有したかったので、今回の対談は僕の人生にとつてもすごくいい時間になりました。

特集

トップアスリートの
セカンドキャリア

山口香氏が語るセカンドキャリア

——女子柔道初の五輪メダリスト

構成・写真 山内嘉治

山口 香（やまぐち・かおり）1964（昭39）年東京都生まれ。6歳から柔道を始め、13歳の時から全日本体重別10連覇。女子柔道のパイオニアとして活躍し、第3回世界女子柔道選手権（1984）で日本女子初の金メダル。ソウル五輪（1988）で銅メダル。引退後はJOC理事など要職を歴任。現在は筑波大学で教鞭をとる傍ら、スポーツの普及発展、ダイバーシティの推進に務めている。

外庄と競技

私が生まれたのは、最初の東京五輪が開催された1964年でした。柔道を始めたのは、テレビドラマの「姿三四郎」を見て、その姿に憧れたからです。でも当時は、「女の子に柔道なんてやらせてはダメ」と言われていた時代。そうやって柔道を断られた記憶がありますね。この言葉は男女差別というよりも、柔道場に男の子しかいなかった競技環境から生まれるように思います。男の子しかいない中で女の子ひとりだけ柔道を習うのは難しいんじゃないか。よく考えなさいと諭されたという言い方が正しいかもしれません。

そんな中、中学2年生の時に初めて女子の柔道大会が開催されました。そのきっかけが「外庄」です。64年の東京五輪では、柔道4階級のうち無差別級でオランダのアントン・ヘーシンクが神永昭夫を破り、金メダルを獲得しました。これは日本柔道界には大

ショックでしたが世界柔道界にとっても大きな出来事だったと思います。日本が全階級を制覇しなかったことは、後に柔道が欧州に広まる要因になったのではないのでしょうか。そうして柔道が海外で広まり女性も関わり始める中で、「なぜ女性の世界選手権や五輪の女子柔道がないんだ？」という声が上がるようになりました。その状況下で国際柔道連盟は選択に迫られ、世界5大陸のうち3大陸で女子の試合が始まれば女子柔道の世界選手権を開催すると決定したんです。

そして女子の世界選手権がいよいよ始まるとなり、「試合で勝てる選手」を発掘すべく1978年に女子の全日本選手権が開催されました。ちなみに、私は東京生まれ東京育ちだったので全日本選手権の出場にあたっては東京予選に出場したんです。4階級あるうちの一番軽い50キロ級。何人が予選に出たと思います？ たったの5人ですよ。だつたらリーグ戦やれよって思いませんか？ しかし、それを2の山

と3の山から構成されるトーナメント方式にして、私はくじ運がよかったので前者のグループに入りしました。「2つ勝てば優勝か」なんて思っていたら、なんと相手のひとりが体重オーバーでまさかの失格。1回勝ただけで全日本選手権への出場が叶いました。何が言いたいかというと、当時の女子柔道における競技人口はその程度だったということです。

とはいえ、試合を開催したことには大きな意味がありました。最初の東京予選こそ5人しかいなかった50キロ級の選手が、回を追うごとに出場者が増えていったんです。これは、試合が選手にとっていかに大切な目標になるかという事実を示しているように思います。そうして、現在の日本における女子柔道の競技人口は当時に比べ飛躍的に増加。日本の女子柔道が発展を遂げる中で、私自身も色々なチャンスをもらい今に至ります。

現役引退した年には大学で助手になり、それ以来ずっと大学教員のキャリアを歩んでいます。一方で、

解説者を務めたり、スポーツ以外のテレビ番組に出演したりと、タレントのような活動をしていた時期もありました。ではなぜ、タレントの道に進まなかったのか。やつぱり自分の居場所は、テレビの世界にはないんじゃないかという思いがありました。大学でのキャリアをしつかり積みながら、それ以外はやれる時にやろうというスタンスでしたね。女子柔道もまだまだ宣伝が必要だったのです。これが引退直後の私のキャリアでした。

昭和の就職・平成の企業

若い人は知らないかもしれませんが、かつては高校や大学卒業後にスポーツを続ける場合、ほとんどの人は会社員になりました。企業に就職し、実業団に在籍するケースがほとんどだったわけです。これがどういうことかと言うと、引退後のキャリアがある意味で担保されていたという事実。競技から退いても居場所があった。自分が望めば、定年を迎える

まで所属先にいられた。例えば、東京五輪でヘーシ
ンクに敗れた神永さんは新日鉄の所属。現役引退後
は、そこで会社員をしながら柔道のコーチや全日本
柔道連盟の役員などをしていたんです。つまり、セ
ーフティネットが用意されていた。それが昭和の
時代です。

平成はどうだったか。私が現役引退した直後にバ
ブルが崩壊しました。リーマンショックもそうです
が、こうした大きな景気後退はとりわけチームスポ
ーツに大きな影響を及ぼしました。お金がかかるん
ですよ。雇っている人数が違う。そして、バブル崩
壊直後に起きたのが「ドミノ現象」。一つの企業が
チームを維持できないと手放したところ、他も皆そ
ろって右に倣えをしたんです。どこかが手放す瞬間
を見極めようとしていたんでしょうね。先陣を切る
のはなかなか勇気が要る一方で、一社でも大企業が
「スポーツはもういい」と言った瞬間、「じゃあうち
も」と相次いで撤退を表明しました。

かたや、この状況は日本のスポーツ界においてプ
ロ化を進めるきっかけにもなったと思います。会社
の業績に左右されるのではなく、プロ化させること
により自分たちで持続的なチーム運営を実現させて
いこう、そうした機運が高まりました。

スポイルと甘やかし

プロ化は競技力向上に寄与しました。世界でどん
どんレベルが向上していくのに伴い、トップクラス
で活躍するためには、なるべく小さいうちから競技
を始めさせることも必要になってきたんです。実際
に保護者の中には物心がつく以前の小さい時から子
どもにスポーツをさせている人もいますし、もう生
まれた頃から靴を履かせているって状況もあるので
はないかと思われます。そうして次第に、仕事をし
ながら競技にも取り組む実業団という環境が時代に
そぐわなくなっていきました。

このプロ化に伴う育成・強化開始の低年齢化には

いくつか弊害も存在します。一つは、義務教育段階から競技活動の方が優先されてしまう現実。子どもたちが学校に行けないわけではありませんが、行ったり行けなかったり。競技活動を優先すると学校を休むことが多くなるでしょうし、そうなるとう勉強が遅れてしまい学校に行きたくなくなることもあるでしょう。もちろんサポート体制が整っている学校もありますが、その状況はある意味で「スポイル」とも呼べます。

私たちが学生の頃はまさにスポイルされていたと思います。日本酒の一升瓶を片手に教授を訪ね「遠征に行つたので……」と単位をお願いすると、「しようがないな。勝ってきたのか？ メダルを見せろ」みたいな、そんなやり取りも通用した時代でした。つまり、授業に出ていないにもかかわらずアスリートだからと大人が現状を黙認し、見て見ぬふりをして子どもたちを甘やかしていたわけです。

幼少期からスポーツに打ち込むことの弊害は他に

もあります。小さい頃からスポーツという狭い世界の中で長年過ごしていると「スポーツを嫌いな人がいるわけない」と思ってしまうんです。私は五輪に行く飛行機で他の乗客から「皆が五輪に入る人を応援しているわけじゃないのよ」と言われた記憶があります。五輪でこれから戦おうとしているにもかかわらず。そうした現実には確かにあるのに、世間とのギャップに気づけない。

勝利優先と一般社会

かと言って、勝利が何よりも優先される世界にいと非常に狭い価値観に陥りやすく抜け出しにくい。勝てば官軍なんですから。五輪精神などと言っても、大会を終えた頃には「勝たなきゃダメだ」と心の底から思いますよ。だって、帰りの飛行機の座席など待遇に差が生まれるので。飛行機から降りる時でも、「メダリストの方が先に出られますので、皆さんはお待ちください」と案内されます。待つの

は構いませんが、メダリストへの扱いは盛り上がる一方、メダルを獲得していなければ「ありがとう」や「苦労様」と一言もかけられることなく静かに帰らざるを得ないんです。何事もなかったかのようにこれが現実です。その状況を目の当たりにすると、「やっぱり勝たなきゃダメだな」と思うんです。石にかじりついてでも勝たなきゃダメだなと。それもまた五輪なんです。

また、指導者の中にはアスリートを社会から離す方がプラスになると考える人たちもいます。昔は、「男と付き合うな」「恋愛すると女は弱くなる」といったことや、髪を染めようものなら「色気づいたな。次は必ず負けるぞ」なんて言う人がいたくらいです。これは極端かもしれませんが、そうやってアスリートを世間から隔絶させスポーツの世界に閉じ込めようとする考えが指導者の間で今も一部残っています。

そのように甘やかされ社会から隔絶されていたと

しても、現役の間はアスリートに対しメディアは優しい。意外と嫌なことを聞いてこない。分かることだけ聞きますよってスタンスなんですけど、そういう状況下で育ったアスリートはいざ社会に出ていくとギャップを感じるんです。社会で暮らす誰もがスポーツを好きなわけではない、オリンピックが嫌いな人もいるわけですから。スポーツ選手として活躍できる時期の長さは個人によって違うものの、絶頂期のトップアスリートとして活躍できる期間は残念ながら限られている。引退という“その時”は必ず訪れますし、そこではじめて自分が育ってきたスポーツ界と社会は違うのだと気づかされます。

では、競技の第一線から退くとどうなるのか。まずプレッシャーやストレスから解放されます。私の場合、「ようし、色んなことができるぞ」という気持ちで“したいこと”に片っ端から手を出していきましたね。英国への留学をはじめ、ネイルやパーマ、ファッションも色々とチャレンジしました。絶対に

髪を染めるぞと思っていたので染めてみましたが、「遅咲きの不良」や「ヤンキー」なんて言われて（笑い）。それでも自分のしたいことだったんです。次の日を考えなくても良いという点では、お酒の飲み方も変わりましたね。でも、やりたいことは3カ月でやり尽くしました。「これ以上、何がしたいだろう」、そんな心境になったのを覚えています。

「ファミリー」とコンプレックス

すると次に、何が起きたか？ 喪失感に襲われました。現役だった頃には目標があり応援してくれる人がいた、そうした全てが無くなる。さらに、気力も無くなります。仕事をしていたとしても、目の前のものに向かつていく熱量が違うんです。孤独感にも襲われました。柔道は個人競技ですが、それまで周りにいてくれた人たちが「ファミリー」だったと実感するんです。ライバルであろうと、皆が自分にとってかけがえのない家族だったのだと。そういう

人たちが一気にいなくなってしまう気がするんです。自分は何者なの……、一気にアイデンティティを失った気がしました。多くのアスリートは現役引退と同時にこうした状態に必ず陥るんです。

また引退後は、アスリートに対する社会の見方にも気づきます。典型的なのが、「スポーツ選手だった割には○○ですよ」という言葉。私の場合、「柔道やってた割には」の枕詞をよく耳にしました。「柔道やってた割にはまともなことをしやべりますよね」なんて一言がその一例。他の大学教授が何か発言をしたとして、「いやー先生、さすがですね」なんていちいち言われるでしょうか？ これってつまり、評価がスポーツだけでされてきた事実を意味し、アスリートは強い先入観を持たれているってことなんです。そんな中で元アスリートが社会に出て行くのと、「所詮アスリート上がりだよ」という低評価の壁にも直面します。私は大学で教鞭を執っていますが、「ここにいかにも努力しても認めてもらえない

のではないか」、そんなある種のコンプレックスに苛まれます。自信のある方もいらつしやるでしょうけど、良くも悪くも元アスリートは社会で「異質な存在」として捉えられています。

プロ化が進む現在は、引退イコール収入減にもなります。加えて、やりたいことが見つからないのも引退したアスリートが抱える大きな問題ですね。スポーツ以外にできることは少ないのに、なぜかプライドは高い。私の知り合いで、ある時に突然リストラされたパイロットの方がいます。その方は「僕って飛行機しか操縦できないんですよ」と仰るんです。「すごいじゃないですか」と返しても、「いや、飛行機しか運転できないんで」と言うばかりで、それ以上言葉が出なくて。スポーツ選手もこの方と実は近いところがありますよ。スポーツを取ったらお前に何ができるんだ、と。

では、日本ではキャリアアトランジション（セカンドキャリアへの移行）において多様な選択肢が用

意されているでしょうか。海外では、引退後に医者や弁護士、または起業家として活躍する元アスリートの存在をよく見聞きます。日本でも最近ではそうした選択肢が増えてきているように思います。例えば、元ラグビー選手の福岡堅樹さんが大学の医学部へ進学したことは大きく報じられました。とはいえ、その報道が何を意味しているかと言うと、海外に比べてそうしたキャリア形成の例が日本ではまだ少ないということなんです。

なぜなのか。スポーツは本来、社会の一部として存在しているのですが、スポーツは特別な世界なんだという感覚が指導者やアスリートの中には若干あるんです。現役の頃、「スポーツ界の常識は社会の非常識」とよく言われました。上意下達や問答無用、我慢と根性など。スポーツ界の本当はおかしいかもしれないことが実際に世間ではどう捉えられているのか、社会との出入りを繰り返し返さないとその答えにたどり着けない。もちろん「我慢と根性」など、

いつの時代にも一定程度は必要な要素がありますが、スポーツ界が何を大事だから残し、何を変えていくのかという問いを放置し時代に合わせて進化していない可能性もあります。スポーツ界はこうした昭和な価値観を残したいんです。

強みと弱み

スポーツ選手が社会に出ようとする際にアピールできるポイントは何でしょう。私が就活生だった頃は「従順」でした。我慢強い、根性あります、どこにでも行きます、何でもやります。そういう姿勢がアピールポイントでしたし、採用側もそうした人材を求めている時代がありました。でも、現代だと人より我慢強く従順なのはAIやロボット。電気さえ与えておけば文句ひとつ言わず、ずっと働き続けてくれますから。じゃあ今、アスリートがそれに勝てますかってことなんです。

では、スポーツ選手の強みがどこにあるかという

と、緊張した場面でも局面を突破できる度胸や実行力に判断力、さらに柔軟な対応力ではないでしょうか。リーダーシップだって持ち併せています。我慢も根性もある、その上で何ができるかをこれからは示していかなければなりません。「我慢や根性だけなら、うちはいいんで」と言われてしまう可能性はありますし、この事実をスポーツ界が認めなければいけません。

キャリア教育についても話をしましょう。私たちが現役だった時代には、「退路を絶て」とよく言われました。引退後なんて考えているから中途半端なんだと。でも、この考え方は改める必要があります。というのも、自分に合ったキャリアを考えることについて自己分析なんです。選手自身が自分と向き合い強みや弱みを自覚することで競技力も向上し、引退後のキャリア形成にもつながる。

また、指導者には選手にスポーツ界以外の人たちと交流を持ち、視野を広く持つ重要性を説いてもら

いたい。アスリートだから知らなくていいでは決してありません。社会や世界はどう動いていて、その情報をどうやって得ればいいのか。同年代が知っていることくらいはせめてキャッチしておく必要があるだろうと。

メディア関係者の姿勢も大事です。ジャーニズや日本大学アメフト部のように、一度でも何か問題を起こそうものなら、そこまで叩く必要がありますかつてくらいそれまで平身低頭だったメディアからバッシングされますよね。このジェットコースターのような現象は、スポーツ界にも当てはまります。だからこそ、私はメディアの人たちに言いたい。普段からアスリートに厳しい質問をしてくださいと。最初はきちんと答えられなくてもいい。そうすれば、そこで気づきを得られるんです。「あんなことを聞かれたけど答えられなかった。じゃあ、ネットで調べてみよう」などと。そのような気づきがなければ、選手にとって甘やかされる状態は続いてしまうので

はないかと危惧します。

未来と願い

すでに申し上げた通り、アスリートにとっての引退はいつか来ます。夢を追う、挑戦することは素晴らしい。でも、人生は長いという事実を念頭に、選手生活の終わりが来た時にどうするべきかを家族も交えておく必要があるでしょう。私がアスリートのセカンドキャリアについて考える際に一番の願いとしているのは、どんな道に進んでもスポーツしていたことを後悔しない人生を送るという未来です。あの時にスポーツをやっていた、だからこそ幸せな人生を送れているんだという実感をどのライフステージでも持つてほしい。そう思えるキャリアを築けるように、私たちはこれからも制度作りやサポートを続けていく必要があると考えています。

(本稿は2023年10月15日、東京・新宿区早稲田大学戸山キャンパスで開催された日本スポーツ学会主催第126回「スポーツを語り合う会」を元に構成しました)

他国と比較する セカンドキャリア問題



どんなアスリート
も生涯現役でいら
れるわけではない。
日本特有の問題を
掘り下げるととも
に、スポーツ界から
のフィードバック
にも期待する。

取材・構成 長田渚左

菊 幸一（きく こういち）1957（昭和32）年富山県生まれ。1987年筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学、教育学博士（1988年、筑波大学）。以後、九州大学健康科学センター助手・専任講師、奈良女子大学健康科学センター助手・専任講師、奈良女子大学文学部助教授を経て、2008年より筑波大学体育系教授。2023年より国士舘大学体育学部体育学科特任教授。専門はスポーツ社会学。

——アスリートのセカンドキャリアの問題で日本ならではの特徴がありますか？

菊 あります。他の国にも問題がないわけではないですが、日本が特別に問題になるのはその構造です。競技スポーツの成績が学校の進学とヒモ付けられている点です。義務教育の中学校を終えて、高校に入学するには試験があるわけですが、高校への推薦制度が幅を利かせています。

——スポーツ推薦ですね。スポーツで好成績を残すと、その競技力が高く評価されて進学に影響します。そうですね。スポーツの競技力だけで高校へも大学へも推薦されて入学できる。ソーシャルモビリティ(Social mobility、個人の社会的地位の移動)という言い方をしますが、スポーツさえしていれば個人の地位が上昇するという見解です。

——コーチも短い期間でガンガン指導をして結果を出す。それで自分の地位を保つことになりますね。

スポーツゴジラ46号に掲載した第7回セカンドキャリア・フォーラムに、元プロ野球選手2人に登場していただきましたが、高校時代は朝夕に練習があり、授業中に眠っていないととても体がもたない……という体験談がリアルでした。まさにスポーツ漬けの毎日で、勉強などしている時間がない様子が語られました。

菊 数年前にコロナ禍でさまざまなスポーツの全国大会が中止されたことがありましたね。

——はい。インターハイや秋季大会などの全国大会が軒並み中止になりました。

菊 そうですね。それで主に私学ですが、学校側は推薦枠が埋められなくてとても困ったわけです。入試は行っても形式的なもので、いかにスポーツのランキングでの指標が重要か、ということですね。

——つまり学校側にとって選手の青田買いが最重要テーマで、学業成績は二の次であることが可視化された事例だったのですね。他の国では学業とスポ

ーツの関係はいかがでしょうか。

16歳で自分をみつめる

菊 ヨーロッパのシステムは16歳までは義務教育を受けますが、それ以降については、就職するのか、それとも上の学校を目指すのか？ 明確な選択になります。フランスならばバカロレア（le Baccalauréat en France、高校卒業証明書）のような国家試験で、大学受験や、大学に通うことを希望するなら取得しなければならない資格試験があります。

——満点を取る必要はないのですか？

菊 車の運転免許証のように60点以上なら合格するくらいのレベルですが、日本のようにスポーツしなくても合格するという人はいません。オリンピックを目指す競技者であっても、試験に合格するためには、集中的に合宿までして勉強をしないといけません。

——当然ですよ。競技をやめた後の人生の方が長いのですから、ある程度の学力を身に付けておくことは必須だと思います。ちなみに日本では義務教育を終えると卒業証書『教育課程を修了したことを証する』が出ますが……。

菊 確かにそれは出ます。ですが、それはカリキュラムを終えたということに過ぎません。

スポーツ推薦とその後

——履修と修得は別物ですか。

菊 別物です。欧州などでは履修したことを知識として修得できているかという試験を受けないと、先に進めない仕組みです。日本のようにスポーツが得意だから進学できるというようなことは、まず考えられない。

——日本では学力が低いのに、スポーツ推薦で高校、大学へと進学することが、これまであまり問題視されていませんでした。なぜでしょうか？

菊 企業がトップアスリートの受け皿でした。19

70年代半ばぐらいまでは高度経済成長期で、アスリートは体育会系と呼んで採用していました。企業内研修を徹底させて、上司の言うことを深く考えずに、「ハイ、ハイ」と従う社員が好まれました。終身雇用でもありましたし、企業の色に染まっただけで、根性があると評価されました。企業スポーツというカタチでもアスリートは支えられていました。80年代に入ると低経済成長期に移り、薄利多売でも商品が大量に売ることが難しくなっていました。その後、株式や不動産投資が加速して株価や土地の値段が急騰します。しかし、バブルが崩壊した90年代以降、企業はスポーツを次々と手放してゆきます。グローバル化の中で世界と戦っていかないと企業そのものが生き残れなくなり、従来の体育会系の能力だけでは通用しないことあらわも露になりました。

——社会とアスリートは密接に関わっていますね。

近年、米国でバスケットボールの有名選手が学業成績が悪くて試合に出場できないという話題がありました。

菊 はい、はい。実は80年代の米国には大きな問題がありました。小学生ぐらいの読み書きしかできなくても、フットボールがうまければ大学に行ける時代がありました。NCAA（全米大学体育協会）も大学スポーツを盛んにするために、有望選手に奨学金を出しました。当然ですが、大学に入っても卒業できない選手が続出しました。それ以外にも身体能力の優れた黒人選手は、一時期は活躍してお金を稼ぐが、スポーツで活躍できなくなると使い捨てにされてソーシャルデス（Social death、社会的な死）と見なされ、人種差別や貧困が深刻な問題になりました。今はNCAAから奨学金をもらうとしても、学業である程度の成績を収めないと認められません。だから今の選手は競技を続けるためにも勉強しなければならないという意識が強い。そ

んな大学全体の卒業率向上方策によって、アスリートのセカンドキャリアへの移行も、安定してきたようです。

社会とスポーツスキル

——さてヨーロッパ諸国のトップアスリートのライフティーンネットはどのようなものがありますか？
菊 トップアスリートの受け皿は、国家が準備する公務員職、例えば国境警備、警察、消防などのそれぞれの職種をカリキュラム化して、「お試し」で3〜5年トライする制度があります。もちろんその間、生活が保障されて手当も出ます。

——仕事の「お試し」ができるというのは有効ですよ。スポーツ以外の社会や人に接することも大切でしょうし、一方でスポーツで身につけたスキルがどのように生かせるのか考える貴重な機会にもなります。

いずれにしても日本のセカンドキャリアの問題は、

アスリート本人はもちろん、学校やコーチ、国、企業も含めた全体で、あらゆる問題点をあぶり出して、変革する必要があると思います。

近年、競技引退後に医者や弁護士、公認会計士などの難関資格を取得して、充実したセカンドキャリアの扉を開く元トップアスリートも出てきました。その人たちが特別に優秀で別格だと感じるのではなく、自分の資質を的確に見つめて、それまでの人生で身につけてきたスキルを尊重しながら、ゼロからのスタートを楽しんで取り組む余裕も大切ですよ。それには自分のライフストーリーを書いてみる必要があるように思います。

フィードバックを期待

菊 そうですね。実はアスリートのセカンドキャリアは、多くの一般人も含めてその重要性に気づいていない点もあると思います。人間は死ぬまで、そのステージごとに発揮できる力を備えていると思うの

です。アスリートだけの問題ではなく、つまり私たち一人一人のテーマでもあります。人生は若い時代だけが輝かしいわけではない。発育のピークは青少年期であっても、さまざまな教養や知性の経験を得て、身体は動きにくくなっても異なる充実した職業や人生を楽しんでゆけるはずです。

——そこにアスリート時代に身につけた、かけ替えない独自のスキル、考え方や判断力や洞察力が、もしプラスされると考えれば鬼に金棒ですか？

菊　そうです。この問題は、一般人にとっても汎用はんよう性の高いテーマであり、その向こう側にある社会課題が認識されることで、さらに一般の人たちへのフイードバックも期待されます。

